

教会学校教案誌

2008.1.2.3月号

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

No.28

2008年1～3月カリキュラム（第28号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの二年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
1月6日 新年	エルサレム会議	使徒15:1-21	使徒15:11	63
	教会は聖霊に導かれて「恵みのみ」の真理を確認した。教会の交わりを大切に			
1月13日	異邦人への伝道	使徒16:6-15	テモテニ4:2a	64 65
	聖霊に押し出されて、異邦人伝道に向かうパウロ。その姿に学ぼう			
1月20日	看守の救い	使徒16:16-34	コロサイ1:13	75
	迫害を用いてさえ成し遂げられる救いのみわざ。神のご計画に信頼しよう			
1月27日	アレオパゴス説教	使徒17:16-34	使徒17:24b	66
	パウロの異邦人向け説教。偶像の神々を捨てて、まことの神に立ち帰ろう			
2月3日	土の器なれど	コリント二4:1-15	コリント二12:10b	(76)
	死すべき土の器にキリストの復活の命が現れる。宝の器であることを喜ぼう			
2月10日 レント（信教）	競争を走り抜くパウロ	フィリピ3:12-21	コロサイ3:1	(76)
	再臨のキリストを待ち望みつつ、ひたすら走り抜く信仰の姿にならおう			
2月17日 レント	喜びへと励ますペトロ	ペトロ一1:3-9	ペトロ一1:8	(76)
	生き生きとした希望をいただき、言葉では言い尽くせない喜びに生きよう			
2月24日 レント	天上のキリスト	黙示録1:9-20	イザヤ55:11	77
	天上にあって教会をご支配しておられるキリストの御姿を仰ごう			
3月2日 レント	天上の礼拝	黙示録4章	黙示録4:8c	
	地上の礼拝は天上の礼拝に連なっている。礼拝の恵みを喜ぼう			
3月9日 レント	新しい天と新しい地	黙示録21:1-8	黙示録21:4b	77
	神人と共に住みたもう礼拝の完成。新しい天と新しい地を待ち望もう			
3月16日 受難週	受難・十字架のキリスト	マタイ27:45-56	マタイ27:54b	66
	わたしたちのために捨てられた神の御子の恵みにあずかる			
3月23日 イースター	復活祭・復活のキリスト	マタイ28:1-10	マタイ28:7b	67
	「恐れるな」との復活のキリストの御声に耳を傾け、復活を喜ぼう			
3月30日	再臨を待ち望む	黙示録22:6-21	黙示録22:20b	
	わたしたちの希望はキリストの再臨にかかっている。キリストを待ち望もう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2008年1・2・3月カリキュラム	
まえがき	梶浦和城 4
巻頭説教	袴田康裕 5
日曜学校・教会学校訪問	
銚子栄光伝道所日曜学校の紹介	小林義信 10
聖書研究・説教展開例・分級展開例 15	
1月6日	16
1月13日	23
1月20日	30
1月27日	37
2月3日	44
2月10日	51
2月17日	58
2月24日	65
3月2日	72
3月9日	79
3月16日	86
3月23日	93
3月30日	100
成人科	107
いのちのパン（こども聖書日課） 113	
2008年4・5・6月カリキュラム 127	
2008年度年間カリキュラム 128	
自由募金のお願い 130	
執筆者よりひとこと・あとがき 131	

まえがき

梶浦和城（豊明教会牧師）

先日、遅まきながらの夏期休暇をいただきまして、夫婦で四国に行つてまいりました。初めは、沖縄に行く予定だったのですが、台風9号に妨げられまして、急遽行き先を変更しての旅行でした。ぎりぎりの変更でしたが、これも主のご計画と導きによることと信じ、旅の旅程を主にお任せいたしました。

淡路島経由で四国に入り、高松教会と高松東教会を訪れまして、その後、一気に南下して高知県に行きました。主日には、山田教会の礼拝に出席させていただいて、牧田吉和先生の説教を聞くことができ、大変恵まれた礼拝の時を過ごさせていただきました。いつもは説教を準備して語る側ですから、このような機会に大先輩の説教を聞けるのは、靈的に生き返る思いがいたしました。

さて、翌日、せっかく高知に来たのだからということで、どこか良い観光地はないかと、教会の方々にお聞きしましたら、アンパンマンミュージアムに行ってみてはどうかと勧められました（もちろん、他にも幾つか勧められましたが）。最初、私たち夫婦は、「えっ？ アンパンマンミュージアムですか？ どうか～」とためらっていたのですが、まあ取り敢えず行ってみようということになり、牧田悦子姉に連れて行っていただいて、入ってみました。すると、思っていたよりも、なかなかどうして、子供でなくても楽しめる場所でした。小さい頃、たぶん幼稚園の時に見た絵本のアンパンマンがあって、とても懐かしい思いがいたしました。そうそう、幼い頃に見たアンパンマンはこんなだった、それがアニメになって、大ブレイクす

るなんて、全然想像できなかったなあ、と感慨深く見学しておりました。

作者のやなせたかしさんの生涯も、いろんな絵や写真などで紹介されていましたが、その中で印象に残りましたのは、アンパンマンは他のヒーローと違って、誰かと戦って勝利するようなヒーローではなく、ただ困っている人やお腹が空いている子供のために、自分の体の一部である顔を犠牲にして助けるだけの、そういうヒーローなんだと、確かそんなようなことを語っておられる記事でした。そこには、人を助けるっていうのは、自分の体の一部がもぎとられるような痛みや辛さを伴ってこそ、本当にできるものなんだという、やなせたかしさんの信念みたいなものがありました。その言葉に、何故だかとても心惹かれました。

後で、やなせたかしさんがクリスチャンだとお聞きして、なるほどと思いました。つまり、アンパンマンには、イエス様の姿が投影されているんです。五千人の給食の奇跡や、聖餐式のことから分かるように、イエス様こそ、御自身の体の一部どころか、全存在をもって、命を捧げてまで、私たちを養い、救ってくださるお方です。そのお姿を、やなせたかしさんは、アンパンマンに託しているんじゃないかと思ったりしたのです。

そんなアンパンマンのようなイエス様を、子供たちに紹介できたら、また、そのようなイエス様に助けてもらったり、養ってもらったりすることの楽しさを、子供たちと一緒に味わえたら本当に幸いです。

「思い悩むな」

—マタイによる福音書6章25～30節による説教—

袴田康裕（園田教会牧師）

だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。（マタイによる福音書6章25～30節）

「思い悩むな」とは、決していたずらな楽観主義の勧めではありません。また、食べることや着るもののことを全く考えない、無計画な生活を勧めているのでもありません。私たちが与えられた生をまじめに生きようとする時、悩みがあるのは当然です。かつて日本でも、まさに明日の食べる物に思い悩んだ時代がありました。そして今日は本当に豊かになりましたが、それで思い悩みが無くなった訳ではありません。むしろ増えているようにさえ感じる面もあるのではないのでしょうか。悩みはもちろん経済のことだけではなく、健康のこと、家族のこと、将来のことなど、まさに思い悩みは尽きないのです。

イエス様はそういった悩みを持つこと自体を否定されたのでしょうか。そうではありません。地上を生きている限り、私たちは悩みから解放されることはないのです。そのような悩みを主に否定されません。しかし、その思い悩みが度を越えたものとなるならば、それは問題となります。主は過度な思い悩みをここで非難してお

られるのです。

では、そのような思い悩みの何が問題なのでしょう。

第一に、そのような思い悩みが、人間存在を支配するようになるからです。25節に「自分の命のことで思い悩むな」とありました。この「命」は人間存在全体を意味します。つまり、思い煩いに身を委ねていく時、人間存在全体がそれに支配されてしまうのです。生きるための中心が、悩みで覆われてしまうのです。生きるために悩みがあるのではなくて、生きることそのものが思い悩みになってしまう。そういうことが起こるのです。

思い悩みの持つ第二の問題点は、それが御言葉をふさぐことになるからです。ここで「思い悩む」と訳されている動詞やその名詞形が、新約聖書の中でどのように用いられているかを調べて見ますと、次のような箇所で見られます。

まず、マタイによる福音書13章にある「種をまく人のたとえ」です。イエス様は茨の中に

落ちた種について説明して言われました。

「茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。」

世の思い煩いは、御言葉をふさいでしまって、実を实らせないのです。そして思い煩いに身をすり減らしてしまう。ルカによる福音書の中で、主はこうも言われました。

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意なさい。」(21:34)

生活の煩いは、心を鈍くするのです。心が鈍くなれば、御言葉をふさいでしまう。御言葉が語られていても、それを本当に聞くことができなくなる。恵みの御言葉によって、お前を完全に救った、もう大丈夫だ、わたしに任せなさい、と御言葉を通して神様が語られても、自分の側でこうだ、こうに違いないと考えて、御言葉をふさいでしまう。そして悲観的な方にばかり考えるのです。

それゆえ、思い悩みの第三の問題点は、神様を見失うようになるということです。ある神学者ははっきりと「思い煩いは偶像崇拜である」と述べています。過度の思い煩いというのは、結局、自分で自分のことをすべて背負い込もうとすることから生じるのです。思い悩むのは自分に執着しているからです。自分のことだけに夢中になって、本当にそこにある神様の目的に心を向けることがないのです。

神様は、わたしたち一人ひとりの存在に目的を持たれ、それゆえに今も生かして下さいます。私たちは、その神様に信頼して生きるべきであるのに、そこに目を留めようとしないのです。そして時には、神様のためと言いながら、自分のことに夢中になっていることさえある。自分に執着する者は、結局思い煩いが絶えないのです。そして、神様の恵みをも見失いかねないのです。

イエス様は、思い悩むことの持つこのような問題の故に、はっきりと「思い悩むな」と命じ

られました。イエス様がここで例示されているように、命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切です。しかし、思い悩む時人は、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかというそのような問題が、最大の問題となってしまいます。食べ物は命のためにあり、着るものは体のためにあるのですが、それが逆転して、食べ物や衣服の問題が一番大事になるのです。目に見えるものが一番大事になる。そして、本当に一番大切なものを見失うということが起こるのです。

命は、神様が与えてくださったものです。その命の尊さを、誰よりも神様をご存知です。ですから、その命のために必要な食べ物や衣服を、神様がくださらないはずはありません。

神様に目を上げるとき、初めて人は、一番大切なものを一番にすることができるのです。しかし、神様を見失うならば、本末転倒が起こって、思い悩むことになるのです。

思い悩んでも何も解決はしません。ですから、イエス様は「思い悩むな」と言われるのです。自分自身やこの世のものに目を留めるのではなく、いつも神様に目を上げるように求めておられるのです。

続いて主は、思い悩まなくても良いことを示すために、三つの例を上げられました。第一が26節にある「空の鳥」です。

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」

イエス様は「空の鳥をよく見なさい」と言われました。鳥は、種を蒔くことも、刈り入れも、蔵に納めることもしません。人間のように、将来のために蓄えて、少しでも安定した生活を確保しようとする態度は全くありません。しかし、鳥たちは養われています。彼らには何の思い煩いもありません。神様が保護しておられるから

です。

イエス様はその鳥と比較して、人間がはるかに価値ある者であることを指摘しておられます。創世記にあるように、人間は他の動物とは違って、神の形を持つ特別な存在として創造されました。人間は神様の目から見て、特別に大きな価値のある存在なのです。

ですから、人間に比べれば取るに足りないあの空の鳥たちに対してさえ、神様があれほどの保護を与えておられるのですから、その神様が人間に対してそれ以上の保護を与えてくださらないはずはないのです。まして、イエス様の弟子である私たちは、神の子供とされています。特別な神様の愛と配慮のもとにあるのです。

自分の力で自分が生きるために必要なものを獲得しなければならない、という思い悩みを捨てて、私たちを養ってくださる神様を信頼するようにと、主は言われました。私たちは、自分で自分の価値を高めようとあくせくするのではなく、神様によって大きな価値ある存在とされていることを、しっかりと受け止めることが大切なのです。

第二の例は人間の寿命です。イエス様は27節で言われました。

「あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」

寿命と訳されている言葉は、背丈、身長とも訳すことができ、翻訳によっては、「背丈を少しでも延ばすことができようか」と訳しているものもあります。寿命にしろ、背丈にしろ、思い煩うことによってそれが伸びることはありません。これらは、基本的に与えられたものとして受けとめていくしかないので。自分の力ではどうすることもできないものです。ですから、それについて思い煩うことは、無駄で愚かなことと言わなければなりません。

寿命や背丈だけでなく、私達には基本的に自分の力ではどうすることもできない事柄が多く

あります。自分に与えられている限界というものがあります。そういったものは、受け入れていくしかないのです。しかし、その与えられている限界に満足せず、それを受け入れようとしないがゆえに思い煩うということが、私達にはあるのではないのでしょうか。自分というものを受け入れることができない。そして現在の自分を否定して、自分以上の自分を目標そうとする。しかし、自分以上を目指すのですからうまくいきません。ですから、思い悩むのです。

ある神学者は「墮落以来、人間の歴史はいつも人間以上のものであろうとする者の歴史であった」と言っています。人間の向上心や努力が否定されている訳では決してありません。与えられているものを神様のために精一杯用いるように努力すること、それは尊いことです。しかし、与えられているところを受け入れずに思い煩うのは、すべてを与えられた神様に対する反逆であり、傲慢なのです。神様に任すべきものを、自分のものとして背負ってはなりません。そういう思い悩みをしてはならないのです。

第三の例は、28節以下にある「野の花」です。

「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」

イエス様が言われたのは、野の花であって、大切に育てられる花壇の花や、お花屋さんの花のことでありません。人が世話をするわけでもなく、また、咲いているところを人に見られることもないかもしれない野の花です。

しかし、その野の花であっても、イスラエル王国がもっとも栄えた時代の王であるソロモンの栄華に勝るのです。野の花の美しさは、ただ神の手によるものです。野の花は自らで美しく装うために、紡ぐことはありません。そして花の寿命は短いものです。しかし、それでもこれほどに美しいのです。

ならば、「あなたがたはなおさらのことではないか」と主は言われます。神の形に創造された人間を、神様が野の花以上に装ってくださるのは当然なのです。だから、思い悩むなど言われます。神様に信頼すれば、本当の美しさを輝かすことができるのです。

19世紀のキリスト教哲学者にキルケゴールという人がいましたが、彼が『われわれは野の花、空の鳥から何を学ぶか』という文章を書いています。彼は三つの点で、野の花と空の鳥はわたしたちの教師だと言います。

第一に、彼らは沈黙の教師です。確かに空の鳥は鳴くこともありますが、人間のように喋ることはありません。野の花は言うまでもなく沈黙しています。神の前における沈黙。それを私たちは野の花から学ぶことができます。神様の前に静まることを忘れるとき、神様との関係は確実にほころび始めるのです。私たちは、野の花のごとく、静まることを学ばなければなりません。

第二に、彼らは服従の教師です。空の鳥も野の花も、全能者なる神の前に服従しています。被造物としての自分自身を受け入れています。すすめがすすめであることに不満を持って、カラスになろうと願うことはありません。野の花が野の花であることに不満を持つことはありません。被造物としての自分自身を受け入れている姿がそこにはあります。神様に信頼している姿がそこにはあるのです。

そして第三に、彼らは喜びの教師です。空の鳥も野の花も思い煩いを持たずに喜んでる姿を示しています。自分たちに与えられた被造物としての限界の中で、生き生きと空を飛び、また野に咲き乱れるのです。その時、彼らはまさに美しいのです。

私たちは誰しも、美しく、のびのびと生きたいと願っています。その秘訣を、イエス様は空の鳥と野の花から学べと言われたのです。神様

の前に静まり、神様から与えられた自分を喜んで受け入れ、そして自分の限界の中で精一杯に生きる時、私たちは本当に美しく生きることができるのです。

野の花は、空に向かって咲きます。神様に向かって咲くのです。咲いている美しさを、人が目にすることがないまま、咲き終わることもあるでしょう。しかし、神様はその美しさを認めていてくださるのです。そしてもし、人がその花に目を留めたならば、それは心を打つ美しさをもつのです。神様に向かって真っ直ぐに咲いた花こそ、本当の美しさを持つのです。

イエス様は30節の終わりに「信仰の薄い者たちよ」と言われました。思い煩いというのは、単なる心の持ち方の問題、精神の問題ではありません。それはまさに信仰の問題であることを主は明確にされています。

「思い悩むな」とは、小さなことでは動じないような強い心を持ちなさい、ということではありません。くよくよ悩まなくて良いように心を鍛えなさいということではありません。わたしたちの心は、別に弱くても良いのです。大切なことは、心の強さではなくて、神様を信頼することなのです。神様が自分にとって、どんな方であるかをよく知ることなのです。そして自分のために何をしてくださったかを徹底して心に刻むことなのです。

そして何よりも、ここで「思い悩むな」と語ってくださった方から目を離さないことです。なぜなら、思い悩まなくて良いと語られた根拠は、その方自身の内にあるからです。イエス様がなしてくださったことこそ、人間の思い煩いを根源的に解決しました。十字架の死による神様との和解によって、わたしたちの存在は、すっぱりと神の恵みの中に覆われるものとなりました。わたしたちの生涯は、確かに、神の恵みの御手の中にあります。そして、地上の生涯を終えた後は、イエス様のところに迎え入れられて、

救いの完成に至るのです。それが、キリスト者に対するイエス様の約束です。ならば、「思い悩むな」と命じられるのは当然ではないでしょうか。

ですから問題は、このイエス様の恵みの言葉を信じるか否かに係っているのです。まさに信仰の問題なのです。イエス様の恵みの言葉を本気で信じないならば、思い悩みから解放されることはありません。しかし、本気で受け入れて、神を信頼するならば、思い悩みから解放されるのです。使徒パウロは言いました。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。

何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」(フィリピの信徒への手紙4章6節)

神様に任せ、神様に委ねて祈るものは幸いです。その者こそ、のびのびとした、美しい人生を生きることができる。そして、空の鳥や野の花にまざる、伸びやかさと美しさで、神様はわたしたちの生涯を飾ってくださるのであります。

銚子栄光伝道所日曜学校の紹介

小林義信（湖北台教会協力牧師銚子栄光伝道所担当）

1. はじめに

銚子栄光教会は2007年3月21日に、湖北台教会所属銚子栄光伝道所として献堂式を行い、4月には中会で伝道所として承認されました。実はこの背後には一言で語る事の出来ない歴史があります。1992年に同盟銚子教会から離脱された方々が、往復160kmの道をいとわずに、湖北台教会で行われた週毎の礼拝を2005年6月まで守り通されました。そして同年7月からは銚子で礼拝が毎週守られるようになりました。ところが、湖北台教会に通っている期間は日曜学校の時間に間に合いませんので、車中で日曜学校を開き揺れる車内で讃美をし、お話を聞き、祈って来たのであります。1993年1月から車内日曜学校が開始され、生徒数は5名でありました。2004年7月から8月までの夏季伝道期間の時は二ヶ月間ではありましたが、民家をお借りして午前9時から日曜学校が開かれました。

実は同盟の教会は当時保育園を経営しておりましたが、教会分裂により保育園が閉鎖され、その保護者と園児の一部が現保育園（銚子栄光教会付属）の土地提供者である方によって萌保育園として受け継がれ、そこから多くの子供達が卒園していきましたが、その卒園生を集めて、子供会が1992年12月から開始されました。その時のクリスマス会には58名の子供達が集ったのであります。現在は、教会員が保育園の休園日である第二土曜日に「土曜学校」として位置づけ継続して開催しております。これには、卒園児および他の子供達が30名程参加し、礼拝と分級、工作と給食づくりを体験し、福音の種まきとしては大いなる成果を挙げております。また2007年4月からは、新しい萌保育園が



会堂全景



献堂式集合写真

開園され、澤谷由美子姉が園長として赴任され、月一回の「お話の部屋」を開催し、地域の若い母親教育と子供に対する情緒教育を開始し、地域の方々から暖かく迎え入れられております。

この様に、この銚子の地にあっては、神様が長い間に準備され、多くの備えを果たして下さり、また湖北台教会を始めとして多くの改革派教会のお祈りと奉げものによって、教会と保育園が建て上げられました。私達は何時も、地域の子供達に一つでも神様の思いを伝えて行きたいとする願いと、祈りを欠かさず、日曜学校・保育園・子供会を通して福音伝道に励んでおります。

2. 日曜学校の現状

教案誌 No. 26に湖北台教会の紹介が載ってお

りますが、礼拝形式や次第は全く同じであります。毎日曜日午前9時から始まり、分級を含めて午前10時までに終了致します。讃美歌演奏器によって『子供さんびか』から讃美をもって開始します。そして主の祈り、聖書朗読、お話し、お祈り、讃美歌、献金、讃美歌、黙祷をもって礼拝を終了致します。その後は、中等科(一名)、小学生科(一名)、幼稚科(三名)と分かれて分級を行います。月一回の教師会では該当月の分担任と主題について話し合い、『成長』を主テキストとして使い、視聴覚教材は先生方がご自分で工夫されたものを使います。たまにはDVDを使用することもあります。幼児は、お話に引き止めておくことが大変なので、応答話法を屈指し、教材をもって動きを演出していきます。

現在は、契約の子が日曜学校に集っており、未信者の子はおりません。土曜学校としての子供会には、あれ程多くの子供達が集うのですが、色々聞いてみると「教会に来るには、親に送って来てもらわなければ来れない」「日曜日は部活があるから来れない」「日曜日に教会へ行くのは、家は仏教だから行くなどと言われる」等々であります。これをどの様に克服するか、これが私達教師の共通の課題となっております。

イエス様は、「子供達を私の所に来させなさい」(マルコ10:14)と、言われました。現代の子供達を霊的な側面から眺めると真に悲惨であります。家庭において霊的な情操教育は皆無です。子が親を殺し、友達を苛め殺める、塾とテレビゲームに没頭している。個室を与えられ親子の愛の交流がない。この様な環境から、子供の数そのものが減少し教会に来る子供は、ほとんど姿を消してしまっただけであります。しかし、教会ではこの子供達を取り巻く環境の激変に対して、今まで手をこまねいており、50年前と同じやり方で子供達が来るのをまっている有様です。教会を減ばすなら、子供と青年が教会に来ることを妨げれば良いと考えているのがサタンであります。この試みを放置しているの



日曜学校風景

が、私達の現状であります。

一方で、契約の子等を取り巻く状況です。ある調査によりますと、信仰者の家庭で子供が信仰告白へ至る割合が何と30%だそうです。10年前の統計ですから、この割合はもっと低下しているでしょう。このような現状ですから、未信仰者の子供を招くというのは至難の業であります。その前に教会員の子供を一人も漏らすことなく教会に来させる為にはどうしたら良いかを考えるべきでありましょう。折角幼児洗礼を受け、恵の救いの中に入れて頂いた子を教会に迎え入れないようであり、どうして不信仰者の子供を神に結びつけることができるでしょうか。信仰者の親は、自分の子供と思うから出来ないと感じてしまうでしょうが、神様との約束の中に入れられた子と思ったら、神に従う訓練を親がしなければなりません。その為に、家庭礼拝を復活させることです。自分の家庭で神を崇めずして、何故教会で神を崇める心が起きるのでしょうか。自分の子供だからと言って、親が

言い訳している所に信仰は育ちません。このような親の思い込みこそが、子供の信仰にとっての障害になっていることに早く気が付かなければならないでしょう。親が自ら神を崇める姿勢を子供に示さなければ、子はその後ろ姿に倣うことはないのです。

私達の教会は幸いにも信仰告白というシッカリとした岩の上に教会が建てられています。そして信仰の結ぶ実としての善き業が、イエス様の愛にもとづいて果たされています。制度としての教会は長老主義によってしっかりと守られています。このような教会に、何故子供の姿が見えないのでしょうか。その答がローマ12：15

～18に書かれています。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人と交わりなさい。自分を賢い者と自惚れてはなりません。誰に対しても悪を返さず、全ての人の前で善を行うように心がけなさい。出来ればせめてあなた方は、全てのひとと平和に暮らさなさい」。教会は幼い者、高齢の者、障害者、貧しい者、悲しんでいる者、悩んでいる者、その様な人々の為に門戸を広く開けていなければならないのです。そのような人々を通して、私達の信仰が強くされて行くのであり、子供に対する教会の門をどれ程広く開けるかが、今日の教会の課題であります。



子供会キャンプ



子供会流しソーメン



3. 子供会

その門戸開放の一環として始められた子供会が、今定着しております。第二土曜日の午前9時から午後1時まで開催されています。讃美歌、祈り、聖書朗読、お話し、そして礼拝の後では、ゲーム・工作などを行い、食事づくり、おやつ作り等を通して、先生や仲間達と体験交流を致します。そこには強い仲間意識が出来て、小学校・中学校で友人関係が継続されています。友達作りにも役に立ち、また幼児から中学生まで居りますので上下の関係も健全に構築されています。

教師会は第三日曜日に行われ、年初に作成したプログラムに沿って、教案作り、野外活動の計画を立てます。

12月は餅つき、3月は草もち作り、夏はサマーキャンプで蕎麦うち、秋は素麺流しなど季節感溢れた行事を開催します。これらは、毎月二百円の参加費で賄っています。キャンプ等は、実費徴収です。こうして、地元では定着した行事となり、親御さんからも多山の協力を頂いてお



子供会



母の日の集い

ります。この中から、親御さんが信仰者になられたケースも生まれております。今まで教会堂がありませんでしたから、地域の公民館等を利用しておりましたが、今は大きな会堂と保育園がありますので、大人に対する文化活動等も積極的に開催し、地域に愛される教会・保育園として行きたいと願い、祈っております。

4. 保育園

旧園長から引き継いだ保育園は銚子栄光教会付属保育園として、経営は理事会に委ねられ、日々の管理は澤谷由美子園長がおこなっております。4月の開園時には60名の園児が居りましたが、現在68名になり無認可保育園としては大きくなりましたので、認可保育園として、これからキリスト教保育と食育に特色をもたせ、この地域の幼児教育に貢献したいと願っております。

毎朝礼拝堂で朝の礼拝を行って一日のスタートをきります。子供達の讃美の歌声とお祈りの後のアーメンの音が響き渡り、また子供達の心には御言葉の種が蒔かれて居ります。神様がご用意された時に、この種が芽を出し、花が開き、信仰の実が結ばれることを祈っております。信仰者のスタッフが紙芝居や絵本を通して、お話を毎日しております。お誕生会も毎月行われ、子供の日、敬老の日、納涼大会、運動会、クリスマス会等は、家族総出で園に集合し、父兄と保育士達との交流を深められております。新保育園になってから、まだ教会員になられた方は居りませんが、これからがとても楽しみです。

5. 母と子の部屋

澤谷由美子姉は16年間「お話の部屋」の主宰として、子供達の為に貢献されて来ましたが、現萌保育園でも月一回お話の部屋を開催されています。未就園児とその母親を対象にして、絵本の朗読、お遊びを通して子供の情操教育の手助けをしております。現代は、母親と子供の交わりが浅くなり、親が忙しきにかまけてTVを

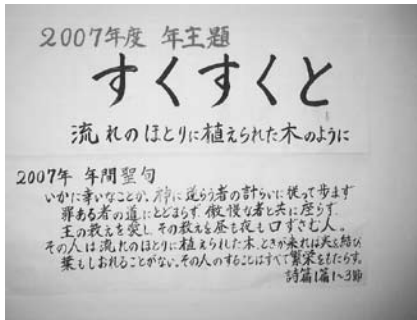
見させておくと言うことが普通となっていました。その結果、今日の社会は家庭での悲劇がマスコミを賑わせております。この現状から、母と子の関係を健全にする為に、小さい時からの親子の交わりがとても大切なのです。核家族化で母親は、相談する人もおらず孤独を噛み締めておりますが、この様な機会を提供することで、主宰者やスタッフと悩みを打ち明けることがゆるされ、大変感謝されております。こうして子供だけでなく、家庭を巻き込んだ活動を展開しております。

6. おわりに

このように、銚子栄光教会では地域との交わ

りを深め、地域における文化的活動拠点としての役割をこれから果たして行こうとしております。主の御心は大変広いわけですから、私達の教会の在り方を主の御心に聞き従いながら、福音伝道の多様な在り方をこれからも、探って行きたいと願っております。ある意味では、あらたな試みとなるわけですので兄弟姉妹方のご指導とお祈りをこれからも是非お願いしたいと思っております。最後に、この一文を書くに当って、資料をご提供頂いた澤谷姉、大川姉、田邊姉には心から感謝申し上げます。

詳細は、<http://cec.seesaa.net/> でご覧下さい。



萌保育園



お話しの部屋

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト 使徒言行録 15章1～21節

〈エルサレム会議の発端〉

パウロの第一次世界伝道旅行に聖霊が大きな成果を与えられ、多くの異邦人が信仰を得てクリスチャンになった。すると、割礼を受けたユダヤ人クリスチャンの中のある者たちと、パウロやバルナバとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。

この問題について、使徒たちや長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、その他の数名の者たちは教会の人々から選ばれ、シリアのアンティオキアからエルサレムに上って行った。教会会議が行われるためであった(15:1-2)。これがキリスト教会で初めて行われた教会会議、すなわち、エルサレム会議である。

〈宣教報告とその反応〉

パウロとバルナバは、シリアのアンティオキアからエルサレムへと向かう道すがら、教会の兄弟姉妹たちに、パウロたちの第一次世界伝道旅行によって、たくさんの異邦人が回心し、キリストを信じ、クリスチャンになっていった次第を詳しく伝えた(15:4)。その伝道報告会をとおして多くの兄弟姉妹たちが、主の御業をパウロたち共々喜んだ(15:3)。

他方、エルサレムにもどって報告会をすると、ファリサイ派からキリスト信者になった者のうちの数名が立って、「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ」と主張した(15:5)。

しかし、パウロは、もし割礼を受け、律法を守ることを命じるならば、イエス・キリストを信じることによってのみ救われる、という恵みの真理が台なしになり、功績主義に陥ることを知っていた。そのことをガラテヤの信徒たちにこう書き送っている。

「わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わた

したちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」(2:15-16)

〈教会会議〉

使徒たちと長老たちが、この会議を構成していた。そして、この問題、すなわちイエス・キリストへの信仰のみによって救われるのか、あるいは、ユダヤ人たちのように割礼を受け、律法を守ることも救いの必須条件となるのか、という問題についての議論が展開されて行った(使徒15:6)。議論は、教会の指導者たちによって導かれていったが、会議のすべての構成員(使徒たちと長老たち)がこれを見守り、また議論に参加していた(15:12)。

会議では、ペトロ、パウロ、バルナバなどによって、「イエス・キリストを信じるなら救われる」、「聖霊は、この信仰を異邦人にもお与えになった」、「神が使徒たちの働きを通して異邦人の間でも、今、働かれる」ことなどが証言された。

主イエスの弟、ヤコブ(マタイ13:55、ガラテヤ1:19)は、教会指導者としてこのエルサレム会議を導く。彼は、使徒たちの証言を聞き、旧約聖書を引用しつつそれを支持する(15:14-18; アモス9:11, 12; イザヤ63:19等々)。そして、会議を代表して、ユダヤ人クリスチャンに対しては、「神が異邦人にも聖霊を与え、イエスを信じる信仰によって救われる神の御計画が明らかにされたのだから、異邦人に律法のくびきを負わせないないように」と言い渡した。他方、異邦人クリスチャンに対しては、「ユダヤ人キリスト者が今も尚忌み嫌う食物に関する旧約的しきたりや、淫らな事柄は、避けるように」と言い渡した。主にある教会の一致が疎かにされないようにとの配慮が、決議の中に十分に盛り込まれている。(芦田高之)

テキスト 使徒言行録 15章1～21節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28, 29, 30, 65, 68

〔単元のねらい〕

「救いは主イエス・キリストの恵みによる」のであり、ユダヤ人であるか否か、割礼を受けているか否かではない。教会は、この真理を聖霊によって示され、エルサレム会議において確認し、受け止めるものとされた。今回の主題は、この会議において働く神のみわざである。主なる神は、信仰者の話し合い（会議）において真理をお示しくくださるのであって、それゆえ、教会は話し合いを重んじる。話し合いにおいて明らかにされる神の御心、真理に、謙そんに耳を傾けるのである。わたしたちの教会にも、聖霊が注がれて、真理が与えられている。この教会の交わり、また話し合いを大切にする気持ちを養いたい。

「教会の話し合い（会議）ってなあに？」

あけましておめでとう。新しい年を迎えました。新しい年を迎えて、一緒に神さまを礼拝できること、とても嬉しいです。この一年も、神さまを礼拝して、神さまの御声に聞き従って歩いていきましょう。

さて、新しい年を迎えて、今年は何年でしょうか。2008年ですね。ところで、これは、いつから数えて2008年なのでしょう。みんな知っていますか。実は、主イエスさまがお生まれになってから、2008年ということなのです。主イエスさまがお生まれになって、神さまのことが全世界に告知知らされて、そうして、おおよそ2000年。神さまのみわざは、この2000年の間、ずっと続けられてきました。2000年もの時を超えて、神さまのみわざが続けられているということ。このことひとつをとっても、神さまはすばらしいお方であると思わされますね。

いま、わたしたちの教会には、わたしたち日本人が集められていて、韓国人の方がいて、香港から来ている方もいます。アメリカ人の方もときどき来られます。そんなふうにして、いろいろな人が集まっています。

けれども、教会にいろいろな国や民族の人が集められるということ、それは、最初からではあり

ませんでした。先週も学んだように、教会は、イスラエルという国のユダヤ人から始まりました。主イエスさまもユダヤ人の一人でしたし、ペトロやヨハネといったお弟子さんたちも皆ユダヤ人でした。教会は、最初はユダヤ人から始まったのです。そして、教会にいろいろな国や民族の人が集められて、一緒に神さまを礼拝する、それは決して簡単なことではありませんでした。

もちろん、神さまは、ユダヤ人であるのか、どこの国の人であるのかということ、人を分け隔てするお方ではありません。わたしたちはだれもが神さまの御前に罪人であったのですが、そのわたしたちを罪から救い出すために、神さまは主イエス・キリストを与えてくださいました。神さまの救いの恵みは、キリストの十字架によって与えられます。キリストの十字架を信じる人はすべて、主イエス・キリストの救いの恵みをいただくことができます。使徒パウロは、そのことを信じて、ユダヤ人ばかりではなく、多くの外国人に福音を告知らせて、伝道旅行をしました。使徒ペトロも、コルネリウスとの出会いを通して、神さまがユダヤ人以外の人をも救おうとしておられることをはっきり知り、ユダヤ人以外の人たちにも福音を告知らせるようになりました。主イエス・キリストは、ユダヤ人ばかりではなく、すべての人

を照らし出す、まことの光なるお方なのです。

けれども、ユダヤ人の中には、旧約聖書で教えられているように、「割礼」という儀式を受けてユダヤ人にならなければ、本当に神さまの救いをいただくことはできないと考える人たちがいました。その人たちは、「割礼」を受けて、ユダヤ人になってはじめて本当の神の民に加えられるのであって、主イエス・キリストの十字架を信じているだけでは足りないと考えていたのです。

そのような違う考えが出て来たため、教会は話し合いの時を持つことにしました。ペトロもパウロも集まって、ほかに、いくつかの教会の代表の人たちがエルサレムに集まって、話し合うことになりました。

その話し合いの中で、ペトロとパウロが、神さまの不思議なみわざを報告して、話をしました。神さまは、主イエス・キリストの救いをユダヤ人以外の人にもお与えになるのであって、ですから、ユダヤ人以外の人にも御言葉を聞くことができますし、事実、聖霊が注がれて、信じる心が与えられました。主イエスさまを信じる者が起こされました。主イエス・キリストの十字架の恵みは、ユダヤ人以外の人にも及ぶのです。

そして、これが神さまのみわざ、聖霊のみわざなのですが、ペトロやパウロの話を聞いている人たちに、ユダヤ人以外の方がキリストを信じて救われることを喜び、神さまをほめたたえる思いが与えられました。話し合っていた人たち皆、主イエスの恵みが分け隔てなく与えられることを喜ぶようにされたのです。聖霊なる神さまが、人を造りかえてくださいました。

こうして、教会は、話し合うことを通して、主

イエスの恵みがすべての人に及ぶという真理に固く立つものとされました。もはやユダヤ人になるのではない。ユダヤ人であっても、ギリシア人であっても、日本人であっても、すべての人が主イエス・キリストに結ばれて、キリスト者になるのです。この恵みによって、教会には、いろいろな国の人たちが集められているのです。

いまのわたしたちも、教会の話し合いを大切にします。教会のおとなの人たちは、会議を開いて、教会の大切なことを決めていきます。どうして話し合いを大切にするのかというと、その話し合いに主イエス・キリストが共にいてくださり、聖霊によって導いてくださるからです。主イエスさまは、「二人または三人がわたしの名によって集まるころには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18:20）とおっしゃって、わたしたちの交わりと話し合いにご自分が共にいてくださると約束してくださいました。その約束に信頼するのです。ですから、教会の話し合いは、自分の意見を言うことが大切ではありません。主イエスさまが何を願っておられるのか、神さまの御心を祈り求めることが大切です。その神さまの御心に皆が耳を傾けて、謙そんに聞き従うのです。

教会は、そのようにして、主イエス・キリストの御声に聞き従ってきました。そのことによって、全世界に福音が告げ知らされましたし、2000年の時を超えて、いまも教会が建てられています。神さまのみわざは確かです。わたしたちも、教会に働く聖霊の力を信じて、教会の話し合いや集まりを大切にするのです。互いに祈り、神さまの御心を求めて歩みましょう。（望月 信）

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 15章11節

わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。それは、神様の一方的な恵みであって、私たちの内に何かよいところがあるからとか、こういう家に生まれたからというようなものからくるものではありません。私たちが救われたのは、神様の恵みによることを確認させていただきます。

〈展開例〉

ぼくたち、私たちは、どうして神様を信じたのだろうか？（子どもたちの話を聞く）

キリスト教の幼稚園に行っているから教会に来ている人もいます。お父さん、お母さんが教会に来ているからぼくも教会と一緒に来ているという人もいます。お父さん、お母さんは教会には行っていないけれども、お兄ちゃんやお姉ちゃんと来ているという人もいます。

教会の中を一緒に見てみよう！ 教会には、いろんな人がいます。おじいちゃんもいます。おばあちゃんもいます。おじさんもいます。おばさんもいます。社会で一生懸命に働いている人もいます。大学生や高校生のお兄さん、お姉さんもいます。そして、皆よりちょっと大きい、中学生や小学生のお友達もいます。

魚屋さんもいます。八百屋さんもいます。お花屋さんもいます。お肉屋さんもいます。会社で働いている人もいます。お医者さんもいます。看護婦さんもいます。車屋さんもいます。市役所で働いている人もいます。このように、教会にはで色んな人がいるのです。

教会には偉い人から、普通の人まで多くの方がいます。何で教会にはこんなに多くの方がいるんだろうか。それは、神様が一方的に皆を招いてくださっているからなのです。

聖書の時代、教会には誰でも来ることができました。イエス様を救い主と信じる人は誰でも来ることが出来たのです。ところが、その中には、本当のユダヤ人になって、「割礼」という儀式を

受けなければ、イエス様によって救われたことにはならないと考える人たちがいたのです。

そこで、教会は「エルサレム会議」という会議を開いて、一体誰がイエス様の元に招かれている人なのだろうかと話し合ったのです。なぜなら、教会は、会議を通して神様の御心が表されると心から信じていたからでした。そして、その「エルサレム会議」において、例えギリシャ人であっても、ユダヤ人であっても、誰であっても、イエス様を信じる人ならば全ての人が神様の恵みによって、救いに招かれていることを確認したのでした。

イエス様を信じて救われるために、ユダヤ人になる必要はありません。「割礼」という儀式を受ける必要もありません。何かよい行いをする必要もありません。偉い人に、立派な人になる必要もありません。

大切なことはイエス様を信じることです。イエス様は、皆を一方的な憐れみによって招いてくださっているのです。今週も私たちを恵みの内に招いてくださる、神様と一緒に歩んで行きましょう。

〈お祈り〉

神様、私たちを一方的な恵みの内に招いてくださることを心から感謝いたします。私たちは救われるために何かよい行いをする必要はありません。どんな人でも招いてくださるイエス様と一緒に歩むことができるようお願いいたします。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



預言者たちの言ったことも、これと一致しています。

〈ねらい〉

新しい年を迎えて、生徒の心をイエスさまへと結び付けたい。イエスさまを信じるということは、何か資格がなければならないということではなくて、信じることに於いてであることを確認したい。小学科下級であったとしても信じて洗礼・信仰告白することへの招きを心がけたい。

〈展開例〉

イエスさまの弟子たちの中に、キリスト者として認められるための資格についての話し合いがありました。皆さんは、何々小学校の何年何組の生徒ですよ……それは、住んでいる家の区域などで行く学校が決められたりしますね。

実は、イエスさまの弟子たちの中にキリスト者になるためには、受けなければならない儀式があると言う人たちがいました。それはユダヤ人の男の子ならば誰でも受けている「割礼」という儀式でした。

ですから、ユダヤ人以外の人たちがキリスト教会の仲間になるためには、同じ儀式を、洗礼を受ける以外に受けなければならないのではないかと主張しました。でも、本当は、教会の仲間になるために洗礼を受ける以外に必要なものはありません。イエスさまを信じる信仰を心から告白できるならば、だれでも教会の仲間として受け入れられるんです。

皆様は小学生下級で、まだまだ小さいし力も弱いし、洗礼を受けること、信仰告白をすることはもう少し大きくなってからと思いませんか。

新しい年を迎えて、今年、信仰告白をすることができるように祈ってみませんか。先生も一緒にイエスさまにお祈りしますから……なぜならば、イエスさまを信じることは、大きい小さい、ユダヤ人かそうでないかは、関係ありませんから。

〈お祈り〉

神さま、私たちは小学生の下級ですし、小さいですから、洗礼・信仰告白まだまだあとのことだと思っていました。しかし、イエスさまは私たちをいつも招いてくださっていますから、助けてください。また、お友だちも信じていることができるように助けてください。イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

祈ってほしいことを「プレイカード(祈りのカード)」を作成してみんなに書いてもらい、それを色紙のように書き加えて回すようにします。

【プレイカード】

- ①自分の名前を書いたならば横の人に渡します。
- ②カードが来たら自分の名前と祈ってほしいことを書く。
- ③書き終わったら次の人に回す。それを繰り返して、自分の名前のカードが戻ってくるまでします。



〈御言葉の背景〉

異邦人と割礼……イスラエルの人々は、彼ら以外の民族を異邦人と呼び、蔑視した。異邦人と接触しないことによって、信仰の純粹性を保とうとしたといわれる。割礼も異邦人と自らを区別するための民族共同体的なしるしであり、異邦人がユダヤ教に改宗する場合、割礼を受けることが求められた。そうした背景のもと、キリストを信じた異邦人にも割礼が要求されたと考えられる。（『聖書辞典』、新教出版社、57,112ページ。）

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒15:8,11

☆骨子：①エルサレム会議の発端②ペトロの意見
③パウロの報告④ヤコブの判断

☆例：

イエス様を信じる人は、みんな救われます。だから、イエス様を信じる私たちは、信仰によって神様に救われたのです。パウロもそう信じて、異邦人に伝道しました。たくさんの異邦人がパウロの話聞いて、神様を信じて救われました。

でも、ユダヤ人の中には、イエス様を信じるだけでなく、割礼を受けなければ救われないと考えている人たちもいました。異邦人は割礼を受けていないので、ユダヤ人と同じように、割礼を受けなければ本当には救われなかったのです。

それで、イエス様を信じるだけで救われるのか、それとも、さらに割礼を受けて救われるのか、エルサレムで会議を開いて話し合うことになりました。この話し合いを通して、だれでもただイエス様を信じるだけで、神様に救っていただけることが示されました。聖霊様が会議に参加した一人一人の心に働きかけてくださったのです。

今の私たちが、イエス様を信じるだけで救われると、自信をもって言うことができるのは、昔のクリスチャンたちが、真剣に神様に祈り求めて、神様の御心を知らされたからです。みんなで心を込めて祈って話し合うと、神様はちゃんと御心を教えてくださいます。私たちの教会でも、どちら

に進むべきか迷う時がありますが、みんなで心を合わせて祈り求めれば、神様は必ずその祈りに答えてくださいます。

〈展開の工夫〉

☆異邦人の救いについて書いてある聖書箇所を探して、読んでみよう。

①ルカ2:32 「異邦人を照らす啓示の光」

②使徒10:34~48

「どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。」
(10:35)

「割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。」(10:45)

③ローマ11:11~24

「かえって、彼らの罪によって異邦人に救いもたらされる結果になりました」(11:11)

☆聖書箇所の章をヒントとして子供たちに教え、「異邦人」という言葉が出てくる箇所をだれが早く探せるか、競争してもおもしろい。

〈交わりゲーム〉

☆豊かな交わりがもてるところでこそ、心を一つにして御心を祈ることができる。新しい年も礼拝で始めることができた恵みを感謝しつつ、ゲームをして楽しく過ごそう。

①新聞紙折りたたみじゃんけん

一人一枚新聞紙を配り、その上にそれぞれ乗ってみんなでじゃんけんをする。負けた人は新聞紙を半分に折りたたむ。これを繰り返して、新聞紙の上に立つ場所がなくなった人が負け。

②みかんの皮むき競争

制限時間内に、一番長くみかんの皮をむいた人が勝ち。（りんごの皮むきのような要領で。）途中で皮が切れないように気をつけてむく。皮をむいたみかんは、ゲームの後で食べる。

〈ねらい〉

神の御心が話し合いの中で示されることを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 今日の御言葉は、最初の教会会議であるエルサレム会議のところですか。この会議で、ある真理が確認されました。それは何でしたか？ 11節を見て、教えてください。

→ただ主イエスの恵みによって救われる。

Q. この恵みによる救いの内容は、どういうものですか？ イエス様が救い主として私達のためにしてくださったことと、それを信じて私達が行う業の両方で救われるということですか？たとえば、イエス様50%、私達50%という割合で。それとも、私達の信仰は差し出されるイエス様の救いを受け取る手のようなもので、イエス様の成し遂げてくださった救いだけで十分

であり、100%イエス様の恵みによって救われるということですか？

→後の方の、100%イエス様の恵みによって救われることが正しい。

Q. 実はパウロやペトロはもうこの真理を知っていました。では、何故わざわざ会議で確認する必要があったのですか？ 1~2、5節を見て、教えてください。

→イエス様を信じるだけでは不十分で、割礼を受けてユダヤ人にならなければならないと主張する者達がいて、不一致が生じたため。

Q. 問題は単なる人間同士の不一致ではありませんでした。問題の焦点はどこにありましたか？
→神様の御心は何かということ。

Q. 教会が御心を確認する手段として採ったのは、どういう手段でしたか？

→会議、つまり、話し合いという方法。

☆教会では真理を明らかにする以外にも、様々な決定において、神の御心が明らかにされるよう話し合いをしています。神の隠れた御心を私達が知ることは出来ません。しかし聖書に示された御言葉に基づいて、「御心を示してください」と謙遜に祈り求め話し合いがなされるなら、神はその話し合いを導いて、御心をお示しくださるのです。我を通そうとするばかりにケンカになったり、話し合いで決まったことが自分の気に食わないから否定するのはみっともないですね。そんなことがないように、普段から自分の思いではなく、神の御言葉に従い、御心を尋ね求めて生きる信仰の姿勢が大切です。

4. お祈り

自分ではなく神の御心に従う者とされるように。
※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

〈聖霊による世界宣教〉

パウロたちが今のトルコ、小アジア地方を伝道旅行していた第二次世界宣教旅行でのこと。聖霊がアジア州宣教をこの時、はばまれた。

聖霊とは、イエスの霊とも、神御自身とも言われている(16:6,7,10)。三位一体の神御自身の内部においては、はっきりと父・子・聖霊の三位格(三人格)が区別されて御存在されている。しかし、我々人間の神との交わりにおいては、「聖霊が道を閉ざされる」時は、「イエスが道を閉ざされる」時であり、同時に「父なる神の御計画が実現し、道が閉ざされる」時である。父・子・聖霊なる主なる神が生きて我々に近づき、我々を通して御自身の救いの御計画を実行なさる。その生ける真の神との生き活きとした、ある時は手に汗握る交わりの中で、使徒たちは福音宣教に押し出されていた。

〈初めてのヨーロッパ伝道〉

何故、主なる神はこの時、弟子たちの小アジア宣教旅行をはばまれたのか。パウロは主との交わりの中でその理由を知らされる。「その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った。」(16:9) この幻を見たとき、一行は神がマケドニアに福音を知らせることをご計画なさっていると確信し、すぐに出発を決心した。

こうしてトロアスからサモトラケ島、ネアポリス、フィリピへと旅を進め、ヨーロッパ大陸上陸を果たした。ここから、ヨーロッパ伝道が始まったのである。

〈フィリピの祈り場にて〉

パウロの伝道は、まず、ユダヤ人たちが礼拝をしているユダヤ教会堂に行くか、あるいは会堂を持つまでには組織化されていない「祈り場」に向かう。そこで、旧約聖書から、イエスこそメシア、神の御子である、との伝道説教を唯一の神を信じ

崇める人々に向かってしていた。

当時、ある一定地域に男性が10人いれば、ユダヤ教会堂(シナゴグ)を作って礼拝活動するように定められていた。そこまでには至らない群れが「祈り場」という場所で集会を続けていた。そのフィリピの祈り場でパウロは主の導きの中、一人の女性、リディアと出会われた。

〈リディア〉

彼女は染色業の盛んな地域で、高価な紫布を商う裕福な家庭の婦人であった。このリディアの心に主が働きかけられ、彼女はパウロの語る言葉に注意を傾け、主イエスを信じる信仰へと導かれた。もともと、神を崇める女性ではあった。が、その神が、御子イエスをメシアとして世に遣わされたと信じるのは、聖霊の導き。聖霊によらなければ誰もイエスを主と告白することは出来ない(コリントー12:1)。

〈家族共々〉

リディアがまず主を信じ、続いて家族も共々主を信じ洗礼を受けた。神の贖いの歴史において、家族がこぞって主を信じる、あるいは割礼や洗礼を受ける、という事例は聖書に数多く出てくる(創世記17:7-14、使徒2:38-39、10:47-48、11:14、16:31-33)。一家こぞって主を信じ洗礼を受けることは特別のことでなく、新約聖書、とりわけ使徒言行録においてはごく当たり前の恵みの事実として書かれている。ここから、洗礼は幼子にも乳飲み子にも授けられたであろう事が暗示される。幼児洗礼に否定的な立場の人たちは、幼子への授洗が聖書には明白に語られていないことを理由に挙げる。が、旧約の割礼との連続性から言っても、幼児洗礼が特別に書かれていないことは、むしろ、当然幼子も家族の一員として主との契約に入れられているので、家族の中には当然幼子乳飲み子も含まれている、と考えるのが妥当だろう。(芦田高之)

テキスト 使徒言行録 16章6～15節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28, 29, 30

〔単元のねらい〕

エルサレム会議において、「主イエス・キリストの恵みによって救われる。それは、ユダヤ人だけではなく、異邦人も同じである」という福音の真理が確認された。主イエス・キリストは、「異邦人を照らす啓示の光」(ルカ2:32)であって、神の国の福音は世界にあまねく宣べ伝えられなければならない。けれども、使徒たちの伝道は、なおパレスチナから小アジア(今日のトルコ)の地域にとどまっていた。そこから、主なる神によって全世界へとつながられる出発点となった出来事が、今回取り上げるフィリピ伝道である。世界宣教は、神の導きによって、その突破口を開かれたのである。そして、当時の世界とは、ローマ帝国の世界にはかならない。「ローマへ!」。その第一歩がここに記されたのである。なお、通常はしないことであるが、今回は、世界地図を見せながら説教することを考えてみた。

「ローマへ! そして、世界中へ!」

みんなは、世界地図を見たことがありますか。今日は、世界地図を用意してみました。日本はどこでしょうか。そして、イスラエルはどこでしょうか。分かりますか。

日本は、世界の中で、アジアっていう地域の中にあります。ちょっと余計な話かもしれませんが、このアジアっていうのはとても広い地域で、実は、イスラエルのあるところも、アジアの地域なんです。アジアは、もともとは、いまのトルコのあたりを指して、アジアって呼んでいたんだけど、インドや中国もアジアに含まれるし、韓国や日本もアジアに含まれるっていうふうに、東のほうにどんどん広がってきたのです。

世界は、アジアのほかに、どんな地域がありますか。国の名前ではありませんよ。世界は、どんなふうに分けられますか。アジアのほかに、ヨーロッパがありますね。あるいは、アメリカ大陸がありますね。アフリカっていう地域もあります。その中で、さっき言ったように、イスラエルの国は、アジアの地域の中にあります。主イエス・キリストは、アジアの中でユダヤ人としてお生まれになり、キリスト教も教会も、アジアから始まったのです。

さて、アジアのお隣はヨーロッパという地域で

す。ヨーロッパには、ギリシアとかイタリアとかフランスとか、そういう国があるのですけれども、アジアとヨーロッパは、どこで分かれるのでしょうか。どこが境目でしょうか。

知らない?学校で習わない?。はい。学校では習わないかもしれませんが、今日、みんなは、それを知ることができます。実は、トルコはアジアなのですけれども、ボスポラス海峡・ダーダネルス海峡をギリシア側に渡ると、そこはヨーロッパなのです。そして、当時は、ギリシアまで行くと、世界の中心地であったローマまでもうすぐ!というところでした。当時は、パレスチナもローマ帝国の一部だったのですけれども、パレスチナは、ローマ帝国のはずれの地域、田舎です。ところが、ギリシアやマケドニアまで来ると、ローマ帝国の中心に近づいた!という雰囲気です。ギリシアやマケドニアは都会なのです。

さて、使徒パウロです。先週、エルサレム会議のことを学びました。主イエスの恵みによって救われる。それは、ユダヤ人だけではなく、外国人の人も同じです。主イエス・キリストの十字架と復活の喜びは、外国人の人たちにも宣べ伝えられなければなりません。ですから、使徒パウロや使

徒ペトロは、ほかのお弟子さんたちと一緒に、いろいろなところに伝道していました。けれども、それは、まだ、アジアの地域、シリアや小アジア（トルコ）の地域にとどまっていました。まだまだ、外に向かって大きく広く伝道する、ということになっていませんでした。

その頃、パウロは、テモテという人を連れて、一緒に伝道していました。テモテは、まだ若い青年で、もともと小アジアの地域の出身でした。ですから、パウロは、その小アジアの地域で、テモテと一緒に伝道しようとしたのです。けれども、なかなか伝道がうまくいきません。主イエスさまのお話をしようとしても、聞く人が集まらなかったのかもしれない。体の具合を悪くしたのかもしれない。聖書には、どんなことがあったのか、はっきりとは書いていないのですが、パウロとテモテはうまくいかなかった。

そんなある夜のこと、パウロは夢を見ました。マケドニア人が出てきて、「マケドニアに渡って来てください。わたしたちを助けてください。わたしたちに主イエスさまのお話を聞かせてください」と訴える夢でした。そのため、パウロとテモテは、なかなかうまくできない小アジアの伝道をやめて、マケドニアに行くことにしました。

聖書は、そのことをこのように語っています。パウロとテモテは、アジアで御言葉を語ることを聖霊から禁じられた。そして、神さまがわたしたちをマケドニアに召しておられる。マケドニア人に主イエスさまのことを伝えるよう召しておられる。そんなふうに語っています。これは大切なことです。パウロは、伝道がうまくいかない。そして、マケドニア人が夢に出てくる。それを、ただ偶然とか、ただの夢とか、そんなふうには考えませんでした。伝道ということ、主イエスさまのことを伝えるのは、神さまが計画しておられるのであって、聖霊が禁じられることもある、そのときにはうまくいくわけがありません。そして、神さ

まが召しておられるならば、そこに行き、主イエスさまのことを伝えるべきなのです。

こうして、パウロとテモテは、小アジアの港町であるトロアスから船出して、ダーダネルス海峡を渡って、ネアポリスという港に着きました。そして、フィリピという大きな町、大都会に行き、主イエスさまのことを宣べ伝えました。このフィリピでの伝道が、ヨーロッパでの最初の伝道です。

そして、神さまに導かれて伝道して、フィリピでは、主イエスさまを信じて洗礼を受ける家族が起こされました。フィリピには、主イエス・キリストを信じる教会が建てられました。ヨーロッパで最初の教会が建てられたのです。そこから、ヨーロッパ中の教会、いや全世界の教会の歴史が始まりました。何とすばらしいことでしょうか。

これは、聖霊の導きであり、神さまがパウロに夢を通してお命じになったことから始まりました。ですから、神さまの聖霊の働きによって与えられた実りです。神さまは、ご自身の教会を確かに建ててくださるお方です。そして、神さまは、この出来事をとおして、「世界中で伝道なさい!」と、いまもお命じになっておられます。

主イエスさまの福音を宣べ伝える。それは、神さまのみわざです。わたしたちの思いを超えて、神さまがご計画しておられます。その神さまのご計画を尋ね求めて祈り、わたしたちは自分たちの伝道のわざを進めます。わたしたちは、謙そんに神さまの器として仕えます。そのときに、主なる神さまが、わたしたちのわざを用いて、ご自身のみわざを行ってくださるのです。そして、豊かに祝福され、豊かな実りを見ることができると、約束されています。

ですから、主に信頼して、主イエスさまのことを伝えましょう。お友だちを教会に誘いましょう。
(望月 信)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙 二 4章2節前半

御言葉を宣べ伝えなさい。

折りが良くても悪くても励みなさい。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。しかしそれを、ただ自分の心の内にだけとどめておいてもよいのでしょうか。神様は、私たちを通して、御友達に福音を伝えることを願っておられます。これからお友達を教会に誘うことができるようにさせていただきます。

〈展開例〉

皆はお友達を教会に誘ったことがあるかな？
(子どもたちの話を聞く)

たくさんお友達を教会に誘ってきた人もいるかもしれません。しかし、恥ずかしくて教会にお友達を誘うことのできない人もいます。しかし、ガッカリする必要はありません。自分の力で教会にお友達をお誘いしようとしたら失敗してしまうかもしれません。でも必ず神様が友達を教会に誘う力を与えてくださるのです。

最初、パウロとテモテは、アジア州で御言葉を語っていました。今の世界で言えばトルコ辺りでありました。一生懸命に福音を伝えておりました。しかし、あまり上手くいきませんでした。神はその場所で福音を語ることを禁じられて、フリギヤ、ガラテヤの地方に行きました。そしてビティニア州に入ろうとしますが、またまた聖霊によって禁じられるのです。そこに神様からの御言葉が臨みました。

「その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った。パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである」(ver9-10)。

こうし彼らはマケドニアで福音を伝えていくように導かれていくのです。

そしてそこから、フィリピに導かれて、世界で始めて、アジアの枠を超えて、ヨーロッパに福音

が伝えられ、当時の世界の中心であるローマで福音が伝えられていくようになったのでした。

イエス様のことを伝える伝道という働き、これはとても大切な働きです。そして神様は、この伝道を皆によって進めて行きたいと心から願っておられるのです。そしてこの伝道のお働きは神様のご計画しておられることなのです。

伝道のために神様が道を開かれるときもあります。しかし、パウロとテモテが聖霊によって禁じられたように、神様からストップをかけられるようなときもあります。しかし、神様は必ず皆に福音を伝えるお友達を用意してくださっているのです。教会にお誘いするお友達を神様は備えていてくださるのです。

いやもしかすると神様は、みんなの思いを遥かに超えて大きなお方ですから、皆を世界のお友達に福音を伝えるために、用いてくださるかもしれません。神様は皆にきっと良いことをくださいます。神様のご計画に信頼して、神様の福音を伝えていきたいと思えます。

〈お祈り〉

神様、あなたは、私たちを福音を伝えるために用いてくださるお方です。どうぞ、神様あなたに心から信頼して福音を伝えることができますように、お友達を教会に誘うことが出来るように導いてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



「マケドニア州に渡ってきて、わたしたちを助けてください」

〈ねらい〉

伝道と言ってもまだよく分からないところがあるかもしれません。そこでただ「伝道しましょう」というのではなくて、パウロの伝道への姿勢を伝えることに集中したい。

〈展開例〉

日本にはイエスさまを信じる人の数がどれほどいると思いますか。まだ学校では習っていない数字かもしれませんが、113万人ほどです。日本の総人口にしめる割合は、100人に一人ほどです。この数が多いのか少ないのか、皆さんはどのように感じますか。

今日は、この日本の国までイエスさまのことが伝えられたきっかけとなった聖書の物語です。イエスさまの十字架による救いと復活の新しい命について世界のいたるところに宣べ伝えるために召されたのがパウロさんです。イエスさまの福音を伝えるために大きな役割をするのが「聖霊」です。聖霊がペンテコステのときにイエスさまの弟子たちに降って来て、一人ひとりにとどまったときに、それまで出て行くことに恐れを感じていた弟子たちが、力を受けて大胆に福音を宣べ伝えるようになったことを思い起こさせます。

パウロさんも、聖霊の働きがなければイエスさまのことを伝えることはできませんでした。それだけではなくて、聖霊が働かないとパウロさんがどんなに一所懸命にイエスさまのことを話したとしても、それが聞く人の心には響くことはありませんし、信じる心を持つこともないのです。ですから、まず聖霊なる神さまが働いてくださるよう祈りながら、イエスさまのことを伝えていきたいと思います。

皆さんの上に聖霊の働きが豊かにありますように。

〈お祈り〉

聖霊なる神さま、私たちは弱いですから、イエスさまのことを伝えたいと思いはありましても、なかなかできません。必要な力を与えてください。お友だちも守ってください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**【他己（たご）紹介】（ゲーム）**

人は自分をどんな風に見ているのかな？ 興味津々です。みんな輪になって、リーダーから始めましょう。隣の人を紹介するゲームです。ただし、自分が隣の人になったつもりで話します。うそを言うてはいけません。



〈視聴覚教材〉

パウロたちの伝道旅行を迎える地図

- ①聖書巻末の地図（8、パウロの宣教旅行2,3）
- ②『ビジュアル聖書百科』（いのちのことば社）
44,45ページ「パウロの旅」

〈御言葉の背景〉

マケドニア州とフィリピ……マケドニアはアレクサンドロス大王が父フィリップ王から受け継いだ王国だった。前140年代以降に、ローマ帝国の植民地となり、その後「マケドニア」はローマの県名として使用される。マケドニア州にあるフィリピは、ローマとアジアを結ぶ重要な地であった。フィリップ王が前4世紀にこの町を建てたことから、フィリピと名づけられた。フィリピ教会へ宛てたパウロの手紙から、パウロとフィリピ教会の人々との親密な関係を窺うことができる。（『聖書辞典』、新教出版社、394,438ページ。）

〈分級メッセージ〉

- ☆ポイント聖句：使徒16:10
- ☆骨子：①聖霊によるアジア州宣教の禁止②マケドニア人の幻③フィリピでの伝道
- ☆例：

パウロは、テモテと一緒にアジア州で伝道して、たくさんの人を救いたいと考えていました。でも、アジア州で御言葉を語ることは、どういうわけか聖霊様から禁じられてしまいました。

そんなある夜に、パウロは幻を見ました。一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ったのです。この幻を見て、パウロたちはすぐにマケドニアへ出発することにしました。マケドニアの人たちに福音を伝えなさいという神様の導きだと確信したからです。

パウロたちはマケドニア州の都市、フィリピに行きました。川岸に集まっていた婦人たちに神様のお話をすると、リディアという女性が神様を信じました。そしてリディアの家族も一緒に洗礼を受けて救われました。この後、リディアは自分の

家を教会にします。こうしてヨーロッパに最初の教会が生まれました。これをきっかけにして、神様の福音が世界中に述べ伝えられていくことになったのです。

〈展開の工夫〉

- ☆聖書巻末のパウロの宣教旅行の地図で、今日の聖書箇所に出てくる地名を順に迎ってみよう。
アジア州→フリギア・ガラテヤ地方→ミシア地方→ビティニア州→ミシア地方→トロアス→サモトラケ島→ネアポリス→マケドニア州のフィリピ。
- ☆世界地図を使って、クリスチャンがいる国を探そう。子供たちに国名を挙げてもらい、場所を確認してもいいし、教師がキリスト教国の名前を言って、子供たちがその国の場所を探してもよい。

〈工作 こまを作ろう〉

楽天「手づくり工作宅配便」で購入できる (<http://www.rakuten.co.jp/crafteriaux/325805/341618/>) 「糸ひきごま（ひも付き）」（税込230円）で、幼稚園くらいの子から大人まで楽しめる、とてもよくまわるこまが作れます。作るといっても、色を塗るだけで簡単です。色塗りはボスカを使うと、手軽できれいにできます。こまの胴体のくぼみにひもを巻いて、赤い軸の部分をもって巻いたひもを一気に引っ張ると、こまがまわるので、そっとテーブルや床など硬い平らなところに置きます。室内で、静かにまわして遊べます。女の子は丁寧に色塗りをするので、今週は色塗りをし、次週、みんなでこままわし大会をしてはいかがでしょうか。よくまわるので、だれが一番長くまわせるか競争すると、とても盛り上がります。



〈ねらい〉

主の導きに従い、イエス様を伝える。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 使徒言行録1章8節で、教会はどのくらいの範囲までキリストの証人となると、イエス様はおっしゃいましたか？ 今日の箇所までの初代教会の伝道は、イエス様の御言葉に照らしてどうだったのでしょうか？

→イエス様は、「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」とおっしゃった。イエス様の御言葉と比べて、教会の伝道はより狭い範囲にとどまっていた。

Q. 第二回伝道旅行の当初の目的は、第一回伝道旅行で回った全ての町の兄弟姉妹達の様子を見に行くことでした（使徒15:36）。それが予想もしていなかった方向に導かれ、ヨーロッパへと渡っていった背後には、イエス様御自身が昇天前におっしゃった御計画の実現に向けての導きがありました。この導きは、伝道の主がどなたであると教えていますか？

→イエス様こそが伝道を御計画され、実現に至ら

せる伝道の主であると教えている。

Q. 「御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」(6節)、「ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった」(7節)といった伝道旅行の妨げが具体的に何であったのか、私達には知りえません。しかし「御言葉を語ることを」、「入ろうとしたが」と書かれている所から、パウロの変わる事のない伝道の姿勢を読み取ることができます。それは一体、どのようなもののでしょうか？ 暗唱聖句を読んで、答えてください。

→どんなときにもイエス様を伝えようと一生懸命に励むこと。

Q. ヨーロッパへ渡って行ったパウロ達の例から、イエス様の導きは時として私達の思いをはるかに超えるものであることが分かります。主の召しに従った使徒パウロ達にはどのような実りが与えられましたか？ 14~15節を見て、答えてください。

→リディアの回心と家族の者の救い。

☆主の召しに従ったパウロ達にフィリピの町で回心者リディアとその家族の救いが与えられました。神様は今の私達をも用いて、豊かな実りをもたらして下さいます。パウロ達が主に従うことによってヨーロッパに福音が伝わることとなり、ついにはこの日本の私達のもとにまで福音が届いているように。

4. お祈り

神様の導きに従う心を与えてください。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

1. 背景 (16節)

16節にある「祈りの場所」とは、フィリピの町にあったユダヤ人会堂のことである。パウロは紫布の商人である婦人リディアの家を拠点にキリストの福音を宣べ伝えていたが、もう一方で、その町にあったユダヤ人会堂でも福音を伝えていた。そしてパウロがいつものようにユダヤ人会堂に向かっている途中、彼は占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会ったのである。当時フィリピでは、この霊によって予言する占い師たちが、それによって人々からたくさんのお金を稼いでいた。この女奴隷もこの霊の力で占うことによって、彼女の主人のために多くの収入を稼いでいたのである。

2. 女奴隷から悪霊を追い出したパウロ (17節、18節)

女奴隷に取りついていた霊は、フィリピの町で宣教活動をしているパウロに出会うと、毎日その後ろについて来て、彼らが「いと高き神の僕」であり、「救いの道を宣べ伝えている」と大声で叫びたてた。そのためパウロたちの宣教活動にも支障を与えるような状況になっていた。つまり、この霊は神の救いを告白しているようで、実は福音宣教の邪魔をしている悪霊なのである。それでパウロはその女に向かって、イエスの名によって「この女から出て行け」と命じ、この女から霊を追い出した。どんな霊であっても、あらゆる権威の上におられるイエスの命令に逆らうことはできないのである。

3. 捕らえられ投獄されたパウロ (19節～24節)

こうして女奴隷は占いの霊（悪霊）から解放され自由を得た。しかし、女奴隷の主人は、今までのように彼女に占いをさせることによって儲けることが出来なくなったため、パウロたちを憎み、

役人に引渡した。それで二人は高官の命令によって鞭打たれたあげく、投獄されてしまったのである。いつの時代でも、世にあってキリストの御名によって働くことは、時にこの世の人々、特に権力者たちから不当な迫害を受けることがある。しかし、かつてペトロがエルサレムで逮捕され、最高法院で尋問された時、「人間に従うよりも、神に従わなければなりません」（使徒5:29）と答えたように、キリスト者は迫害をも覚悟してキリストの道に従うことが求められる。

4. 看守とその家族の救い (25節～34節)

しかし、真夜中、パウロとシラスが神を賛美し、祈っていると、突然、大地震が起こり牢獄の戸が開き、囚人たちを繋いでいた鎖がすべて外れた。牢を脱走するには絶好のチャンスが到来したのである。牢を管理していた看守は当然、囚人たちが皆、脱獄したと思い、その責任を取るために剣で自殺しようとした（使徒12:18,19参照）。しかし、その時、パウロたちが現れ、自分たちは脱走しないでここにいると伝えた。パウロはすべてを神に委ねていたので、あえて脱走しなかったのである。また、パウロとシラスによって影響を受けていた他の囚人たちも脱獄しなかった。これはある意味で奇跡である。だからこそ、看守はこの出来事の前に驚き、パウロとシラスには神が共におられることを知り、神への恐れと回心へと導かれる。そして、この出来事を通して、看守とその家族は主イエスを信じ、洗礼を受け、神の救いの中に入れられたのである。まさに、パウロとシラスの獄中での賛美と祈りを通して、神は奇跡を起こし、看守の肉体の命だけでなく、霊的な命をも救ってくださった。わたしたちは本日の箇所から、神は迫害や苦難の中でこそ、わたしたちの賛美と祈りを用いて、福音宣教を大きく進展させてくださることを教えられる。（弓矢健児）

テキスト 使徒言行録 16章16～34節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11, 29, 41
ウェストミンスター信仰告白14:2, 28:3
同大教理問答 問72, 136, 153, 172
同小教理問答 問69

〔単元のねらい〕

子どもたちは、神さまを信じることで教会に行くことにより、他の子どもたちと違いがあることを感じとっていることでしょう。そして他の子どもたちからそのことを指摘されると、敏感に反応してしまうこともあるのではないのでしょうか。

だからこそ、今回与えられた御言葉から私たちは、教会に行くことにより、子どもたちがいじめ（迫害）に遭う可能性があることを語りつつも、それ以上に主なる神さまと教会学校の先生方、家族、それに教会に集まっている人たち全員が、子どもたちを愛しており、見守っていること、さらにはそのことをとおして、さらに神さまからの豊かな恵みに満たされることを語っていただきたい。

「どんな時にも、一緒にいて守って下さる神さま」

みんなは、教会学校（日曜学校）に来ていることを、学校のお友だちは知っているのでしょうか？ 恥ずかしくて言えない人も多いのではないのでしょうか。またお友だちが知ったら、いじめられるのではないかな、と思っている人もいるかも知れませんね。自分と違うことでいじめられるお友だちがいるとすれば、それは、みんな自分の考えていることが一番正しいと思い込み、自分の考えていることを否定されることが嫌いであり、自分とは違うことを考えている人が間違っていると思い込んでいるからです。

だから先生は、「それでもお友だちに伝えて、教会学校にお友だちを連れてこなければならぬ」とは命令しません。なぜなら、やっぱり先生も、みんながいじめられて欲しくないからです。

でもね、それでも教会学校に来て、神さまのことを信じようとしているみんなのことを、主なる神さまは、とっでも喜んでいて下さり、神さまはみんなのことを愛していて下さっていることを忘れないでいて欲しいのです。

パウロさん、シラスさん、とルカさん（使徒言

行録、ルカによる福音書の執筆者）は、神さまを信じる人たちが増えること願いつつ、神さまのことを話しながら、旅を続けていました。パウロさんは、神さまを信じる前、クリスチャンたちを迫害していました。だから、神さまのことを信じて、人々に伝えていくことで、自分も人から嫌われ、迫害されるのではないかとも思ったでしょう。しかしパウロさんは恐れることはなかったのです。聖霊をとおして神さまと一緒にいて下さっていることを知っていたからです。

パウロさんたちがフィリピの町に滞在していた時、パウロさんは悪霊に取り付かれている女性から悪霊を追い出してあげました。そのことに対して、この女性を利用して金儲けをしていた主人たちは、悪霊が出て行って、続けて金儲けが出来なくなったため、パウロさんとシラスさんをつまえたのです。捕らえられたパウロさんとシラスさんは、何回も鞭で打たれてから牢獄に入れられたのです。足には木の足かせがはめてあり、自由はありません。

それでもパウロさんとシラスさんは、真夜中になっても、神さまを賛美しながら、神さまに

お祈りしていたのです。神さまが守って下り、神さまが一番良い結果をお与え下さることを信じていたからです。

どれ位の時間がたったのでしょうか。突然、大地震が起こり、牢屋がものすごい勢いで揺れ動いたのです。そして牢の戸がみんな開いて、すべての囚人の足かせも外れてしまったのです。地震が起こるだけでもびっくりしますが、パウロさんたちは自由に外に出ることが出来る状態になったのです。その時、パウロさんたちは喜んで出て行っただけでしょうか。いいえ、パウロさんたちは囚人たちが逃げると看守がどの様になるか知っていたため、囚人たちを思いとどまらせて、その場に残っていたのです。

しかし看守は、そのことを知らず、囚人が逃げたしまえば、自分は咎められてしまうことを恐れて自殺しようとしたのです。その時、パウロさんが「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」と大声で叫んだのです。看守はびっくりしたことでしょう。しかし、パウロさんの話を聞いた時、自分は助かったんだ、パウロさんが語る神さまはいて下さり、信じることによって救われるんだ、との思いが示されたのです。だから、看守は、本当に救われることを願ひ、パウロさんたちに願

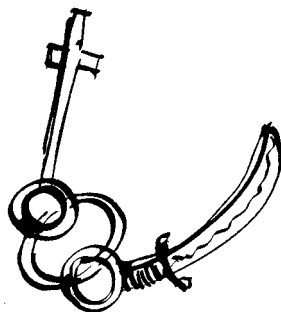
い出るのです。パウロさんたちは語ります。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。すると看守は、神さまを信じて、真夜中にもかかわらずパウロさんたちと共に家に帰り、家族を起こして、家族の者も皆、すぐに洗礼を受けたのです。

パウロさんとシラスさんにとって、逮捕され、鞭打たれ、投獄されることは、苦しいことだったでしょう。しかしパウロさんたちは、神さまを信じ、神さまが聖霊を通して働かれ、一番よいものをお与え下さることを信じていたのです。そして、主なる神さまは、このことを通して、看守と看守の家族を救いに導いて下さったのです。

みんなも、教会学校に来て、神さまを信じていることによって、これから嫌なこともあるかもしれませんが。しかし主なる神さまは、いつでもみんなと一緒にいて下さり、みんなの祈りを聞き届けて下さいます。だからパウロさんたちが、どのような時にも、神さまを信じて神さまを賛美することが出来たように、みんなも、どの様な時にも、神さまを信じて、神さまに祈りつつ、神さまが最も良い答えをお与え下さることを信じていただきたいと思います。 (辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] コロサイの信徒への手紙 1章13節

御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、
その愛する御子の支配下に移してくださいました。



救われるためにはどうすべきでしょうか。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。でも他のほとんどのお友達は、イエス様のことを信じてはいません。ぼくたち、私たちは、お友達から、何で日曜日に教会なんて行ってるの？と、いじめられてしまうようなこともありません。でも神様はどんなときも私たちと共にご一緒にいてくださり、私たちを守り導いてくださるお方です。神様の御守りを毎日感謝する者とさせていただきますましょう。

〈展開例〉

皆はお友達から何で日曜日に教会なんて行ってるの。日曜日は一緒に遊ぼうよ。こう言われて馬鹿にされたことはないかな？（子どもたちの話を聞く）

でも神様は、ぼくたち、私たちがどんな状況の中にあつたとしても、必ず守り導いてくださるお方です。

パウロとシラスは、フィリピの町で一生懸命に福音を伝えていました。神様のお話をしていたのですが、それを快く思わない人々がいたのです。そしてその人々は、「ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。『この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております』」(ver19-20)。

このように言って、パウロたちを牢屋に入れてしまったのです。パウロたちは神様のお話をしようと、せっかくフィリピの町までやって来たのに、捕らえられてしまったので、神様のお話ができなくなってしまったのです。

ところがです。ある夜パウロたちが神様を賛美していると、たいへん不思議なことが起こったのです。

「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれ

に聞き入っていた。突然、大地震が起これり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった」(ver25-26)。

何と神様が臨んでくださって、不思議にも牢獄の扉が開いて、パウロとシラスは、そこから脱出できるように導かれたのです。それを見ていた看守は、テッキリパウロとシラスが逃げたかと思いきや、自害しようとした。しかし、パウロはそれをとめて言いました。

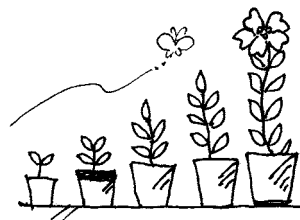
「二人は言った。主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(ver31)。

こうして、神様の御業を目の当たりに見た看守までもがパウロの勧めに従ってイエス様を信じて、洗礼を受けました。

神様は実に不思議なお方です。ぼくたち、私たちに助けてくださるだけではなく、ぼくたち、私たちに迫害しようとする人たちもまた助けて、救いに導いてくださる、そういうお方なのです。神様は、教会にお友達を誘おうとする、ぼくたち、私たちを、どんなことがあっても、助け導き、また皆に意地悪をするようなお友達までも守ってくださるお方なのです。神様に信頼してお友達を教会にお誘いしたいと思います。

〈お祈り〉

神様、ぼくたち、私たちが、あなたに信頼して、あなたがどんなときも守ってくださるお方であることを信じていくことができるようにしてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈ねらい〉

将来について不安なときには、占いがはやりです。星座、血液型などいろいろな占いがあります。イエスさまを信じるこそ大切なこと、そして、イエスさまを信じることは誰にでもできるのです。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも家族も救われます」(31節)の御言葉を信じて祈れるようにしたい。

〈展開例〉

皆さんの中には、家族の中で、あるいは友だちの中で、自分ひとりが教会に出席している人もいるかもしれません。先生も小学生のときにクラスで家の宗教について聞かれました。「キリスト教の家の人?」と聞かれて、手をあげたのは私ひとりだけでした。今はそんな事を聞く先生はいないと思いますが、先生の時代も皆さんの時代も、もしかすると、あまり変わりがないかもしれません。

今日は、不思議なきっかけでイエスさまを家族のみんなが信じるようになったお話です。パウロさんとシラスさんが占いをしている女の人に巡り会いました。パウロさんが、占いを助けている霊をその女の人から追い出してしまいましたので、占いをできなくなっただけでなく、その女の人に占いをさせて儲けていた主人たちは、そのことでたいへん怒ってしまいました。そして、パウロとシラスさんの二人を営業妨害の罪で牢屋に入れてしまいました。

皆さんは、正しいことをしたのに牢屋に入れてしまったパウロさんたちを、どのように思いますか? パウロさんは、そのことをガッカリしたのではなく、どんなときにも神さまが守ってくださることを信じて、牢屋に閉じ込められていても、つまり、手足が不自由な状態であったと思いますが、神さまに向かって賛美をしていました。その賛美を聞いた看守は不思議に思ったことでしょう。牢屋に入れているにもかかわらず、賛美をし

ているのですから……。

賛美が響く静かな牢屋が突然、騒々しくなります。それは大きな地震が起きたからです。すると牢屋の扉がぜんぶ開いてしまいました。看守は、囚人たちが逃げてしまったと思って自殺しようとしたのですが、パウロさんをはじめとして、囚人みんなが逃げることもなく留まっていました。このことを見た看守は、「救われるためにはどうしたらいいのでしょうか」と尋ねました。パウロさんははっきりといいました。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも家族も救われます」。「信じなさい」とパウロさんは優しく言いました。

イエスさまを知り、信じるきっかけはいろいろです。パウロさんもよみがえられたイエスさまにお会いして、すぐに信じる者とかえられました。今日の看守もそうです。神さまにできないことはありません。だからこそ、私たちは占いではなく、まことの神さまに期待して家族の救いを祈りましょう。

〈お祈り〉

天の神さま、わたしの愛する家族が、お友だちがイエスさまを信じることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒16:31

☆骨子：①女奴隷にとりついた占いの霊を追い出す②パウロとシラスの逮捕③奇跡と看守の救い④釈放

☆例：

パウロは占いの霊にとりつかれた女の人がパウロとシラスの伝道の働きを邪魔したので、その占いの霊を女の人から追い出しました。すると、その女の人の占いの力でお金儲けをしていた主人たちが怒って、パウロたちを捕まえて、役人に引き渡しました。パウロたちは鞭で打たれて、牢屋に入れられてしまいました。

でも、二人は牢屋の中でも神様を賛美して祈っていました。神様が自分たちを必ず守って下さると信じていたからです。神様を信じる人には、たとえ牢屋に入れられても、自由と喜びがあるのです。

その時、突然大きな地震が起こりました。その揺れのため、牢屋の戸がみんな開き、囚人をつないでいた鎖も外れました。囚人たちを見張っていた看守は、囚人たちがみんな逃げてしまったと思い、自殺しようと思いました。パウロは大声で叫んで、「わたしたちは皆ここにいる。」と言って、自殺を止めました。看守はパウロとシラスの前にひれ伏し、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」と言いました。二人は、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」と教えました。看守はその言葉の通り、イエス様を信じました。そして、看守の家族も一緒に洗礼を受けて、救われたのです。

パウロとシラスは牢屋に入れられて、どうなってしまうのだろうと、初めはハラハラするお話ですが、このことを通して、フィリピでまた新しいクリスチャンの家族が生まれました。神様は人間には思いもよらないような方法で、福音を述べ伝えさせて下さるお方です。パウロとシラスのように、どんな状況の中でも、神様を賛美し祈って、神様が最も良いことをして下さると信じて待つことができましたと思います。

〈展開の工夫〉

☆もしもパウロやシラスのように牢屋に入れられたら、どんな気持ちができるか、想像してみよう。

☆パウロはキリストを信じ、福音を述べ伝えたために、何度も投獄され、つらい目にあった。パウロはどうしてそのような苦しみにあっても、喜んで伝道が続けることができたのか考えてみよう。

a. パウロの投獄と苦難

「苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。」(コリント二11:23)

b. 聖書に書かれたパウロの投獄

①エルサレムで逮捕、カイサリアで監禁される。(使徒21:27～36、24:24～27)

②ローマに送られ、軟禁状態になる。(使徒27,28章)→その後、ローマで殉教したといわれる。

c. パウロが投獄されていた時に書いた、フィリピの信徒への手紙

「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみえています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。」(3:8)

「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」(4:13)

→パウロは、キリストと共に生きることが他の何よりもすばらしいことをよく知っていた。パウロが喜んで伝道しつづけることができたのは、すべてのことをイエス様にゆだねきっていたからなのである。

〈遊び こまをまわそう〉

先週作ったこまを使って、こままわし大会をしよう。子供の人数が少なければ個人戦で、多ければチーム対抗でやっても楽しいです。

〈ねらい〉

神が万事を益としてくださることを確信する。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 今朝の御言葉で、パウロ達は古いの霊に取りつかれている女奴隷から悪霊を追い出しました。何故ですか？

→一見、パウロ達を助けているようだが、実際には伝道を妨げていたから。それでパウロはイエス様の御名で悪霊を追い出した。

Q. この女奴隷を利用して金もうけをしていた主人たちはパウロ達を恨み、パウロ達は迫害を受けることとなりました。パウロ達は間違ったことをしましたか？そうでなければ、このことは私達に何を教えていますか？

→パウロ達はイエス様の御名を広めるための妨げを取り除いただけだから、悪いことはしていない。そして悪霊につかれ、人の欲望のために利用されていた女性を自由にすること自体、正しいことであった。パウロ達が伝道活動の途中でこのような仕打ちを受けたことは、世にあってクリスチャンが正しいことを行う時、そしてイエス様の御名を証しする時に、時として不当な目に遭うことがあることを教えている。

Q. パウロ達は不当に降りかかってきた苦難の

真っ只中で、賛美の歌をうたって神様に祈りをささげました。「神様、どうしてこんな目に遭うんですか？私は間違ったことはしていません。」そう訴えても無理はない場面であるにもかかわらず、パウロ達はどうして賛美や祈りをささげられたのですか？

→「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(ローマ8:28)と確信していたから。神様は悪人の業すらも用いて御計画を実現に至らせることを、イエス様の十字架事件によって初代教会は教えられていた(使徒2:23、4:28)。そして神様は迫害されているクリスチャンを心に留めておられることを、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」という復活の主の御声を聞いたパウロ自身が知っていた。

☆大地震によって牢の戸が開き、鎖も外れたのに、パウロ達は看守の受ける罰を考えて逃げませんでした。このありえない状況に直面した看守は、パウロ達と共に神様がいらっしゃることを感じ、家族共々に主イエスを信じることとなりました。こうして神様は、パウロ達への迫害と苦難を通して、御業をなしてくださったのです。私達もいつもこのことを信じて歩んでゆきましょう。私達がイエス様を信じていることや、イエス様のことを他の友達に話したり、教会学校に誘ったりすることで、クリスチャンとして行動することで、もしかしたら一時的に嫌な目に遭うことがあるかもしれませんが、でも、たとえそうなったとしても、それだけでは終わらず、神様はそこから最善をなしてくださるという信頼をしっかりとっていきましょう。

4. お祈り

神様への信頼を増してください。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

1. 背景 (16節、17節)

アテネの町は、古代地中海世界の学芸・文化の中心であり、そこにはギリシア世界の多神教的宗教性を象徴する様々な偶像が建てられていた。また、そこにはギリシア哲学の思想家たちも多く集まり、様々な議論や対話が繰り広げられていた。パウロはそうした当時の思想的、哲学的最先端の地であったアテネに乗り込んで、ユダヤ人会堂だけでなく、広場でも人々にイエス・キリストの福音を語ったのである。

2. アテネの人々の関心 (18節～21節)

パウロがアテネで伝えた福音は、イエスの十字架と復活についてであった。しかし、そのような話はアテネの人々にとっては全く初めて耳にするものであり、奇妙な教えに思えた。それで人々はパウロの話をもじくりと聞いて、その意味を知りたいと思い、パウロをアレオパゴスに連れて行ったのである。「アレオパゴス」というのは、アクロポリス（小高い丘）の北西に位置する場所であり、当時はそこで評議会や裁判などが開かれていた。パウロが話をするためにそこに連れて行かれたということは、評議会の議員たちの前で語るように要請されたとも考えられる。しかし、アレオパゴスの議員たちがパウロの話に関心を持ったのは、決して自分たちの救いの問題に関心があったからではない。21節にあるように、当時のアテネの人々は、「何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていた」からである。

3. パウロの説教の内容 (22節～31節)

アレオパゴスの説教で、パウロは最初からキリストについて語ったわけではない。パウロは福音について何も知らない人にも分かるように、まず、アテネの町の道の脇にあった「知られざる神に」

という祭壇の碑文を用いて、人々の一般的な宗教心に訴えた。パウロはアテネの人々にとっての「知られざる神」とは、まさに「世界とその中の万物とを造られた神」であり、その神こそが真の神であるということ、だからこそ、人間が造った偶像を拜むことがいかに愚かであるかを語ったのである。パウロはそのために28節でも、ギリシアのある詩人の詩を用いて、人間は神の中に生きており、神の子孫でもあると語る。パウロはここで汎神論的に神と人間を同一視しているのではない。人間は神からの命と息を与えられている存在であり(25節、創世記2:7参照)、人間こそが神の似象であるからこそ(創世記1:27参照)、神を金や銀、石などの像と同じものと考えてはならないと語っているのである。しかし、パウロは単に天地創造の神の存在と偶像礼拝の愚かさを語っただけではない。パウロはその後続けて、神はそうした無知な時代を今までは大目に見てこられたが、今こそ人々が偶像を捨て、悔い改めて真の神に立ち返るようにイエス・キリストをお選びになり、裁きの日を決め、キリストの十字架と復活によってそのことを確証なさったのだと語る。

4. アテネでの宣教の結果 (32節～34節)

体の復活を愚かなことと考えていたアテネの人々は、結局、キリストの復活をあざ笑い、福音を受け入れなかった。そのためパウロはアテネを去ることになる。しかし、パウロのアテネでの宣教は、けっして失敗だったのではない。パウロの宣教によって、議員ディオニシオやダマリスという婦人をはじめ、何人かの人々が信仰に入ったのである(34節)。福音を信じる信仰は、この世の知恵や知識ではけっして得ることはできない。しかし、神はどのような場所においても福音が語られる所には信じる者たちを起こしてくださる。

(弓矢健児)

テキスト 使徒言行録 17章16～34節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問43～46
ウェストミンスター信仰告白2:2, 4:1, 5:1, 6:3, 7:1, 8:1, 15:3,
21:1, 33:1
同大教理問2, 22, 51, 56, 101, 105, 108, 109, 113
同小教理問28

(単元のねらい)

アテネの状況は、異教社会にあり、神さまを求めようとする人たちが少ない日本の状況と似ております。そのため私たちは、パウロの説教を通して、キリスト者としてどのように信仰生活を持ち、人々に証しすれば良いのかなど、様々なことをこのテキストから考えることが出来ます。この問題は、子どもたちにとっても非常に重要な問題です。他の子どもたちとの違いを隠すのではなく、私たちの信じている主なる神さまの素晴らしさ、主によって救われることの恵みを、子どもたちに大胆に語ることにより、子どもたちも勇気をもって信仰を貫き、お友だちに証しする力が与えられるように、導いていただきたい。

「人の手に頼ることのない生ける主なる神さまを信じよう！」

みんなは、お友だちに「教会に行かない」と誘ったことはありますか？ お父さん、お母さん、家族の人たちと、遠くから教会に来ている人たちは、なかなかお友だちを誘うことは出来ないかと思えます。また、お友だちを教会に誘うのは、勇気がいりますよね。

パウロさんは、アテネに来ていました。アテネはギリシャの文化的中心地であり、大きな町です。そしていろんな神々(偶像)に満ちていた町でもあります。みんなの中にもギリシャ神話を讀んだことがある人もいるかと思いますが、多くの神々があり、神殿・神の像がありました。それは3000を超すと言われていました。日本でも八百万の神々と言われるのであり、宗教事情としては、アテネと日本はとても似ていたのです。

パウロさんは、このアテネにおいて、シラスさんとテモテさんが来るのを待ち、二人と出会ったら、他の町に行き、神さまのことを伝えようとしていました。そして二人を待っている間、パウロさんは、会堂や広場でそこにいた人たちと論じ

合っていたのです。ギリシャの人たちは、自分たちの知らない新しいことを聞くのが好きで、パウロさんが話す神さまの話も聞いていたのです。その時、論じ合っていた人々が、パウロさんをアレオパゴスという所に連れて行きます。アレオパゴスは、アテネでも重要な場所であり、裁判所や評議所などもありました。おそらく、多くの人たちがいる所で、もっと多くの人たちにパウロさんが語ることを聞いてもらいたかったからではないでしょうか。

そしてパウロさんは、アレオパゴスの真ん中に立って、神さまのことを話し始めます。パウロさんは、恐れることはありません。

「アテネの皆さん、皆さんの住むアテネには、3000を超すいろんな神さまがいて、皆さんはそれを信じているのですよね。信仰深いなあと思います。でもね、皆さんは『知られざる神』すらも、神の像として作り、拝んでいるのですよね。

私は他の神々については語りませんが、このあなたたちが『知られざる神』と言って拝んでいる

神さまについて知っているのですよ。お教えいたしましょう。その方は、世界とその中の全てのものをおつくりになられた主なる神さまです。そしてこの神さまは、御自身で天地万物を創られたお方ですから、人間の手で作られた神殿などにはお住みになることはないのです。御自身で全てが足りるのだから、人の手に頼ることもないのです。私たち人間に命を与え、毎日、私たちを生かして下さっているのも、この神さまなのです。だから、私たちはみんな、この神さまによってつくられた、神の子孫なのです。だから、この神さまを、金、銀、石などで作った神々と一緒に考えてもらっては困ります。

今まで皆さんは、このことを知らなかったのだから、神さまも大目に見て下さいます。しかし、今、私が真実を皆さんに語ったのだから、今までの誤りを認めて、悔い改めなければならないですよ。そうでなければ、神さまによって裁かれます。神さまを信じる者に、罪を赦し、救うために、イエス・キリストがこの世に来られ、十字架の死と死からの復活を遂げて下さったのです。

だから、皆さんも、この主なる神さまを信じましょう。」

この様にパウロさんは語ったのです。

(辻 幸宏)

しかし、アテネの人たちは、パウロが主イエスの復活を語った時、笑い始めるのです。アテネの宗教では、復活は考えられず、靈魂の不滅を信じていたのです。

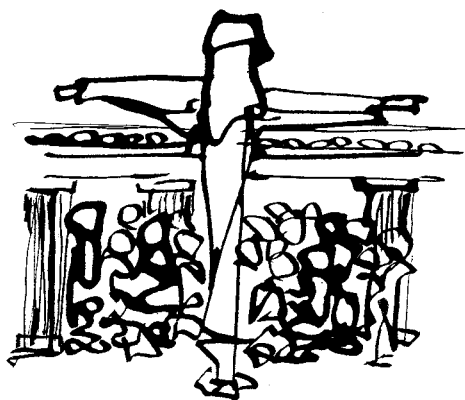
このことは、日本でも同じです。日本には、輪廻という思想があり、生まれ変わることは言われますが、「イエス様が復活したんだよ」と言うと、みんな笑うのですね。

そのため、パウロが語ったことに対して、ほとんどの人たちがあざ笑うか、その場から去っていくのです。しかし中には、パウロの語ることを信じて、神さまを信じた人たちも、何人かはいたのです。その数は、少ないかも知れません。しかし、本当のことが語られた時、それを信じる人たちはいるのです。そういう人が、一人でも二人でも与えられることにより、教会は大きくなり、神の御国におられる神さまにとっての大きな喜びとなり、それは私たちの喜びとなってきます。

だからこそ、お友だちに神さまのことを伝えること、教会に誘うことは、勇気のいることかも知れませんが、勇気をもって、お友だちに神さまのお話をさせていただきたいと思います。

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 17章24節後半

この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。



「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。でも他のほとんどのお友達は、まだ真の神様を知りません。日本には八百万（やおよろず）というほどのたくさんの神様がいます。このような状況の日本の中で、真の神様を信じて歩いていくことは、とても大切なことです。真の神様を心から信じて歩む者とさせていただきますしたいと思います。

〈展開例〉

皆、日本にはどれぐらいの神様がいるか知っているかな？（子どもたちの話を聞く）

日本には八百万（やおよろず）、本当にたくさんの神様がいます。例えば、学問の神様といえば、太宰府天満宮の菅原道真、ドロボウの神様といえば、清水の次郎長、サッカーの神様は、ブラジルのペレ、ちょっと古い話だけれども、打撃の神様といえば、巨人の川上哲治、お客様は神様ですといったのは、三波春雄でした。このように、日本では、ちょっと偉い人になると、皆神様にしてまいります。

今日登場してくる、ギリシャの人々もちょうどそういう人々でした。ギリシャは今の日本のように、文化の中心地でありました。「パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した」（ver16）と言われておりますように、多くの神々の像（偶像）が飾られておりました。そして、憤慨したパウロは、アレオパゴスというギリシャの首都アテネ一番大切などところに行き、真の神様について、人々の前でお話をしたのでした。

「世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです」（ver24-25）。

真の神様は、この天地万物をお造りになられて私たち人間をも造ってくださった神様です。そし

て、この神は偶像ではありませんから、何か人の手によって、仕えられて、安置されて、初めて拝むことができるような神様ではないのです。私たちは神様といつでも、どこでも、交わることができるのです。そして、「彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません」（ver17）と言われてるように、私たちが神様のことを求めれば、喜んで出会ってくださり、それだけではなくて、私たちに走りよって、私たちと共にいつも歩いてくださる神様なのです。

多くのお友達はまだ、木や、石や、鉄でできた偽者の神様（偶像）を信じているかもしれません。そのようなお友達に、真の神様を伝えていく者でありたいと思います。

〈お祈り〉

神様、あなたは、天地万物をお造りになられた真の神様です。神様あなたは決して、木や、石や、鉄でできた偽者の神様（偶像）ではありません。まだ偽者の神様を信じているお友達に、真の神様を知らせていくことが出来るように導いてください。このお祈りをイエス様の御名によっておささげいたします。アーメン。



〈ねらい〉

私たちがまことの神さま以外に心から頼りにするものは、すべて偶像であるとも言えます。私たちは、「知られざる神に」ではなく、イエスさまを通してよく知っている神さまを信じて生きていきたいものです。そのためにもイエスさまの私たちのために遣わしてくださった父なる神さまの心をもっともっと深く知りたいものです。

〈展開例〉

パウロさんは、ギリシアの首都アテネに着きました。アテネにいる人たちは、当時たいへんに知能の高い人たちが多くいました。生きる意味を考えていました。「自分が生まれた意味は何だろう？」これは人間が生きていの中で考えなければならぬ大切な質問です。皆さんも今生きています。しかし、お隣りの友だちとは、姿も性格もちがいます。つまり、個性があります。誰でも頭がよくて、かっよくて、可愛くて、みんなに好かれるような人になりたいですね。しかし、神さまは、私たちを皆が思うような存在には造られませんでした。世界に目を移すともっといろいろな人がいます。

パウロさんは、初めてギリシアのアテネに来ました。そこでイエスさまのお話をするためです。アテネの人たちは、まだイエス・キリストについてはみんな知りませんでした。そこで、パウロは、町の道の脇にあった「知られざる神に」という祭壇の文字を見つけて、アテネの人たちが神さまのことを求めているけれども、まだよく分からない神さまを拝んでいると言ってお話しました。どのような神さまのことをお話したかと言えば、「世界とその中の万物とを造られた神」こそ、まことの神さまであるとお話しました。だからこそ、人が造った神さまはむなしいことを訴えました。

それだけではなく、アテネの人たちは、目に見えるものは信じないで、目に見えない霊的なものを尊いものと信じていました。人間が死んだ後は

霊だけの存在になって、貴い存在になると信じていました。そのため、死んだ後に復活して、それも新しい身体を持つことなんて、ギリシアの人たちは考えたくもありませんでした。ですから、パウロさんがお話ししたイエスさまの復活のことをあざ笑ったのです。「私たちが望んでいるのは、新しい身体を得ることではなくて、最高の霊的な存在になるためなので、身体なんか必要がない」ということでした。

目に見えないもの、霊的な尊いものがあることはそのとおりです。けれども、神さまは、私たちが身体を持つものとして、しかも、尊いものとして造ってくださいました。神さまは、世界と其中的の万物とを造られたお方なのです。私たち人間の考えで、神さまを考えることはできません。

神さまは、私たち人間に都合の良い考え方ではなく、私たちが本当に救われるために、この世界を造り、保ってくださり、私たち人間も神さまが創造された世界を神さまの御心にしがって治めるために造られました。しかし、神さまのものを離れて神さまの言葉を破り、罪を犯してしまいました。その私たちにイエスさまを送って救ってくださったのです。そのことを信じて従うことが大切です。

〈お祈り〉

天と地にあるすべてのものを造ってくださった父なる神さま、そのことを私たちが信じていることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈視聴覚教材〉

アテネの位置：パウロの宣教旅行2,3（聖書巻末地図8を参照）。

アレオパゴスでパウロが説教している絵。

〈場所の背景〉

ペレアに置いてきたシラスとテモテをパウロはアテネで待っている。テモテの父親はギリシア人。アテネは当時、五千人くらいの小さな町。町の中は偶像が満ち溢れていた。アレオパゴス＝アレスの丘。アテネ出身の有力者が構成する評議会であり、その都市の文化・道徳を監督していた。その場所にパウロは連れていかれ、大勢の人々にイエス様のことを話し始めた。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント 聖句：使徒17:23～24

☆骨子：①町の至る所にある偶像を見て憤慨しパウロは会堂や広場で毎日議論。②知られざる神についてお知らせしましょうとアレオパゴス説教が始まる。③復活の所でみんな散っていくが、信仰に入った者がいた。

☆例：

アテネという町はギリシアにあるんだが、ギリシアと聞いてみんなは何を思い出すかな？ ギリシア神話って聞いたことあると思うんだけど。プラネタリウムを観に行くと、星座の説明に必ずギリシア神話のいろんな神様の名前が出てくるよね。でも神様ってただお一人のはず。パウロもアテネの町の至る所にある偶像を見て憤慨しています。その中に「知られざる神に」と刻まれた祭壇がありました。パウロはみんなにこう言います。「ちゃんと神様をお知らせしましょう。神様は天と地とその中にある全ての物をお造りになされた方。金や銀で像を造って拝むのは間違っています。祭壇など住む場所も造ってもらわなくてもいいのです。神様はご自身、在ってあるお方。また神の

子であるイエス様が復活され、死にも勝利されたのです。さあ皆さん、悔い改めて、このまことの神様のことを信じてください！」でもまわりにいた人々は、どうしても、復活が理解できず離れて行った。ところが、ほんの少しの人だが、信仰を与えられた人たちがいたのです。

私たちの住む日本も、アテネのように八百万の神様が至る所に飾られ、祭られていますね。悲しいことです。パウロが日本に来たら、きっと同じように本当の神様を信じるように話してくれるはず。また、十戒の中に「わたしのほかに神があってはならない」「いかなる像も造ってはならない」とあるのを、みんなも知っています。先生は一人、また一人……と神様を信じるお友だちが増えるよう、いつも祈っているよ。

〈展開の工夫〉

- ①パウロは伝道旅行中、アテネは何回行った？
- ②待っていたシラスとテモテに会えたのは、聖書のどこに出てくる？（18:5）
- ③この時、本当の神様を信じたのは何人か？（名前がわかっているのは2人）
- ④偶像の神って……どんなものがあるかな？
修学旅行で〇〇神宮とか行ったら、どんなことに注意したらいいのか。話し合ってみよう。

〈参考〉

エピクロス派：ギリシアの哲学者エピクロスに始まる学派。宇宙を原子と空間による機械論で説明し、感覚主義的快樂説をとる。

ストア派：同じころ始祖ゼノンがアテネのストア・ポイキレーと呼ばれた壁画のある廊で学を講じたことから、「ストア」の名があり、唯物論的・汎神論的・倫理的立場をとる。

（『新共同訳新約聖書略解』より抜粋掲載。日本基督教団出版局発行）

〈ねらい〉

唯一の生ける真の神様を信じる。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. パウロはアテネの町の至るところに偶像があるのを見て、怒りを感じました。何故だと思えますか？そもそも偶像とは何ですか？

→真の神様の代りに偶像を拝んでいたから。偶像は人間が造った偽りの神々の像のこと。

Q. ちょっと考えてみれば、木や石で神様を造ったり、その像を自分の神様として拝むなんておかしいですね。それなのに何故、そんなことをするのでしょうか？ 私達の住んでいる日本も、アテネのように多くの神々を信じてきた国です。神社やお寺もたくさんあります。そこが売りにしている御利益なんかを思い浮かべると、人は何で偶像を造り、拝むのか分かってくると思います。思いついたことを話してみてください。

→人間の欲望の達成と、恐怖や不安からの安心感を得るため。

Q. 使徒パウロは、アテネの人を偶像から真の神様に立ち帰らせるために、彼らの宗教心を認めることから始めました。彼らは「知られざる神に」という祭壇すら作っていたからです。そし

て彼らが知らずに拝んでいる神様とは、天地万物を創造された唯一の真の神様だと紹介していききました。真の神様と偽りの偶像の違いは何ですか？ 24～25節を見て、教えてください。

→天地の所有主なる真の神様は、手で造った神殿などには住まず、何か足りないことがあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要はない。偽りの偶像は人間が造った神殿に置かれ、人間の手によって不足を補ってもらわなければならない。

Q. 使徒パウロが「神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。」(29節)と諭しているように、生ける神様に代えて偶像を拝むことは無知で愚かなことです。そして神様は、復活の主によってこの世の罪を正しく裁く日を定めていらっしゃると思いますか？

→どこにいる人でも皆悔い改めて、死せる偶像から唯一の生ける真の神様に立ち帰ること。

☆死者の復活についてパウロが語った時、アテネの人々はあざ笑いました。人の魂がずっとなくならないことは信じていましたが、復活はありえないと思ったからです。しかしそれでも少数の人達が信じました。私達の住んでいる国も同じような考えをしますから、私達がイエス様の復活のことを語る時に、笑って信じないかもしれません。しかし真理を臆せず大胆に証しする時、神様は生きていらっしゃるから、真の神様を信じる生き方に入る者が起こされるのです。

4. お祈り

真の神様を信じる人が増えますように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

〈キリストを証しするコリントの教会〉

神の召しによって、使徒パウロと兄弟テモテはこの慰めの手紙を書き送りました。そしてこの手紙の中で、キリストの福音を宣べ伝えながらも、そのために、苦難の中にあるコリントの教会に対して、パウロ自身、苦しみの中で「死者を復活させてくださる神」(1:9)を頼りにしていることを告白することを証しつつ、キリストによってその苦しみと慰めが満ちあふれていることにコリントの教会と共に心を向けています(1:4-7)。

そして、パウロとシルワノとテモテがコリントの教会で宣べ伝えたキリストの福音が神の真実を証言するものであること、さらには、聖霊の恵みによってコリントの教会とパウロたちが一つであることを伝えるものです(1:21)。

パウロはこの福音を宣べ伝える使命が自分のものではなく、主の霊の働きによるものであり、その恵みにあずかるコリントの教会を「わたしたちの推薦状」(3:2)と呼び、この手紙自身が神の霊によって、「人の心の板に、書きつけられた手紙」(3:3)であるとも言っています。

つまり、コリントの教会はただ受け身としてパウロたちの伝える福音を聞き続けるものではなく、むしろ、キリストにある教会自身がすでに福音を宣べ伝えるものとして、神に用いられていることを明らかにするのです。

〈福音を宣べ伝える者の務めと信仰の良識〉

こういう経緯を受けて、パウロは「憐れみを受けた者としてこの務め(福音の宣教)をゆだねられているのですから、落胆しません」(4:1)と言い、パウロたちの宣べ伝える福音そのものに疑念を持つ誘惑を退けるのです。かえって、福音はその真実においてキリストの栄光をあらわしているにもかかわらず、「この世の神」(4:4)が信じようとしぬ人々の心の目をくらましていると断言するのです。そして、本来、イエス・キリストの福音はたとえそれがつたない奉仕であっても、神

が十分に用いてくださっていると信じられることが大切です。ここに神の働きによるものと、人間の力の限界を認めることが必要なのです。パウロが「神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。わたしたちの福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。」とは、伝道の不振を問う言葉でも、不信仰者のせいにする言葉でもなく、パウロ自身の使命とその限界をわきまえながら、福音を聞いた人々の心をご存じていますまことの神、イエス・キリストにすべてをおゆだねする信仰の良識を表明するものです。

〈神の力を明らかにする福音の光という宝〉

パウロは「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」(4:6)を与えられたのは「闇から光が輝き出よ」(創世記1:3)と命じられた造り主である神であって、人ではないことを明らかにします。そして、この福音の光という「宝」を「土の器に納めています」(4:7)と謙遜に告白します。この「土の器」という言葉は、人が土の塵で形作られたものであり、弱くはかないものであることを物語ります(創世記2:7)。しかしながら、この福音の光というただ一つの宝をこの土の器に納めていることを信じる時、どのような苦しみの中でも、失望せず、「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、」コリントの教会と一緒に神の前に裁かれる日の来ることをパウロは告白するのです(4:14)。

パウロは「土の器」であることに一度死ぬべき者であることを自覚しながらも、この主イエスの復活を信じることに於いて、「いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。」と告白しています(ローマ6:8、ガラテヤ2:19,20)。わたしたちの信仰の告白は、主イエスを信じることを表明するだけでなく、伝道を共にする教会によっても証しされるものであることを覚えましょう。(宮武輝彦)

テキスト コリントの信徒への手紙 二 4章1～15節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

パウロがまことに適切な比喻をもって、キリストの福音に生かされて生きる人間の姿を描き出している聖書箇所である。復活の主イエスの命の力によってわたしたちを強くしてくださる神の恵みを子どもたちとともに喜びたい。このかけがえのない宝がわたしたちにも分け与えられていることを語り示すことで、子どもたちを励ましたい。

「宝を納めた土の器」

食べ物や飲み物を入れる器は、さまざまな材料でつくられています。金や銀の器もあれば、土をこねて、それを窯で焼いてつくられた器もあります。プラスチックの器もあります。その中でも、土でできた器はいいな、と思います。手で持ったときにぬくもりを感じるからです。そして、何とも言えない味わいがあります。陶芸の手ほどきを受けたなら、自分で自分の器をつくることもできます。どこにも売っていない、自分だけのお茶碗やお湯飲みで、ごはんを食べたり、お茶を飲んだりするというのも、いいですね。

けれども、陶器の器にも弱点があります。それは金や銀やプラスチックの器とくらべてこわれやすいということです。皆さんの中にも、食事や洗い物をしているときつい手がすべてお茶碗を割ってしまったことのある人もいるかもしれません。

ところで、今朝の聖書箇所でパウロさんは、人間を土の器にたとえています。つまり、人間はほんとうは土の器のようにもろくこわれやすいのだということです。わたしたちは時々強がってみせたりしますが、よく考えてみるとなるほど人間はもろい、弱いものだということに気づくのではないのでしょうか。片手の一本の指にけがをただけでも、全身に力が入らなくなってしまう。ほんの小さな悩みごとがあるだけでも、夜も眠れなくなったりします。そういうことを思うと、ほん

どうにわたしたち人間は弱いな、と思うのです。パウロさんが人間を土の器にたとえていることは、ふさわしいと思うのです。

では、人間のほんとうの弱さ、もろさはどこにあるのでしょうか。それは罪に負けてしまう弱さです。わたしたちはみな、神さまのみ言葉を守り行うことが正しいことだとわかっています。けれども人間は自分の力によっては、み言葉を守って正しく生きることができません。神さまに従いとおすことはできません。なぜなら人間は生まれながらに罪人だからです。神さまの仰せのとおりによいことをなそうと願っても、この罪の力にさまたげられて、望んでもいない悪いことをしてしまうからです。

そして人間は罪の報いとしての死の力にもうちかつことはできません。そこにこそ人間のほんとうの弱さ、もろさ、みじめさがあるのです。

それならば人間は弱く、もろく、みじめなままなのではないでしょうか。強くなることはできないのでしょうか。いいえ、強くなることはできるのです。それは人間が自分で自分を強くするというものではありません。神さまがわたしたち人間を、神さまの力によって強くしてくださるのです。

パウロさんは4章7節で、わたしたちは土の器だけれども、そこに宝を納めていると言っています。宝とは何でしょうか。それはイエスさまの命です。

イエスさまはわたしたち罪人のために十字架に死んでくださいました。イエスさまには罪がありませんでした。死は罪の刑罰です。ほんとうはわたしたちは、罪の代価を支払って死ななければならぬはずでした。

けれども罪のないイエスさまがわたしたちのかわりに死んでくださいました。それゆえ神さまはわたしたちを無罪としてくださいました。そして神さまの恵みによって罪なき者とされたわたしたちは、もう罪の罰としての死を死ななくてもよいのです。イエスさまが死をうちやぶってよみがえられたことが、そのことの証明です。

イエスさまの復活の命、永遠の命こそが宝です。わたしたちは土の器ですが、神さまはこの宝をそこに納めてくださいました。よみがえられたイエ

スさまが、わたしたちのうちに生きてくださいます。このイエスさまの命の力によって、わたしたちは強くされるのです。もう罪の力にも、死の力にも負けることはないのです。

そのようにしてわたしたちは、土の器のままで、その中に納められたイエスさまの命のすばらしさを証して生きるのです。神さまの栄光をこの身に映し出して生きるのです。わたしたち自身が金や銀の器になる必要はないのです。弱いままでよいのです。もろいままでよいのです。器は中に納められた宝によって輝くのです。器がもろく弱いほどに、宝の輝きはきわだちます。イエスさまがわたしたちを強くしてくださるのです。わたしたちを輝かせてくださるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 二 12章10節後半
なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。



わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。でも失敗をしてしまうことがあります。悪いことをしてしまうようなこともあります。イエス様を信じているのに、弱い部分もたくさんあります。でもイエス様の復活の命に生かされるときに、私たちが強くしていただくことができるのです。かけがえのない宝が私たちのうちに与えられていることについて一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

皆、毎日、どんなコップで水を飲んでいるかな？
(子どもたちの話を聞く)

ある人は、大きなコップ、ある人は小さなコップ、ある人は、ガラスで、できたコップ、ある人はプラスチックでできたコップ、ある人は、窯で焼いたような立派なコップで飲んでいる人もいるでしょう。

ところで、今日の御言葉でパウロさんは、私たちが土の器に例えています。

「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために」(ver7)。

私たちは本当に弱い器です。ちょっと怪我をしたら痛くてしかたがありません。我慢ができなくなってしまうます。ちょっとお友達と喧嘩をしたら、「あーあ、喧嘩なんてするんじゃないかな」と、気になって夜も眠れなくなってしまうます。でも、本当に弱い器だなど感じるのは、罪を犯してしまったときです。お友達の悪口を言ったり、お友達を憎んでしまったり、お友達を許すことができなかつたり、お友達をいじめてしまったり、神様の御言葉を信じて歩むことができなかつたり、そういうときに、本当に後悔して、私は弱い器だなど感じてしまうと思います。

では私たちは、駄目なままなのでしょうか。決してそうではないのです。パウロさんは言うのです。

「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」(ver8-9)。

なぜでしょうか。自分で自分を強くする必要はないのです。イエス様を死の内からよみがえらせた、復活の命が、罪に打ち勝ち、死に打ち勝つ、復活の命が、私たちのような、土の器の中にも、盛られているからなのです。与えられているからなのです。

「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています」(ver14)。

私たちのために十字架について、裁きを受け、死からよみがえられたイエス様の復活の命が私たちの内にあるのですから、弱い器のままでいることはもうないのです。復活の命に生かされて歩んで行きたいと思います。

〈お祈り〉

神様、あなたは、この土の器に、復活の命を与えてくださり、イエス様の復活の命で弱い者を強くして下さることを感謝します。これからこの命に生かされる者としてください。このお祈りをイエス様の御名によっておささげいたします。アーメン。



〈ねらい〉

牧師という働きは、ときとして死を向かえようとする人の傍らにいななければならないときがあります。地上の生涯を終えようとするとても厳粛なときに遭遇します。そこで語ることのできる言葉があります。それが「イエスさまは十字架で死なれたけれども、三日目によみがえられました」という福音のメッセージです。この大切なメッセージを子どもたちと共に分かち合いたいと願います。

〈展開例〉

日本の北の寒い地方は、冬になると野菜を収穫することができないので、秋の季節に収穫した野菜を保存して、冬に食べるために、お漬物にします。ですから、南の温かい地方よりも、北の寒い地方の方が漬物は美味しいのです。

さて、パウロさんは、私たちイエスさまを信じて生きる人のことを「土の器」にたとえています。土の器は、温もりのある器ですが、その反面、落としたりすると壊れやすいものです。私たちは、そのような土の器だとパウロさんはたとえています。いきがって自分で何でもやれると思ひ込むこともあります。しかし、自分では何にもできないと落胆することもあります。私たちは、強がったり、弱く思ってみたりとたいへんむずかしい存在です。

しかし、パウロさんが今日のところで言いたいのは、私たち人間はどうしようもなく、もろいものだというを言いたいものではありません。そこで終わりではないのです。

確かに、私たちは弱く、もろいものかもしれませんが、それでは生きていく力は生まれません。生きていく力はないのでしょうか？ パウロさんは、私たちは「土の器」だけれども、実はその器

の中には、「宝」が納められているのです。その宝は、復活されたイエスさまの命です。永遠の命なのです。器は、土からできていて、温かみはあるかもしれませんが、壊れやすくもろい器です。その「土の器」の中にイエスさまの復活の命、永遠の命という宝を納めてくださいました。

私たちは目に見える外側の土の器ではなくて、それは金や銀のように見栄えはよくないかもしれませんが、中身はイエスさまの素晴らしい復活の命が納められているのですから、その宝物を多くの人たちに見せたいと思います。弱いかもしれませんが、こんな自分かと思うかもしれませんが、でも、この宝の素晴らしさは、私たちが輝かせるだけではなく、周りの人たちも輝かせる生き方へと変えるものなのです。

〈お祈り〉

天の神さま、私たちは土の器のように弱いものですが、そんな器にイエスさまの復活の命という宝物を納めてくださってありがとうございます。宝の輝きを私たちの周りの人たちにも見せてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈視聴覚教材〉

聖書巻末のパウロの宣教旅行の地図。

〈御言葉の背景〉

コリント二4章7節の「土の器」とは罪人である私たち人間の姿を表すと同時に、私たち人間が作られたものであり、神さまが造り主であることをも表しています。イザヤ書45章9節に「災いだ、土の器のかけらにすぎないのに自分の造り主と争う者は。」とあります。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：コリント二4章7節「このような宝を土の器に納めています。」

☆骨子：①弱くもろい土の器②素晴らしい宝③宝の中身は

☆例：

私たちには神さまに対しての罪があります。本当は神さまの望んでいることをしたいのに、なかなかそのとおりにはできません。いつも神さまの望まない事ばかりをしてしまいます。神さまの事を一番とせず、自分の事を一番にしてしまうのです。聖書はこのような罪人の私たちを「土の器」と表しています。土の器は他の器と比べて弱く壊れやすいです。プラスチックや金属や紙の器と違い土の器は落としただけでも簡単に割れて壊れてしまいます。私たちは神さまの目から見れば弱く壊れやすいものだといっているのです。わたしたちは何もせずにほうっておくと、簡単に壊れてしまうのです。自分では神さまの方を向いているつもりでも、気づくと神さまと反対を向いていて、神さまから離れていき、破滅への道を進んでしまいます。

聖書はそのような弱く壊れやすい土の器である私たちに宝を納めなさいといっています。宝とは一体何なのでしょう。聖書は土の器に宝を納めた様子を次のように語っています。4章8節「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。」ど

んな大変な状況においても決して壊れることのない強くて頑丈な器の様子がうかがわれます。器自身はもろいのに納めた宝の故に壊れなくなるのです。器の中に納められた宝はそれほどまでに素晴らしいのです。

宝の中身はイエス・キリストです。土の器は弱く壊れやすいものでしたが、中にキリストの宝を納めると頑丈で壊れないものになります。私たちには、イエス・キリストの霊である聖なる神さまが与えられています。聖霊なる神さまはわたしたちが苦難にある時に助けて下さる宝ものなのです。パウロさんは伝道旅行の最中に様々な苦しみに遭います。しかし力強く御言葉を語り続けます。これはパウロさんが素晴らしいのではなく土の器の中に納められた宝のおかげなのです。

〈展開の工夫〉

4章1節に「わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。」とあります。この務めとは神さまからゆだねられている伝道を表しています。しかし、実際のパウロさんの伝道は苦難の連続です。土の器にすぎないパウロさんの伝道の様子を知ることにより、納められている宝である神さまの恵みの偉大さを知ろう。

パウロさんの伝道の生涯について聖書で調べてみよう。聖書巻末のパウロの宣教旅行の地図を見ながら使徒言行録13、14章から調べよう。キプロス→アンティオキア→イコニオン→リストラ→デルベ→リストラ→イコニオン→アンティオキア→ペルゲ→アタリア→アンティオキア（第一回宣教旅行）。



〈ねらい〉

土の器に宝が納められていることを喜ぶ。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. パウロは自分達のことを「土の器」と表現しました。それによってパウロが言いたいことは何だと思えますか？

→自分は弱く、欠けの多い罪人であるということ。

Q. 同じコリントの信徒への手紙二12章7～10節を読んでみましょう。ここを読むと、パウロは「一つのとげ」という特別な弱さを帯びていたことが分かります。パウロはこのとげが取り去られるように一生懸命に祈りました。その結果として、主はパウロに何とおっしゃいましたか？そしてパウロはどういう思いに導かれたでしょうか？

→復活の主の恵みはパウロに十分であり、その御力はパウロの弱さの中でこそ現されるとおっしゃった。パウロは弱さを誇り、キリストのために満足し、弱い時にこそ強いという思いに導かれた。

☆私達も特別に弱さを感じる部分があるかもしれませんが、私達はそれが取り除かれるように願います。

ます。努力して何とかなるなら、そうすればいいのですが、受け入れなくてはならないものもあるのです。その時、「神様は私を愛していないから、こんな弱さを与えたんだ」と思うかもしれません。しかしイエス様は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」とおっしゃってくださいます。すぐに受け入れることは難しいかもしれませんが、しかしイエス様の御言葉を信頼して歩んでゆくなら、御言葉が実現するのを経験するのです。

Q. さて、特別な弱さについて考えましたが、一般的にも私達には皆、弱さがあります。それは罪があるからです。「こんな自分ではイエス様の証しなんてできない」と思ってしまうかもしれません。そんな私達の希望はどこにあるとパウロは言っていますか？ 7節を見て、教えてください。

→土の器にもられた宝に、望みがある。

Q. この「宝」とは何ですか？ 10～11節から教えてください。

→イエス様の復活の命。

Q. イエス様の復活の命に生かされる時、私達にはどのような歩みが可能となりますか？

→自分の弱さも福音の恵みを鮮やかに示すと信じ、イエス様の御力が欠けのある自分を通して現されることを信頼して歩む。

4. お祈り

イエス様の福音の宝が与えられていることの感謝。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト フィリピの信徒への手紙 3章12～21節

〈フィリピ教会への感謝の手紙〉

フィリピの教会は、使徒パウロによるヨーロッパ伝道の最初の伝道地で、使徒言行録第16章にその様子を知ることができます。

パウロはいつもフィリピの教会のことを心に覚え、また、その伝道における具体的な贈り物を共に伝道に尽くしてきたエパフロデイトをとおして受けたことをとても感謝しています(1:5, 2:25, 4:18)。また、パウロは獄中からこの手紙を書いています。そのような困難の中でも、主イエスの導きの中で、フィリピの教会の伝道と献身を知ってかえって励まされつつ、感謝の手紙を書き送っています。

〈天の賞与を目指す競争を共にする〉

パウロはコリントの信徒への手紙一9章24節では、賞を得るように走ることを勧めましたが、ここでは、パウロ自身の走り方を明らかにしています。それは、神ご自身がお与えくださる天の賞与を目指す競争であり、そのゴールは、イエス・キリストの救いの恵みの中を走る抜くことの先にあるものです。信仰の道には、神とキリストを知る知識が求められるだけでなく、この神とキリストの備えておられる「正しい道」をルール(基準:道筋)に従って進んでいくことが求められます。パウロはこの正しい道を「キリストとその復活の力を知る」(3:10)道と言い、そのルールを「その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかること」と言い、そのゴールは「死者の中からの復活に達すること」、と言っています。つまり、キリストを知ることは、主のための苦しみにあずかるという本当の正しさ、義を必ず伴い、そのゴールは、神さまの恵みによってもたらされるものです(3:9)。

ですから、この競争は、もちろん、兄弟姉妹がお互いにその競争心をあらわにするものではなく、かえって、主のための苦しみを共にするという一つの喜びに向かうものです(1:29)。

〈キリストの栄光ある体に変えられる日〉

パウロ自身、神とキリストを知るといふ完全な知識に到達していないことを認めながら、「自分がキリスト・イエスに捕らえられている」(3:12)と告白します。それは、脇目を振らないでひたすら走るパウロ自身の伝道の熱い思いを極めて率直に言い表したものです。パウロには同時に、「十字架に敵対して歩んでいる者が多い」(3:18)というパウロ自身の深い悲しみがありました。それは、福音の真理を歪める悪い教えにならう者たちであり、それらは人の誇りから出た割礼や律法を生活を正しさの条件とするものです。

パウロは自身の信仰の姿勢を一人の競争者にたとえることを奨励しながらも、「しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてください。」(3:15)と言い、目標を定めるといふこと以外の考え方を認めています。目標よりも、救いの慰めや、人生の幸いや愛することを第一に覚える方法も考えられる余地があることを考えることもできるでしょう。

そして、「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」と言い、各々の信仰の熱心さや経験の度合いを受け入れています。また、パウロのみならず、「わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい」(3:17)と言い、実際に、信仰の競争は、お互いにその模範となる人に倣うことによって、むしろ互いにキリストの謙遜をあらわすものであることを物語っています(2:1-4)。

パウロの目標である、「死者の中からの復活」は、キリストの再び来られるときに、「わたしたちの卑しい体」が、キリストの「栄光ある体と同じ形」に変えられるときに実現するものです。しかし、今、このことを信じて信仰の道を歩んでいくとき、わたしたちはキリストにある希望と慰めとを一つにするのです(3:20, 21、コリント一15:20-22, 15:53, 54)。(宮武輝彦)

テキスト フィリピの信徒への手紙 3章12～21節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問36

〔単元のねらい〕

キリスト者の本国は天にあり、それゆえキリスト者の生涯はひたすら上にあるものを求めて生きる生涯となる。このような終末的な人生観においてこそ、地上の人生にも堅固な地盤が据えられることを覚えたい。ウェストミンスター小教理問答は37問で死の時の祝福を、38問で復活の時の祝福を語っている。ここでパウロがそのいずれをも射程に入れていることはあきらかであろう。が、この展開例では死の時の祝福に比重を置いてみた。もちろん、再臨の日の体の復活と新天地の祝福をもふまえて語りたい。暗唱聖句（コロサイ3章1節）は、長ければ1節前半だけでもよいであろう。

「天国を目指して」

マラソン競技を見たことがありますか。長い距離を、ゴールをめざしてひたすらに走ります。とちゅうで苦しくなったり、あまりにつらいのもう走るのをやめてしまおうと思ったりすることも、いく度もあると思います。それだけに、すべての距離を走りきってゴールテープを切ったランナーの顔には、何ともいえない達成感、充実感があります。見ているわたしたちにも大きな感動を与えます。

ところで、パウロさんはイエスさまを信じる人の生涯をも、マラソン競技になぞらえています。そう言われてみれば、人生もマラソンに似ていますね。とちゅうで喜びも楽しみもある一方で、苦しいことやつらいこともあって、それをのりこえていかなければならないことも似ています。

イエスさまを信じて生きるわたしたちの人生が何よりもマラソンに似ているのは、ゴールを目指して走るということです。そして、生涯走るのをやめることなく、ひたすらに走り続けるのです。なぜなら、この地上にはゴールはないからです。ゴールは天国です。

今、わたしたちは地上を歩んでいます、この地上ではわたしたちは、ほんとうのふるさどを目指して旅する旅人、ゴールを目指して走るランナーにすぎません。イエスさまを信じて生きるわ

たしたちのほんとうの住まいは、イエスさまのおられるところ、すなわち天国です（20節）。

イエスさまを信じる人にとっては、死ぬことは恐れでも悲しみでもありません。死はすべての終わりでも、滅びでもなく、新しい命のはじまりです。死は人生の最後の試練ですが、この試練によってわたしたちの魂はすべての罪をきよめられて、天国に招き入れられます。そして、顔と顔を合わせてイエスさまを仰ぎ見るのです。いつまでもイエスさまとともにいるのです。それはわたしたちがまだ見たことも、聞いたこともないような喜び、祝福です。

この天国の祝福こそ、地上の人生をイエスさまを信じて走りぬいた人に与えられるごほうびです。このごほうびがあまりにもすばらしいので、わたしたちは「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」（13、14節）のです。そのようにして走らずにはおれないのです。

天国の祝福は、イエスさまを信じてこの地上を走りぬいたすべての人に分け与えられます。この約束は神さまの約束ですから、確かです。そして、神さまはもう今この地上で、この約束が確かであることを保証していただきます。すなわ

ち主の日の礼拝で、わたしたちはイエスさまにお会いします。イエスさまと一緒にいます。これは、天国の祝福の先取りなのです。マラソンでは、いくつかの場所に水や飲み物が置いてあって、ランナーはそこでのどをうるおしたり、暑さをしのいだりすることができます。苦しみがやわらぎます。同じように主の日の礼拝で、イエスさまはわたしたちを命の水でうるおしてくださるのです。休みを与えてくださるのです。ですから、どんなにつらく苦しいことがあっても、それに負けずに走り続けることができます。

もうひとつのことを覚えましょう。わたしたちは自分の力で走るではありません。イエスさまと一緒に走ってください。天におられるイエ

スさまは、天から聖霊なる神さまをおつかわしく下さいました。この聖霊なる神さまが、わたしたちがみ言葉に従ってちゃんと走ることができるように守り助けてくださいます。パウロさんはそのことを、イエスさまがすでに今わたしを捕えてくださっている、わたしを支配してくださっていると言っています（12節）。

救いの完成をめざして、この地上のマラソン競走を走りぬきましょう。おたがいに祈りあい、励ましあって、皆でゴールに入れていただきます。天のゴールにはイエスさまが待っていてくださいます。そして、わたしたちのひとりひとりに栄冠をさずけてくださるのです。（木下裕也）

[今週の暗唱聖句] コロサイの信徒への手紙 3章1節

さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。
そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。



彼らの行き着くところは滅びです。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。そして、もまだまだ長い人生をこの地上において生きていかなければなりません。しかし、私たちの人生はどこに行くのかわからない人生ではありません。天国を目指しては知り抜いていく人生です。私たちの国籍は天にあります。天国を目指して歩み人生の素晴らしさについて一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

皆、お正月にやっている箱根駅伝って知っているかな？（子どもたちの話を聞く）

全部で15校の大学が母校のために一生懸命に禪（たすき）を繋いで東京から箱根までを往復するレースです。皆一生懸命に走りますが、途中で疲れて止めてしまう人や、途中で怪我をしてしまう人もいて、たくさんの人が走っても、優勝するのはたったの1校です。最後のランナーがゴールに飛び込んでくるとき、多くの人たちが、拍手と喝采で迎えるのです。

でもどうだろう、もしこの選手たちが、どこに行くのかわからないで、走り出したらどうだろう？ どれだけ走ったら、次の人に禪（たすき）を繋げると分からないまま走ってしまったら、どうなってしまうだろうか。きっと皆、どこまで走ったら良いかわからずに、困ってしまうと思います。

ところで今日の御言葉でパウロさんは、私たちの人生を、競争に例えています。

「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」(ver13-14)。

私たちの毎日の生活は、マラソンのようです。でも、どこに行くのかわからないようなマラソ

ンではありません。ゴールがちゃんとあります。では、ゴールとはどこでしょうか。私たちの人生のゴールは天国です。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」(ver20)。

もし私たちが、どこに向かって走っているのかわからなければ、私たちは、どのように走ったらよいのかもわからなくなってしまいます。ちょうど、お買い物を頼まれても、何を買って来て欲しいかわからないお買い物に行くようなものです。どうしてよいか困り果ててしまうでしょう。

しかし、私たちは毎日イエス様を見上げて、一生懸命に走るのです私たちのために十字架について、裁きを受け、死からよみがえられたイエス様を見上げて走るのです。そして最後に、私たちの人生のゴールである天国に入ります。そして、この天国こそが、私たち一人一人に対する神様からのご褒美なのです。毎日、私たちが神様から引き離そうとする様々な事柄があります。でも、私たちは人生のゴールである天国を知っているのですから、後ろのものは忘れて、「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」(ver14)とパウロが語るように天国を目指して走って行きたいと思います。

〈お祈り〉

神様、私たちがどうぞ天国を目指して毎日走ることができるように導いてください。イエス様の御名によっておささげいたします。アーメン。



レントとは、「四旬節」とも言います。イースター前に幾日かの断食をすることは、古くから行なわれていましたが、それが六週間に延長されたのは、四世紀のことです。主イエス・キリストの荒野での断食と結び付けられて、40日間（六週間中の日曜日を除く36日にその前の4日を加える）に再延長され、その初めの日が「灰の水曜日」と呼ばれるようになりました。

〈ねらい〉

子どもたちは、学校行事予定に従っての歩みをしています。この月は、学年最後の第三学期です。この機会に、教会暦に従って生活をするこの大切さも、「レント」に入るにあたって共に味わいたい。復活祭（イースター）に向けて少しずつ心と生活を整える大切さも伝えたい。

イエスさまによって私たちのいのちの道は切り開かれていますから、そのイエスさまをめざして日々の歩みをしていくように子どもたちを励ましたい。

〈展開例〉

もうすぐイエスさまが十字架にかかって死なれましたけれども、三日目に復活されたことを記念し覚える復活祭（イースター）を迎えます。その六週間前からレントに入ります。レントは、まさに教会の暦です。そのイースターをめざして行く日曜日に、パウロさんがイエスさまを信じて生きる私たちの歩みをマラソン競技になぞらえている聖書を読みました。

マラソンのレースにわたしは参加したことはありませんから、その競技の大変さはヨクワカリマセン。しかし、マラソンランナーのある方が、マラソンレースをするとき、とにかく前にある電柱

をめざして走るそうです。電柱がくるたびに、またその次の電柱と目標を変えて、ゴールをめざしたそうです。北京オリンピックのマラソン選手として出場をめざしている人たちは、どのようにしてレースをするんでしょうね？

パウロさんは、私たちの地上の歩みが、ほんとうは天のふるさとをめざしての競争であると言えます。競争と言ってもだれかとゴールを争うのではなく、イエスさまのおられる天の国をめざして、ちゃんと前を向いてみんなで競争するのだと言うのです。ですから、私たちの死は、人生のゴールではなく、通過点にしか過ぎません。天の国の祝福こそ、私たちイエスさまを信じて地上の人生を走り抜く者のゴールであり、御ほうびなのです。そして、この祝福は、イエスさまを信じて地上の生涯を走り抜いたすべての人に与えられるのです。だから、聖餐はマラソンレースの途中で取る給水であり、スタミナドリンクです。救いの完成、ゴールをめざして、みんなで励ましあってゴールをめざしていきましょう。

〈お祈り〉

天の神さま、みんなで救いの完成である天の国のゴールをめざして行くことができますように、私たちの歩みを守ってください。大切な聖餐に早くあずかれるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

石橋えり子著、『教会の春・夏・秋・冬』（日本基督教団出版局）。

その6ページに掲載されている「イースターまでの作りだめカード」を作成してみましょう。

〈場面設定〉

現代の社会は競争社会です。大人たちは仕事場や家庭の様々な場面で他人と比較され評価されます。「勝ち組・負け組」や「格差」という言葉によく象徴されています。子供たちの世界も同様です。学校や塾において勉強やスポーツなどで他人と比較されて評価されています。では神さま信じる私たちの天国を目指す競争とはどんな競争なのでしょう。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：フィリピ3章20節「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」

☆骨子：①天国を目指して走る②一人で走るのではない

☆例：

皆さんには何か目標がありますか。運動をやっているお友達はうまくなりたいとか試合に勝ちたいと思っているでしょう。また音楽や習い事をやっているお友達は上手になりたいしコンテストなどでいい成績を残したいと思っていることでしょう。何をやるにしても目標があると頑張れますよね。聖書では3章14節で「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることで。」とっています。私たちの人生も目標をもって走りなさいとっています。では神さまを信じている私たちにとっての目標とは何でしょうか。それは天国です。この世で神様の道をまっすぐに進み、天国に入れていただくのです。これが私たちにとっての目標なのです。聖書に「栄光ある体と同じ形に変えて下さるのです。」(3章21節)と天国の祝福が約束されています。

では目標である天国への道を一人ぼっちで進んでいくのでしょうか。いいえそうではありません。神さまと一緒に歩む仲間である兄弟姉妹を与えて

いてくださいます。どんなことでも一人でやっている不安になります。わからないことを教えてくれたりする人や、悩みを相談できる人がいると力強く感じます。天国への競争にもそういった仲間である教会の兄弟姉妹が与えられています。神さまは私たちが一人で信仰の生活をすると正しい道をそれていってしまい、悪の道に行ってしまうことを知っていて、正しい道を進むことができるように一緒に歩む仲間を用意していただきます。仲間で祈りあい励ましあい教えあいながら歩むことができます。それだけではなくもっとよい仲間を用意して下さいます。それはイエス様です。イエス様は私たちが道に迷ってどうしたらよいかわからなくなったときに正しい道を教えてくれます。正しい道を進んでいく勇気がないときでも一緒にいて励ましてくれます。私たちが困っているときにはいつもそばにいて助けてくれるのです。イエス様と一緒に走る競争なら何も恐れることはありません。「わたしたちの本国は天にあります。」(3章20節)天国のゴールを目指してみんなで歩いていきましょう。

〈展開の工夫〉

小さい頃から聖書に親しんで、神さまに祈ることは大切なことです。特定の期間(例えば一ヶ月間)毎日、聖書を読み、祈ることにチャレンジしてみよう。日付入りのカードとシールを用意し、出来たら貼っていくようにします。分級の仲間や教会学校の先生と励ましあいながら目標を目指してやってみよう。読む聖書の箇所や祈りの課題は子供たちと相談して決めてもいいし、先生が事前に決めてもいいと思います。教案誌の「いのちのばん」を利用していいと思います。



〈ねらい〉

途上にあることを自覚して、信仰の道を走り続ける。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. フィリピの町の教会には、自分はもう完全な人になったと思っていた人達がいました。それに対して、パウロは自分をどのようにみなしていますか？ 12節の前半を見て、教えてください。

→まだ完全という目標の途上にある。

Q. パウロは完全は目標であり、自分はなおその途上にあり、何とかしてそのゴールに到達するために努めていると述べています。これは私達もそうなのです。では、途上にある私達には、まだ何も確かなものはないのでしょうか？ それでは不安ですが……。パウロはどう述べていますか？ 12節の最後を見て、教えてください。

→パウロは、自分はすでにキリストに捕えられていると述べている。

Q. 既に捕えられているのはパウロだけですか？ そうでないと思うなら、どのようにしてだと思えますか？ 私達はパウロがダマスコ途上で復

活の主にも捕えられたようには、主と直接お会いしていないのです。フィリピの信徒への手紙1章5節を見て、教えてください。

→福音と御霊によって、私達もイエス様に捕えられている。イエス様を信じる信仰が与えられているのがその証拠である。

☆パウロはイエス様に捕えられているからこそ、自分も捕えようと努めていると述べています。パウロにとってイエス様は、自分の罪のために命を投げ出してくださった神様の御子でした。だから、パウロは生涯をかけてイエス様をもっともっと知ろうとして、イエス様によって上に召して、お与えくださる賞を得たいと願い走り続けたのです。私達も自分のために十字架にかかって、しかもその救いにあずからせてくださったイエス様のことをもっと知ってゆきたいし、イエス様と共に永遠に生きる救いの完成のゴールを目指して走り続けたいですね。

Q. パウロはその信仰の道を走るにあたって、「後ろのものを忘れ」と述べていますが、何故これが大切だと思いますか？

→今までに学んだことややってきたことで、もう十分と勝手に満足して、目標を目指して走らなくなることがあるから。過去の罪や失敗も私達を責め、信仰の道を歩み続けられなくすることがある。しかしイエス様の十字架の血潮がその罪のために流されたことを思い起こし、感謝をもって再び前進させられたい。

4. お祈り

目標を目指して走り続けることができるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

ペトロがこの手紙を書いた目的は、各地のキリスト者たちが信仰による試練の中にあっても、イエス・キリストへの信仰に堅く立つように励ますためである。この励ましの中心として語られているのが信仰者の「希望」と「喜び」である。

〈神への賛美と希望〉（3－5節）

3節から5節は、原文では長い一つの文章であり、そこには父なる神に対する賛美が満ちている。最初に「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」とあり、続けて賛美の内容やその理由を書き連ねている。

特に、この賛美は「神の豊かな憐れみ」に向けられている。なぜなら、神の憐れみこそが私たちの救いに関わるすべての働きの根拠だからである。私たちが「新たに生まれさせる」のも、私たちが「生き生きとした希望」を与えられるのも、「朽ちることのない天の財産を受け継ぐ者とされる」のも、そして、私たちの信仰の歩みが「守られる」のも、私たちに向けられた「神の豊かな憐れみ」によるものなのである。

イエス・キリストの復活という出来事もまた、この神の豊かな憐れみの現れとして理解される。だからこそ、キリストの復活は、キリストを信じる者たちにとって「生き生きとした希望」となるのである。新共同訳が「生き生きとした希望」と訳したこの言葉は、口語訳や新改訳では「生ける望み」と訳されている。希望が「生ける」ものであるということは、その希望があいまいで不確かなものではなく、私たちの人生の現実に関わり、私たち自身を『今』生かす確かなものであるということである。

〈信仰者の試練と喜び〉（6－9節）

神の豊かな憐れみへの賛美に続いて、キリストによって与えられる救いについて述べられる。それは抽象的ではなく、現実的な救いの性格についてである。神から与えられる救いは、すべての信

仰者に「心からの喜び」をもたらすものである。

ただし、救いが喜びをもたらすということは、困難や試練がまったくないことを意味するわけではない。ペトロは、実際に各地でイエス・キリストへの信仰のゆえに苦難や迫害にあっている人々の現実を充分に知った上で、「あなたがたは、心から喜んでいるのです」と語っているのである。それは、信仰者にとって、信仰ゆえの試練は、避けることのできないものであると同時に、単なる苦しみや、悲しみ、悩みをもたらすだけのものではないということをペトロも、そして、信仰者たちも確信しているからである。このような試練と信仰の関係をペトロは、「火による金の精錬」に譬えている。すなわち、試練を耐え抜いた信仰は、「火で精錬された金」のように純粋で価値ある物であり、しかも「朽ちるほかない金よりはるかに尊い」もの、すなわち『本物の信仰』であること、そして、そのような信仰は、キリストの再臨の時には、その報いとして「称赞と光栄と誉れ」を受けけるものであることを教えるのである。したがって、今現在、苦難の中にあり、悲しみ、悩みを覚えることがあったとしても、信仰者は、すでに与えられている希望のゆえに、喜ぶことができるのである。

しかし、「希望」がそうであるように、この「喜び」も将来についてのものだけではない。ペトロは、信仰者たちの「今現在の喜び」について語っているのである。なぜなら、信仰者たちは、キリストをその目で見ていない今においても、すでにキリストへの信仰によって生かされ、「魂の救いを受けている」からである。神の豊かな憐れみによる救い、イエス・キリストによって成し遂げられた救いは、将来与えられるのではなく、今すでに信仰者たちに与えられているものである。だからこそキリストを信じる者たちは『今』、「キリストを愛し」、「言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれて」いるのである。（松田基教）

テキスト ペトロの手紙 一 1章3～9節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問35, 36

〔単元のねらい〕

クリスチャンは、この世において救いとそれに伴う祝福を味わいつつ、かの世での救いの完成、御国の完成、復活を望み、試練に遭っても喜んで生きています。この箇所は、そのことに対応する二つに分けることができます。前半3節から5節では、クリスチャンに約束されている救いの完成を、「生き生きとした希望」「天に蓄えられている財産」と表現しています。後半6節から9節では、その希望があるゆえにこの地上の生涯でいろいろな試練があっても、救いを確信して、主キリストの臨在を覚えつつ、飛び跳ねるほどのすばらしい喜びに満ちあふれているのです。クリスチャンはいつもこの希望を見据えた生き方をしているのです。子どもも大人も老人も同じ希望を与えられた生きる者であることを示しましょう。皆同じ希望に生かされていることはすばらしいことです。

「希望と喜びに生きる」

今日は、わたしたちの希望、クリスチャンが信じて待ち望むことについてお話しします。希望というのは、わたしたちに喜びや元気を与えてくれるね。たとえば、○月○日の誕生日には、欲しかったゲームソフトを、おとうさんが買ってくれる、と約束してくれた。うれしいですね。元気になるよね。そして、誕生日が待ちどおしいね。

さて、わたしたちクリスチャンがもっている希望、将来の楽しみって何かな？クリスマス、それも確かに楽しみでもあるね。もう少し別の、もっと素晴らしい楽しみです。やがて、イエス様がもう一度来てくださる。そのときわたしたちの救いが完成する。神の国が完成する。また、新しい体に復活する。これがわたしたちの希望だね。これをいただけるのを楽しみに待ちながら、生活しているのです。そのことを聖書では、イエス様を信じて、「生き生きとして希望を与え」られている、とあります。イエス様を信じている人にはだれにでも与えられているのですよ。子どもも、大人も、おじいちゃんも、おばあちゃんも、一人ひとりが同じようにもっているのです。

ところで、すばらしさを表すのに、いろいろな表し方があるよね。たとえば、ここにケーキがあるとす。食べてみて、そのおいしさを説明する

のに、いろいろな言い方をするでしょ。「おいしくて舌がとろけそうだ」「うわー最高にうまい」「こんなにおいしいのは生まれて初めてだ」でも、まだだれも見ることがないもの、そのすばらしさを表すのは、難しいね。それで、わたしたちがやがて天国でいただくすばらしさ、つまり、「生き生きとした希望」のことを、聖書では、「財産」と言っています。財産って分かるかな？土地とか、家とか、銀行に預けてあるお金などのこと。どれも大切なものだね。世の中にある大事なもののひとつだね。天の財産だよ。別の言葉で言うと、天の宝だね。

それで、その天の財産のすばらしさを説明して、「あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産」と言っているんだ。天にしまっているから、だれにも盗まれることはない。(古い汚れている本や服を見せて)このように古くならないんだよ。汚れてもう使いたくなくなってしまうこともないんだよ。また、きれいな花でもやがてしぼんでしまって、その美しさはなくなってしまうね。でも天国の宝はそんなことはないんだよ。

さらに、神様がやがてくださるといふ、天の財産を信じて待ち続けることができるようにしてく

ださるのですよ。なんだか信じられなくなりそう
なときも、聖書によって、神様の約束は本当です
よ、必ずあげますよ、と何度も何度も言ってく
ださるのです。実にありがたいことだね。だから、
わたしたちはこの約束を忘れることなく、いつも
楽しみにしつつ、喜んで生活することができるの
です。

この喜びは、飛び上がって喜ぶような喜びです。
体を動かさなくて、「うれしーい！」なんて言う
のは、かえって難しいよね。うれしいときは顔が
ニコニコするだけではなく、体全体に表れるよね。
友だちや家族と抱き合って喜ぶことがあるよね。
たとえば、運動会で自分のチームが一位になっ
た時とか、自分の学校のチームが地区大会で優勝
したら、皆で飛び上がって喜ぶよね。イエス様を
信じているわたしたちの喜びは、このような喜びに
少し似ている。いやいや、もっとすばらしい喜び
なんだ。言葉では表し切れないほどすばらし
い喜び、跳びはねて喜ぶような喜びなんだよ。

たとえば、もうじき一年生なるときのことを思
い出してごらん。もうすぐ小学一年生になる。ラ
ンドセルや机や鉛筆削りなども買ってもらった。
上履きも体育シューズも揃えてもらった。4月か
ら小学生だ。小学生になれることを思い浮かべ
ると、嬉しくなるね。これは一日だけの誕生日の喜
びと違うね。4月には必ずなれるのだね。4月か
らず一と一年生なんだ。幼稚園児に戻らないん
だよ。だから、他の喜びと違うね。この喜びを
心の中に持ちながら生活する。楽しみにして喜び
ながら、待つ生活だね。わたしたちクリスチャン
の待ち望む生活も、これと同じようなんだね。一
人ひとりが楽しみに待ち望みつつ喜んで生活する

ことができるのです。

ところで、わたしたちはイエス様をこの目で見
たことはありませんが、いつもイエス様と共にい
てくださいます。けれども、毎日の生活の中で、
ときにはつらいことや悲しいことや、いやなこと
があります。たとえば、病気やけがをしたり、友
だちとけんかしたりする。でも、この喜びは消え
ないのです。そういうつらいことよりも、神様が
約束してくださった希望の方が、すばらしいから
です。

たとえば、皆さん、遠足は好きですか。大好き
だね。遊園地や広い広場などで走ったり、一緒に
ゲームをしたり、もう終わりにしたくないほど楽
しいね。それで、遠足でなによりも一番の楽しみ
なのはお弁当だね。何が入っているかな？お弁当
を開くときもうれしいね。それに、みんなで一緒
に食べるからさらに楽しいね。だから、お弁当は
重たくても、平気だね。お弁当の重さよりも、後
でお弁当を食べる楽しみの方がはるかに大きいか
らだね。それと同じように、病気や怪我、喧嘩な
どのつらいことよりも、イエス様とその救い、ま
た天の宝、天の財産の方がすばらしいので、いや
なことつらいことも、悲しいこともすぐに忘れ
させてくれるんだよ。

イエス様がわたしを愛してくださっている。わ
たしは必ず天国へ行けます。天の財産は必ずいた
だけます。だから、わたしたちには喜びがあふれ
ています。これがわたしたち一人ひとりにあるす
ばらしい喜びです。小さな喜びではありません。
うれしくて飛び跳ねるような、大きな喜びです。

(大西敏雄)

[今週の暗唱聖句] ペトロの手紙 一 1章8節

あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、
言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。でもイエス様を信じているからといって、もういやなことにはなにもない、毎日楽しいことばかり、そんな毎日だけのなかという決してそうではないのです。イエス様を信じてもおお苦しいこと、悲しいこと、嫌なことはあります。でも私たちは、イエス様を信じて天国を知っているのですから、毎日の様々な苦しみや戦いに勝利できるのです。今日は、イエス様を信じる人生の素晴らしさについて、一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

皆、大きくなったら、何になりたいかな？（子どもたちの話を聞く）

皆色々な希望があると思います。私はお花屋さんになりたい、ぼくは野球選手になりたい、私は学校の先生になりたい、ぼくはサッカー選手になりたい等、色々な希望があると思います。でも私たち神様を信じるクリスチャンが本当にもつべき希望、それは天国に行くことができるということです。

「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」(ver3-4)。

この御言葉は、私たちがイエス様を信じて、永遠の命をいただいて、天国に入ることこそが、一番の希望であると言っているのです。

私たちの洋服は段々古くなっていきます。持っているおもちゃも、段々壊れていきます。綺麗なお花もいつかは枯れてゆきます。でもイエス様を信じる私たちには、もう朽ちることがない、枯れることがない、しばむことがない素晴らしい宝を天国にもっているのです。

「それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが」(ver6)と聖書

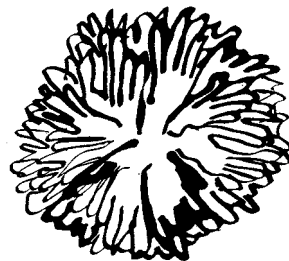
が言っているように、私たちの毎日の生活には、色々な苦しみや、悩みや、嫌なことがたくさんあります。

でもそれらの苦しみは、決して神様の知らないものではないのです。それを通して神様は、私たちを神様が喜ばれる良い子にしようと鍛えてくださるのです。「あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです」(ver7)。

私たちは、毎日の生活の中で、どんなに苦しいこと、悲しいこと、嫌なことがあったとしても、神様は、私たちを守ってくださるのです。そして、私たちは、天国で素晴らしい祝福を受取ることができるという約束を手に入れているからこそ、毎日を、イエス様と一緒に元気に過ごすことができるのです。天国で素晴らしい宝を受取ることが約束されているのですから、神様を見上げて、神様と一緒に毎日の生活を歩んで行きたいと思います。

〈お祈り〉

神様、私たちの毎日の生活には色々な悩みや苦しみや嫌なことがあります。でも、私たちはイエス様を信じて天国に入ることができ、そこで、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださったことを感謝いたします。天国の祝福を心から信じて、毎日を歩めるように導いてください。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



言葉では言い尽くせない
すばらしい喜びに満ちあふれています。

〈ねらい〉

レントの第二主日です。イースターを待ち望むときです。私たちのために、ご自身の命を差し出してくださったイエスさまの御受難を覚えながら、他の人のために自分が何ができるかを考えてみましょう。そのためには、子どもたちが「生き生きとした希望」に生かされることの大切さを伝えたい。

〈展開例〉

ペトロさんは、イエスさまのお弟子さんの中でも代表者のような人でした。そのペトロさんは、イエスさまが十字架に付けられる前、裁判を受けているときに、ひそかにその様子を見るために、裁判が行なわれている館の庭に忍びこみました。そして、庭にいる人にイエスさまの弟子だと見破られてしまって、「イエスさまというような人をわたしは知りません」と三度も否定してしまいました。そのペトロさんがイエスさまを信じることは、私たちが「生き生きとした希望」であるイエスさまの復活を信じることですよ、と語りました。

実は、この手紙は、ローマにいるキリスト者にあてて書かれた手紙だと言われています。ローマにいるキリスト者とは、イエスさまを信じる信仰のゆえに、ローマ皇帝を崇拜することを拒んでたいへん強い迫害にあっていました。そんな迫害、つまり、いのちの危険にあうかもしれない人たちに向かって、「生き生きとした希望」を語ることは簡単なことではありません。

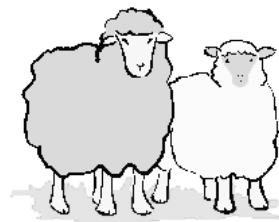
皆さんも分かると思います。重い病気をしている人、なかなか病気がよくなる人に向かって、「元気でいてくださいね」と言うことはできませんよね。それと同じです。でも、ペトロさんは、イエスさまの復活を信じていましたから、ま

た自分の「知らない」と言ってしまった失敗も重ね合わせながら、私たちが今あるのは、イエスさまのゆえです。それもイエスさまの十字架と復活によって私たちは、望みのない者であったにもかかわらず、希望を神さまからいただきましたと語りました。

決して、ペトロさんは、私たちがイエスさまを信じることによって失敗をしないと語っているではありません。「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれません」（6節）と語っています。今まででも、これからも、いろいろと私たちを悩ませることは起こります。これはイエスさまを信じているからといって、逃れることはできません。しかし、ボクシングの試合を見たことのある人は分かると思いますが、ダウンすることは敗者ではありません。ノックアウト(KO)さえしなければいいのです。最後の勝利は、イエスさまを信じる私たちの方にありますから、どんなことがあってもイエスさまに従っていけるようにお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の神さま、どんなことがあってもイエスさまに付いて行くことができるように強めてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈場面設定〉

私たちは人生において様々なことを体験します。嬉しいこともあります、悲しいことや辛いことも体験します。そんなとき神さまを信じて歩む私たちに与えられるものは何でしょうか。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：ペトロの手紙一1章8節「言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」

☆骨子：①約束されている希望②与えられる試練③喜んで生きる

☆例：

皆さんはお父さんやお母さんに遊びに連れて行ってもらう約束をしたことはありますか。とても楽しみですよね。その日が来るのをまだかまだかと指折り数えたりし待ちますよね。神さまは聖書を通して私たちに素晴らしい将来の約束をして下さいます。それは天国に入れられ、イエス様を会うことができることです。天国では皆さんのことを愛しているイエス様とずっと一緒です。神さまの愛に包まれて生活をするのです。神さまの嫌がる悪い思いや罪の思いは一切湧いてきません。天国では全てのことが神さまに喜ばれるし、私たちも喜び満たされて生活します。私たちは神さまが約束されたすばらしい天国の希望を楽しみにしながらこの世の人生を歩むのです。

皆さんは食べ物で好き嫌いがありますか。お父さんやお母さんは皆さんに、好きなものばかりでなくいろいろなものを食べるように言いませんか。それはみんなのことが憎いから嫌いなものを食べさせようと思って言っているのではありません。成長していくのにいろいろな栄養が必要なので嫌いなものも食べるように言うのです。神さまもよく似たことをします。皆さんがクリスチャンとして成長していくのに必要なものを全て用意して下さいます。みんなにとって好きな食べ物のように嬉しいこともあります、嫌いな食べ物のように辛いこと悲しいこともあります。で

も神さまはみんなのことを嫌ってそのようなことをするではありません。皆さんがクリスチャンとして成長していくのに必要なものばかりなのです。嬉しいことも悲しいことも全て神さまから皆さんに与えられている大切なプレゼントなのです。

でも私たちは悲しいこと辛いことばかりがあると辛くて生きていけません。そのために神さまは素晴らしい約束をしていて下さるのです。天国の約束です。将来に楽しいことがあると少々の辛いことも我慢ができます。また神さまは私たちのために将来の楽しみである天国のすばらしさを前もって味わうこともできるようにして下さいます。それは礼拝です。私たちは神さまを礼拝するとき神さまがいつも私たちと一緒にいて下さることがわかります。神さまが私たちのことを愛して下さることもわかります。他では味わうことのできない喜び、安心感に満たされます。聖書はこれを「言葉では言い尽くせないすばらしい喜び」といっています。この喜びに満たされて、天国の希望を抱きつつ生活していきましょう。

〈展開の工夫〉

天国の祝福について話し合おう。子どもカテキズム36問を子供たちと読み、天国はどんなところか話し合ってみよう。天国の様子はなかなか大人でも想像できないですから、一人一人違ったイメージを持っているかもしれません。どんなイメージで天国をとらえているか聞いてみよう。天国に希望を持ち、神さまを信頼してこの世での生活をするように、また祈れるように導いていきたい。



〈ねらい〉

イエス様によって与えられた希望と喜びに生きる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようとした心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいとします。

Q. 最近はクリスチャンでない人達でも、誰かが死ぬと、「天国に行ったんだよ」と言います。でも、「その根拠は？」というと、「そうだから。そう思いたいから」以外にありません。もちろん、誰が天国に行っているか、そうでないかを知っているのは、神様お一人です。でも、どうせだったら確かな根拠をもってほしいですね。じゃあ、私達イエス様を信じる者達が天国に行ける希望の根拠は何ですか？ 3節を見て、教えてください。

→イエス様が死者の中から復活されたことこそ、私達イエス様を信じる者の希望の根拠。

Q. でも、人生が長いことを思うと、「今は信じてるけど、これから先は大丈夫かなー」と不安を感じるかもしれませんね。色んなことが起こっても、果たしてイエス様を信じ続けられるのか、未来に希望があっても、現在の自分は大丈夫かなと案じるのは当然です。ペトロは、こうした思いをどのように力づけてくれますか？ 5節を見て、教えてください。

→神様の御力により、信仰によって守られている

と述べることによって、力づけてくれる。イエス様を信じて救いにあずかった者は、決して完全に最終的に救いから落ちてしまわないように神様に守られている。でも、神様の恵みは自動的ではなく、教会学校の礼拝や分級で学ぶ御言葉、祈りなどによって信仰が守られてゆく。

Q. 8節によれば、私達が今与えられている素晴らしい恵みは何ですか？

→「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」(8節)。

Q. ペトロが手紙を書き送ったクリスチャン達は、一度も見ることがないイエス様をどうして愛し、信じ、喜びにあふれたのだと思いますか？ 私達はどうですか？

→イエス様が彼らを愛し、その罪のために十字架にかかって死なれ、希望に生かすためによみがえってくださったことを知ったから。

私達もイエス様の愛と罪の赦しと永遠の命の希望のために、イエス様を愛し、信じ、喜ぶ。

☆未来の希望とそれまで守られること、そして現在の救いの喜びが教えられました。実はそのことが教えられているそれぞれの文章をよく見ると、それをしてくださるのは全部神様であることが分かります。もちろん、私達はイエス様を信じる信仰をしっかりともってゆくのですが、それも神様の恵みの内でなされることです。私達を望みに生かし、喜びを与え、守ってくださる恵みに感謝して歩いていきましょう。

4. お祈り

イエス様によって与えられた希望と喜びのために。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

〈天にある栄光のキリストの姿〉

黙示録は、ヨハネが晩年にパトモスという島に流刑となって幽閉され、そこにある鉾山での強制労働に服させられたときに書かれた文書です。時はドミティアヌス帝の迫害の時代で、多くのキリスト者、とりわけ監督や長老といった指導者が逮捕され、拷問を受け、様々な仕方で処刑された苛酷な時代でした。そこで勇敢に信仰を告白し、信仰を貫く者もいましたが、逆に信仰を捨て、教会から離れる者や、日和見的で優柔不断な態度を取る者もいました。皇帝への香を捧げれば、処罰を免れるということで、心の中で信仰を全うすればよいと形式的にせよ偶像礼拝に屈服する者もいましたし、賄賂を贈り、皇帝への香を捧げたとする偽の証明書を発行してもらった者もいました。聖職者の中にすら、身の安全をはかるために教会の聖器物を役人に渡す者まで出ました。ヨハネがこの黙示録を書いたのは、このような激しい迫害を背景として、そのただ中において、迫害によって動揺し、苦しんでいる教会と信仰者を励まし、堅く信仰に立ちつづけることを勧めるためでした。

黙示録は、黙示文学という形態で書かれた文書であることに注意して読む必要があります。黙示文学を、ある特定の時代や状況に当てはめて時代を予測したり予言するものとして理解したり、解釈すると読み誤ることになります。黙示文学は、迫害の時代に当局者に悟られないように、暗号化して書かれた文学形態で、象徴的な内容となっているからです。

ここで繰り広げられる場面は、いつの時代にもあてはめられ、いつの時代にも起こっていることで、その苦難を貫いているのがキリストの勝利です。そしてキリスト者と教会は、どんな困難な時代にも貫かれているキリストの勝利と完成を目指して、そこに希望をおいて「死に至るまで忠実である」(2章10節) ことが求められているのです。

ここでヨハネが最初に見たのは、ちょうどエゼ

キエルがそうであったように、光輝く主イエスの神としての栄光でした。エゼキエルは、バビロンという異国の地に幽閉されて、イスラエルの伝統も神の栄光の地にまみれたと失望し、落胆する中で輝くような神の栄光の幻を見ました。ヨハネも、今まさに息の根が止められるかに見える教会の悲惨な状況の中で、教会の主はどこにおられるのかという懷疑が信仰者たちを襲う中、教会のかしらなる主イエスが、実はどのような方であるのかを見せられていくのです。その方は、この迫害をも、迫害を起こし自らを神と自称して礼拝を強要する皇帝をも支配し、その御手のうちに導いておられる方であることを見せられていくのです。

七つの金の燭台とは、かつてエルサレム神殿に置かれ、七つの受け皿をもった、メノラーと呼ばれる大燭台で、それは70年にエルサレムが陥落したとき、将軍ティトゥスによってローマに持ち去られてしまったものでしたが、神の臨在と栄光を象徴するものでした。そこで栄光の主は、迫害の中にある教会と信仰者たちを、こう励まされます。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」と(17、18節)。激しい迫害の中、自分たちの無力さを覚えるだけではない、教会を守ることができないように思える主イエスの無力さに不信感を抱く中、主はご自身の真実な姿をヨハネに示されたのでした。

この世の悪の圧倒するような力の前に、わたしたちは確かに無力です。しかしわたしたちの主は、無力なのではなく、この世の権力を圧倒する権威と力を持った主なる神なのです。その方は、「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者」でした(8節)。わたしたちは、困難な日々の出来事の中にあっても、この主の真実な姿を仰ぐ中で、本当の信仰の力と勇気が与えられていくのです。(三川栄二)

テキスト ヨハネの黙示録 1章9～20節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問25, 26, 27

〔単元のねらい〕

救済史に基づくカリキュラムも、いよいよ終わりが見えてまいりました。本日から黙示録を学びます。黙示録には、歴史・救いの完成が予告されていますから、世の終わりの出来事を記した書と理解されています。しかし同時に、この書は、当時の礼拝共同体をいよいよ生き生きとした礼拝に導くため、つまり礼拝を主題とした書でもあります。終末の出来事、神と差し向うことは、主日礼拝式においてこそ先取りされ、現在化されます。世の終わりがそこにはっきりと示されるのです。主日礼拝式によってこそ、救済の歴史の只中におかれていることを知る事が許されます。単元の教理的主題は、ウエストミンスター大教理問答で言えば「キリストの高い状態」です。主キリストの天上でのお働きを扱います。(問54、「～彼の教会を集め、守り、彼らの敵を征服し、その役員と民に賜物と恵みを与え、また彼らのために執り成される。」)

「真ん中におられて、ぎゅっと握り締めて」

今朝は、ヨハネの黙示録を読みました。この書は、新約聖書の最後、聖書全体の最後におさめられている書です。思い起こすと、僕たち私たちは、去年の4月から旧約聖書、聖書の最初におさめられている創世記を読み始めました。それから2年近くかかって、いよいよ今日から、最後の書物、ヨハネの黙示録を読んで神さまに礼拝をささげます。

今読んだ御言葉は、誰が語ったのでしょうか。「わたし」と書いてあります。わたしとは誰かという、ヨハネという人です。聖書の中にヨハネによる福音書とかヨハネの手紙とか、ヨハネさんがよく出てきます。イエスさまのお弟子さんです。この黙示録を書いたのも、ヨハネさんです。今どこにいるのかという、パトモスという島です。ローマの皇帝は、ヨハネが一生懸命、イエスさまのことを伝道して、大勢の人たちが信じて行くことが気に入らませんでした。伝道させないように、友達もない寂しい島に無理やり連れて行っただけです。教会の仲間たちと離れ離れに暮らしています。どれほど、寂しかったことでしょう。

日曜日がやってきました。ヨハネさんは、パト

モスの島にいても、いつものように礼拝を捧げていました。心はイエスさまがおられる天へと高く引き上げられて、喜びと感謝で溢れていました。聖霊に満たされていたのです。すると突然、なんと後ろから、背中の方から、大きな声がするのです。「七つの教会に手紙を出して、あなたの見ているものを教えてあげなさい。」

ヨハネさんはそのときのことを、こう言っています。誰の声なのだろうと振り向いたら、七つの金の燭台が見えました。その真ん中にはイエスさまがおられました。イエスさまは、七つの星を右手にもっておられました。あとでわかったのですが、金の燭台とは教会のことです。星というのは、天使、つまり神さまの御言葉を告げる人、教会の牧師先生のことですね。右手でぎゅっと握り締めておられるのです。何よりもイエスさまご自身の口から力ある御言葉が語られていました。その御顔はまるで太陽のように照り輝いていました。

わたしはそのとき、もう死んでしまう！ と思いました。だって、こんなに罪深いわたしが、天国の光景、神さまのお姿を見たのですからね。するとどうでしょう。イエスさまが、その右の手をわたしの頭の上において、こう仰ったのです。

「愛するヨハネ、恐れる必要はないよ。わたしは最初のものであり最後のもの。そして今、こうして生きているもの。わたしは、十字架で死んだものであり、しかし、よく見てごらん。わたしは復活しているね。そして永遠に生きるものです。あなたが信じているその通り、わたしこそ、人間を救い、裁くことのできるものです。愛するヨハネ、恐れる必要はないよ。あなたは、わたしのためにわたしと一緒に働いているね。そして今は、こんなさびしい島にまで流されてしまっている。でも、ヨハネ、わたしはあなたの苦しみや悲しみ、喜びも感謝も、なにかも知っているよ。わたしはあなたをこれからも愛し続けるよ。そして、もっともっとあなたを用いて、わたしのことを、あなたの仲間たち、七つの教会、つまり世界中のすべての教会に知らせたいのだ。だから、今、見たことやこれから見せてあげること、世界がこれからどうなっていくのかも、見せてあげます。そして、それをぜんぶ仲間たちに伝えなさい。」

ヨハネさんは、こうして、イエスさまが見せてくださった幻、光景をこの手紙の中に記してゆきました。天国の光景だから、人間の言葉では間に合いません。言い表せないほどのものなのです。自分ひとりで読んで、すらすら分かるような手紙ではありません。でも、教会は2000年間、ヨハネの黙示録を読んで、天国の美しさ、そのすばらしさ、その喜びと命に憧れ続けてきました。

それならどうして教会で読むと分かってくるのでしょうか。教会で一番大切な日は、いつですか。大切なことはなんですか。ヨハネさんは、いつ、イエスさまがおられるすばらしい天の光景をのぞき見る、かいま見ることができたのですか。主の日と書いてあります。つまり、日曜日です。これは偶然ではありません。僕たち私たちは、毎週、日曜日に礼拝を捧げています。今ここで、イエスさまの御言葉、説教を聞くことができている

でしょう。だから、分かってくるのです。

イエスさまはその幻の中で、七つの教会の真ん中におられました。七つの教会というのは、七つだけという意味ではありません。世界中の数え切れない教会のそのすべてということです。今ある教会だけではなく、これまであった教会、これから開拓伝道して建てあげられて行くすべての教会のことです。教会の真ん中にイエスさまがおられる、つまり、世界中の教会はイエスさまが治めてくださり、守ってくださり、育ててくださる、イエスさまが中心だということです。僕たち私たちの教会もそうです。そして、一つ一つの教会は、バラバラではなくて、イエスさまによって一つにつながっているのです。

その教会を導き、守り、育てる一番大切な神さまの方法は、イエスさまの御言葉です。イエスさまは、天使つまり、御言葉を語る先生を、そのどんなものよりも力のある右の手で優しくそして力強くぎゅっと握ってくださって、支えてくださるのです。

先生もイエスさまに支えられています。先生だけではありません。イエスさまのために奉仕する人、特にイエスさまのことを誰かに伝えてあげる人は、もう誰でも天使です。神さまからの伝令だからです。天の神さまのお使いをしているからです。僕たち私たちはみんな、優しく、けれどもしっかりと握り締められているのです。

天におられるイエスさまは、ヨハネさんが見た幻からもう1900年以上も、世界中の教会を導き続けていてくださいます。そして、イエスさまはもう一度、地上に、目に見える形で戻ってきてくださいます。そして世界を審判し、すばらしく完成してくださるのです。僕たち私たちのように礼拝している人は、その準備をちゃんと整えることができるのです。 (相馬伸郎)

〔今週の暗唱聖句〕 イザヤ書 55章11節

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとに戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。

〈ねらい〉

私たちは、イエス様を信じて救われました。そして毎週教会に集っています。でもなぜ私たちは毎週教会に来て、神様を礼拝しなければならないのだろう。今日は、教会生活を続けていくことの大切さについて、一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

皆、今日の御言葉を書いたヨハネさんってどんな人だか知っている？（子どもたちの話を聞く）

このヨハネさんは、ヨハネの手紙とかヨハネの福音書とか、この黙示録を書いた人でした。ヨハネさんがこの黙示録を書いたとき、彼はバトモスという島に流されてしまっていたのです。パウロさんは一生懸命に伝道をしていましたが、それがローマ皇帝の気に入らないで、遠くのバトモスという島に送られてしまったのです。今は一人ぼっちです。

そこでヨハネさんはいつものように、日曜日に神様を礼拝しました。聖霊に満たされ、神様に感謝を捧げていました。すると、後ろの方で、ラッパのような大きな声がしました。「あなたが見ていることを書き留めて、七つの教会に送りなさい」（10-11節）。

ヨハネさんは、誰の声だろうと思って、振り向き直りました。すると、七つの金の燭台が見えました。その真ん中には、長い服を着て、胸に金の帯を締めたイエス様がおられました。右手には七つの星を持っていました。

ヨハネさんは倒れてしまいました。「もうだめだ、死んでしまう。私のような罪深い者が、神様を見てしまったのだから。」

けれどもイエス様は言いました。「恐れることはありません。私は十字架で死んだけれど、こうしてよみがえり、これからもずっとずっと生きるものです。愛するヨハネ、あなたのこともよく知っています。」

それから、イエス様は金の燭台と星の意味を教

えてくださいました。金の燭台は教会で、星は天使、つまり、神様の御言葉を伝える牧師先生のことです。イエス様は世界中の全ての教会の真ん中におられて、守り、育ててくださるのです。教会は全部、イエス様によって一つにつながっています。

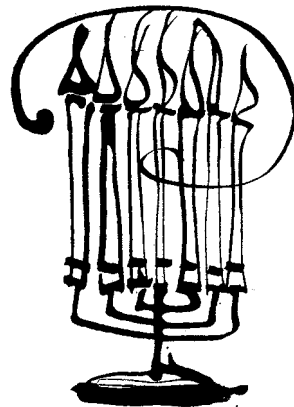
神様の御言葉を語る牧師先生や神様のために奉仕する人たちを、イエス様は力強い右の手で、優しく守り、支えてくださいます。

イエス様はもう一度、地上に戻ってきてくださいます。そして世界を新しくしてくださいます。

その日を楽しみに待ちながら、毎週神様を礼拝していきましょう。

〈お祈り〉

イエス様が、教会を守ってくださっていることを感謝します。牧師先生や私たちも守ってくださってありがとうございます。イエス様に会える日を楽しみにして、毎週神様を礼拝できるように、これからも導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



七つの燭台は教会である。

〈ねらい〉

本日からヨハネの黙示録に入ります。子どもたちには黙示文学は分かりにくいところだと思います。しかしそうだからと言って、分かりやすいところだけをピックアップして語ることはできません。聖書研究をよく読んでくださり十分な準備と祈りをもって語ってください。今日のメッセージの中心は、「死と陰府の鍵を」、「生きている者である」と言われていますイエス・キリストが持つておられるということです。つまり、私たちの生も死もイエスさまの手の中にあるということです。

〈展開例〉

今日の聖書は、イエスさまを信じる信仰のゆえに、パトモス島という島に流されたヨハネさんが書いた「ヨハネの黙示録」です。実は、ヨハネさんが牧師をしていた教会には、イエスさまを信じる信仰のゆえに捕まって、殺された人もいました。あるいはその反対に、イエスさまを信じる信仰を迫害のゆえに捨てた人もいました。そんな中でヨハネさんは、天におられるイエスさまを仰ぎ、礼拝し続けていました。

そして、イエスさまは、天におられますが、私たちの命をすべてイエスさまが握ってくださることを明らかにヨハネさんに見せてくださいました。どんなにイエスさまを信じることを止めさせようとしても、命がそのために失われることがあったとしても、私たちのいちばん大切な命はイエスさまの手の中にあるということです。

今の時代は、イエスさまを信じる信仰のために迫害されることはないかもしれませんが、信じる人は、しかし少ないですね。やはり、簡単なことではありません。そんな私たちに対してイエスさまは、「恐れるな。わたしは最初の者にして最

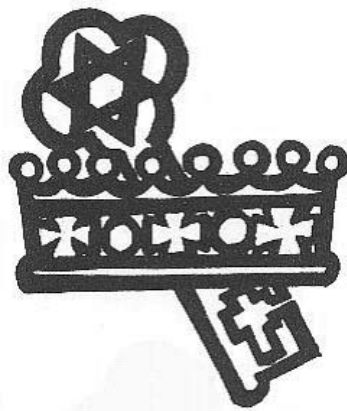
後の者、また生きている者である」(17節)とおっしゃっています。つまり、イエスさまは、私たちが人生のスタートラインに立ったときから、最後の天の国にゴールするまで生きて働いてくださるお方です。ヨハネさんは、信仰を守るのがむずかしいときこそ、イエスさまを礼拝しました。そのことがイエスさまを信じる人すべてに力と希望を与えるのです。

〈お祈り〉

天におられるイエスさま、私たちはイエスさまを信じるのがむずかしくなるときがあります。そのときにも私たちの信仰を守ってください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

色をぬりましょう！



〈サブタイトル〉

「メノラーのイエス様」 or
「スーパーサイヤ人のようなイエス様」

〈中心テーマと狙い〉

イエス様は目には見えないが、いつも僕たち私たちの真ん中におられる力強いお方であることを知って、クリスチャンであることの勇気と確信を得ること。

〈教師の備え〉

今日から四回にわたって（3月16日・23日は違うが）、ヨハネの黙示録を学ぶこととなるが、まずCS教師自らが、ヨハネ黙示録を通読しておくのが望ましい。加えて、新聖書注解やチェーン式新改訳聖書などの緒論を読んでおくと、大枠がつかめるので、子供たちに話す時や聞かれた時なども役に立つ。黙示録を読むことで、ヨハネの体験を疑似体験し、その感動を胸に、より一層子供たちと福音を分かち合えると思う。

〈ふまえておくべき背景・前提〉

黙示録は、激しい信仰の戦いの中にあるクリスチャンを励ますために書かれたが、救われた子供たちもまた信仰の戦いの中にある。なかなか言葉や表情には出さないが、子供たちなりに苦難を味わっている。そのような子供たちの霊的戦いの目線で、当該箇所の御言葉を共に味わいたい。ゲームやネットなどで動画等に慣れている子供たちにとっては、むしろ黙示録はすんなりと入ってくるものがあるのではないだろうか。

〈中心アイテム〉

メノラー（七つの枝の燭台）

〈作業パターン1〉

『カラー聖書百科事典』（p.136）などの図鑑や事典で、メノラーの絵を見せる。また、クリスマスで使ったキャンドルを七つ用意し、テーブルか机の真ん中に置き、部屋の電気を消して火を灯し、

神殿においてメノラーが唯一の光源であったことを疑似体験する。

〈作業パターン2〉

黙示録1:12~16に書いてあるイエス様の姿を、画用紙に書いてみる（画用紙や色鉛筆・クレヨン・クレパスなどを用意しておく）。その際、あらかじめ教師自身が、自分なりの絵を描いておく和良好的。もしくは、ドラゴンボールのスーパーサイヤ人の絵を用意しても良い。

〈作業パターン3〉

ヨハネが幻の中で見せられた七つの金の燭台は、アジア州にある七つの教会を表していた。教会名簿や、何かの冊子に載っている教会の場所が書かれた地図などを用意しておいて、子供たちに、近隣の教会の名前を七つ（あるいは自由な数）挙げさせる。そのことによって、自分たちの教会の他にも、たくさんのいろんな教会があることを知って勇気づけられるし、また中会的な意識も持つことができる。

〈予告編〉

「来週も、今回と同じように絵を描く予定なので、みんな聖書を読んでイメージを考えておいてね！あとNINTENDO-DSなどで絵の練習もしておいてね！」

〈祈り〉

イエス様、僕たち私たちは普段あなたを見ることはできません。でも、いつもあなたが真ん中と一緒にいてくださることを、信じさせてください。そして勇気を与えてください。



〈ねらい〉

イエス様が教会の只中にいらっしゃることを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいばと思います。

Q. さて、イエス様は今、どこにいますか？

→自由に話させる。おそらくは天という答えだろう。十字架にかかった後、三日目によみがえられて、天にお帰りになったことを聞いたことがあるだろうから。

Q. イエス様は天にいらっちゃって、私達は地上にいて、天国に行くまでイエス様に会えないならさびしいですね。つらいことがあった時とか、悲しい事があった時、イエス様に会いたいと思うから。それはきっと初代教会の人達も同じで、特に迫害の下にあった彼らにはなおさらだったでしょう。そんな初代教会のクリスチャン達に、イエス様はヨハネを通して御自分がどういうお方であると示されましたか？ 12～13節を見て、答えてください。

→七つの金の燭台の中央にいらっしゃるお方。

Q. 「七つの金の燭台は七つの教会である」(20節)と書かれています。それなら七つの金の燭台の中央に復活の主イエス様がいらっしゃるというのは、どういうことですか？

→イエス様が七つの教会と共におられるということ。

Q. 「七」という数字は聖書では特別な意味をもっています。ですから、七つの教会とは、単に11節に書かれている七つの教会だけを指しているのではなく、あらゆる時代のあらゆる教会を意味しています。この真理を私達の教会にあてはめるとどういうことになりますか？

→私達の教会の真ん中にもイエス様は共にいてくださるということ。

☆イエス様は確かに天にいらっしゃいますが、しかし御自分の聖霊によって私達の通う教会にも共にいてくださいます。教会と共にいてくださるというのは、教会の礼拝に臨んでくださっているということです。迫害されている中で礼拝を守り続けていた初代教会のクリスチャン達にとって、これはどれほど大きな慰めだったことでしょうか！そして私達がつらいことや悲しいことがあって、イエス様に会いたいと思った時、礼拝の中でイエス様は私達と出会い、私達を慰め、力づけてくださるのです。イエス様がヨハネを通して教えてくださった御自分に関する真理は、初代教会だけでなく、現代の私達にとっても、そしてこの世に教会が続く限り、かけがえのない慰めを与え続けるのです。

4. お祈り

イエス様が共にいてくださることを感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がった課題を祈っても良いと思います。

〈天上の礼拝〉

4章から8章1節までは「教会の苦難」を主題とした場面となり、七つの封印がひもとかれます。「七つの封印」で封じられた巻物とは、これから先起ころうとしている、全被造物に対する神のご計画のことです。「七つの封印」で封じられており、まだ内容は明らかにされておらず、実行もされていません。封印が解かれて巻物が開かれたとき、この神の永遠のご計画は実行されるのです。

そこでの教会の苦難の姿は、6章で七つの封印が解かれることの中で明らかにされますが、ヨハネはその前に、天上での礼拝をかいま見ます。七つの教会への手紙では、スミルナやフィラデルフィアといった忠実な教会でさえも苦難に遭って苦しめられている姿を知りました。外からは皇帝礼拝と異教的慣習を強要され、ユダヤ人からの迫害に遭いました。しかも内には異端がはびこり、不信仰と不道徳をあからさまに説く偽教師に惑わされ、攪乱されました。この満身創痍といった苦難の中の教会を見つめながら、わたしたちの信仰はぐらつき、弱さを覚えます。わたしたちの主は、このような苦難の中でどうして教会をお守りくださらないのだろうか、疑問を抱いてしまうのです。当時の教会も同じだったに違いありません。そこでヨハネに、主は天の光景をかいま見させて、教会のかしらである主はけっして無力な方ではなく、天地を支配される全能の神であることを明らかにして励ますのでした。

二十四人の長老（4節）とは、イスラエル十二部族の族長（旧約の教会）と十二使徒（新約の教会）を代表とした全時代の全教会を象徴したものかもしれません。彼らは当時の王に対する崇敬の仕方に倣って、「自分たちの冠を玉座の前に投げ出して」賛美します（10節）。玉座は色とりどりの宝玉で輝き、稲妻と雷鳴による光と大音響に彩られ、そこに「七つのともし火」が燃えており、それは「神の七つの霊」とされます（5節）。それはすで

に1章で見た、「七つの金の燭台」に象徴された「七つの教会」と、「七つの星」に象徴された「七つの教会の天使」（1章20節）、つまりこの「七つの教会」を守るために遣わされた天使を意味し、「七つの教会」に象徴された全時代の全教会がそこで覚えられているということです。そこにエゼキエル書を想起させる不思議な四つの生き物がいて、神の聖性を絶え間なく歌い交わしています。

このように全ての時代を貫いた教会によって礼拝されている主は、天においてその真実な御姿を明らかにされるのです。それは天の玉座に座り、天と地のあらゆる被造物によって礼拝され、賛美される方であり、「栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方」として、天での大賛美、大合唱の中で歓呼をもって称賛される方でした。わたしたちの主、教会を治め、守っておられる主とは、このような方なのです。

わたしたちは、この地上の惨めな自分たちの姿と状況しか見ようとしません。そこでは、敗北の上に敗北を重ねていくような悲惨な現実しか見えません。しかしわたしたちの主は、実は「勝利の上に勝利を得ようと出て行った」方（6章2節）なのです。地上的現実ばかりを「現実」として見ていくときには、わたしたちにはこの主の勝利も、天における真実な「現実」も見えてきません。しかし本当の現実、この天にある勝利の支配です。信仰の目を開かせられて、この天にある真実な勝利と本当の現実を見せられていき、惨めに見える地上の現実が実は主の天にある勝利の中に握られ、支配され、導かれていることを知る者とされていきたいと願います。そしてこの苦難の地上にあって、天での礼拝を見上げながら、その大賛美と大合唱の中に、わたしたちのかほそくたどどしい小さな賛美、涙の賛美が、その勝利の賛美の中に加えられていくことを願われます。

（三川栄二）

テキスト ヨハネの黙示録 4章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問35, 36

〔単元のねらい〕

単元の教理的主題は、ウエストミンスター大教理問答で言えば「見えない教会」です。主キリストの天上でのお働きを扱います。(問64、「見えない教会とは、かしらなるキリストの下に、過去・現在・未来を通して、一つに集められる選民の全員である。」問69、82と83も参照のこと。) 教会はキリストの御体であり、ご自身はその頭であられます。この頭は、今や天に到達し、聖なる御父の右に座しておられます。そのようにして、天国(天上の教会)と地上の教会とは、つながっているのです。天上のキリストとの交わりが実現される場が、神の民の祈りの家であり、主日礼拝式こそその頂点です。ヨハネ自身、ここですばらしい幻、黙示録全体の幻を見ることができたのは、他ならない主の日でした。そうであれば、子どもの礼拝式も、この垂直次元がそそり立つことによるのみ命に溢れ、魅力に溢れたものとなるでしょう。教会でしか与えられない何にもまさる確かで、祝福された現実が、毎週の説教によってもたらされますように！この日の説教こそ、そのことを直に語るものとなりますように。

「天上の礼拝から射し込む光」

3月に入りました。今日も一緒に礼拝できることを心から神さまに感謝いたします。まだまだ外は寒いですね。けれども、教会堂のドアを開けて中に入ると、暖かいですね。エアコンから暖かい風が吹きだしているからです。皆が来てからエアコンにスイッチを入れて暖めると、こんなには、暖かくありません。最初に玄関を鍵で開けて、エアコンのスイッチを入れてくれる先生がいるからです。

ヨハネさんは今、パトモスの島にいます。僕たち私たちと同じように日曜日の礼拝を捧げています。どこで礼拝していたのでしょうか。部屋の中か、もしかすると、野外かもしれません。どっちにしてもヨハネさんが見ていたのは、屋根の天井でも青空でもありません。その上の上です。イエスさまがおられる場所、天のお父さまがおられる場所、つまり天を見つめていたのです。すると、どうでしょう。その天に、開かれた門が見えたというのです。門が開かれていれば、そこから中がのぞきこめますね。

ヨハネさんが見ていると、そこからまた、イ

エスさまの大きな声が聞こえてきました。「ここに上ってきなさい。あなたに、この後、必ず起こることを見せてあげよう。」するとヨハネさんは、ついに天に座しておられる神さまを見たのです。いったいどんなお姿なのでしょう。ヨハネはこう表現しました。「碧玉やかかめのうのよう」碧玉は緑の宝石、赤めのうも赤の宝石です。神さまのおられる周りには、エメラルドのような虹が輝いていました。

実は先生は、碧玉とかかかめのうとかエメラルドとか、そのような宝石を何一つ持っていません。よく見たことがないのです。ヨハネさんは、そのような宝石を見たことがあるのです。神さまの美しさは、本当は絵にも描けず、言葉にも表せないものだと思いますが、見たことのあるもので表現するのが精一杯だったのだと思います。その他にも、出てきます。「水晶に似たガラスの海のように」水晶も宝石です。透き通っている石です。次に、ガラス、これは、先生も毎日見えています。透明です。でもきっとヨハネさんの時代には、ガラスはものすごく高価な宝石だったのだと思います。とにかく、ヨハネさんが伝えたいのは、神さまのお

られるところは、たどえようもないほど美しいということですよ。

その他はどんなかんじでしょう。神さまの周りには二十四人の長老さんたちが、白い衣を着て、頭には金の冠をかぶって座っています。長老たちとは、神さまに仕える人たちのことです。真っ白で金色に光り輝いています。神さまの近くにいる人は、このように着飾らせていただいて、真っ白で光輝いているのです。

四つの生き物が出てきます。ライオンのようなもの、若い雄牛のようなもの、人間のような顔をもつもの、最後は、空を飛ぶ鷲のようなものです。しかも、それぞれに翼がついています。その翼は六つ。外側にも内側にも目がびっしりついている……。それなら、この四つの生き物はいったい何でしょうか。よく分かりません。天使なのでしょう。昔から、これは四つの福音書を記した使徒たちのことと言われてきました。

どっちにしても、ここで大切なことは、その人たちは天で何をしているのかということです。

四つの生き物は、昼も夜も絶え間なくこういい続けています。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」これにメロディーをつけるとこれは、讃美歌になりますね。頌栄といます。神さまの周りには、神さまをほめたたえているわけです。つまり、天上、天国では、神さまをほめたたえる歌が、途切れることなく、ずっと歌い続けられているのです。

二十四人の長老さんたちは何をしていますでしょうか。彼らは、金の冠を投げ捨てて、同じように歌いだします。「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。」

いったい、天国では、何がされているのでしょうか。一言で言えば、礼拝です。神さまがほめた

たえられているのです。それなら、いったい僕たち私たちは、今、ここで何をしていますか。もちろん、礼拝です。

天上でも地上でも、神さまを礼拝しているのです。すばらしいです。そして、僕たち私たちが地上で礼拝できるのは、天上でこのような礼拝が捧げられているからなのです。それは、たとえばこんなかんじです。僕たち私たちの地上の礼拝は、この天国の礼拝に参加させていただいているということです。天国に行かなくても、地上で礼拝しているなら天国をのぞき見することができます。門は大きく開いているからです。僕たち私たちの地上の礼拝は、この天上の礼拝と接続しています。スイッチが入ってつながっています。

エアコンの吹き出し口から暖かい空気が吹き出してこの礼拝堂を暖めてくれています。天の美しい礼拝、すばらしい賛美、その喜び、その感動は、今、僕たち私たちの礼拝にも注がれてくるのです。今、一緒に、心を高くあげましょう。天を見てください。天の門はわたしたちに向かって大きく開いています。だったら、僕たち私たちは、天上の礼拝をもっと真似しなければならぬと思いませんか。何を真似したらよいですか。もっと大きな声で讃美歌を歌うというのはどうでしょうか。もっと喜んで、感謝して、自分のもっているものをお捧げして、心の底から礼拝できたらすばらしいと思いませんか。

先生が、一生懸命していること、したいことを皆にも教えます。一緒に、やりたいからです。それは、僕たち私たちの教会の礼拝に来てくれれば、天をのぞくことができるような礼拝です。天国の礼拝を映し出すような礼拝、もっときれいな礼拝、もっとわくわくする礼拝、そんな礼拝を捧げたいのです。新しい友達が来てくれたら、本当にイエスさまですばらしいんだね。神さまですごいんだね、大好きになってくる。そんな、礼拝をささげるために、皆でもっともっと心を高くあげ、天を見上げましょう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの黙示録 4章8節後半

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、
かつておられ、今おられ、やがて来られる方。

〈ねらい〉

天上の礼拝の素晴らしさを知ると共に、私たちが今ささげている地上の礼拝が、天上の礼拝につながっていることを学び、喜びと感謝をもって礼拝をささげる。

〈展開例〉

今日はおじいさんの誕生日。「ケーキを買って、帰るとするか。」一人で暮らしているこのおじいさんは、ケーキ屋さんに寄って、イチゴのショートケーキを一つだけ買いました。ガチャガチャ。おじいさんが玄関の鍵を開けると……「お誕生日、おめでとう！」大勢の声がして、家中の明かりがついて、クラッカーがパン、パーンと鳴り、きれいな紙ふぶきがひらひら。テーブルの上にはおいしそうなお料理と、バースデーケーキ、それにジュースが並んでいます。おじいさんの子どもや孫、お友達が、内緒でお誕生日のパーティを用意してくれていたのです。皆でお祝いするお誕生日は、本当に素敵ですね。

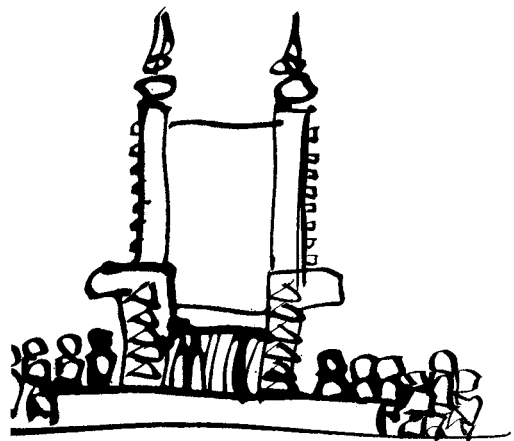
たった一人でバトモス島にいたヨハネさんにも、同じようなことが起こりました。ある日、ヨハネさんが一人で礼拝を捧げていると、天の門が見えました。その門は開かれていて、「ここに上ってきなさい」というイエス様の声がしました。ヨハネさんは、天に座っておられる神様を見ました。緑や赤の宝石のようで、神様の周りには虹がキラキラ輝いていました。透き通ったガラスの海のようなものもありました。誰も見たことがないような美しさです。神様の周りには、白い服を着て、金の冠をかぶった二十四人の長老さんがいて、神様にお仕えしていました。ライオンのような生き物と、若い雄牛のような生き物、人間のような顔をした生き物、空を飛ぶワシのような生き物がいて、昼も夜も、ずっと神様をほめたたえています。長老さんたちもいっしょに神様を賛美していました。

バトモス島に一人ぼっちだと思っていたのに、ヨハネさんは天国の礼拝に参加させてもらったのですね。

私たちの教会でも毎週礼拝をささげています。毎週〇〇人くらいの方が礼拝に来ますね。でも、そのとき礼拝をささげているのは、私たちだけではないのです。天国でも、礼拝が行なわれています。私たちの礼拝は、天国の礼拝とつながっているのです。天まで届く元気な声で、神様を賛美しましょう。私たちがいつか行く美しい天国のことを考えながら、お祈りも献金も、喜んで神様におささげしましょう。誕生日パーティよりもっと素敵で、たくさんの方が集まる素晴らしい天の礼拝の仲間に、私たちは今、入らせていただいているのです。

〈お祈り〉

神様、今日も礼拝に来られたことを感謝します。私たちの礼拝が、天国の礼拝とつながっていることを知りました。これからも元気に喜んで、賛美やお祈り、献金ができますように。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



かつておられ、今おられ、やがて来られる方

〈ねらい〉

イエスさまの十字架の苦難と復活による新しい命の希望は、どんなときにも私たちの慰めです。今日のヨハネの黙示録の個所は、当時の教会がたいへんな苦難の中に置かれていたことが分かります。その苦難は、どうして私たち、イエスさまを信じる者たちにふりかかってくるのでしょうか？このことは子どもたちにとっても大きな感心事だと思われるので、今回はそのことも一緒に考えてみたい。

〈展開例〉

皆さんは、「輪廻」という考え方を知っていますか？ 輪廻とは、歴史の終わりがなく、時々わたしの前世は「虫」だとか言ったりする考え方です。そうすると終わりがなく、自分の生は輪のようにぐるぐる回りっぱなしです。

今日の世界、そして日本の問題として見えてくるのは、歴史が見えなくなっていることです。若い人も年老いた者も、歴史が見えず、自分の人生が見えなくなっています。望みをもって将来を見ようということから今の自分の生活を造ることができなくなっています。それは輪廻の思想にあるのかもしれません。すべてのものの流れが繰り返されます。この輪廻の思想は最も望みのない歴史の見方です。そこには歴史に終わりがありません。キリスト者は歴史が終わることを知っています。歴史が終わることを知っているからこそ、今ここで何をすればよいか分かるのです。

ヨハネの黙示録は、実は、歴史の見方を教える書物です。私たちの人生をどこで受け止めるのか。一緒に生きている人を見るだけではありません。自分自身も見ることができます。自分自身を見て、一緒に生きる人を見る道が開かれるのです。それがヨハネの黙示録の記者が語っていることです。

しかも、それがどこに見えてくるのかがいちばん問題です。これはまさに「礼拝」です。「ここへ上って来い」と言われて、上って行ったところに何が見えてきているのでしょうか。礼拝の場所であり、礼拝をささげている様子です。

私たちが目にする事、経験することはいいことばかりではありません。どちらかと言えば、つらいこと、苦しいこと、悲しいことの方が多いです。そんなときにも、イエスさまは、つらいのをやせ我慢して礼拝しなさいと言われていたわけではありません。悲しい涙を流しながら、イエスさまを仰いで礼拝するときに、必要な力と勇気が与えられるのです。礼拝の中でイエスさまがすでに勝利しておられて、私たちが天へと引き上げてくださるのを見ることができます。一緒に、イエスさまを賛美し続けていきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、私たちが天においてささげられています礼拝を信じて、どんなときにも神さまを礼拝することができるようにさせてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

石を使って人形を作り、復活劇をやってみましょう。人物は、イエスさま、ペトロ、マグダラのマリア、天使、兵士、女の弟子たち、男の弟子たちなどです。場面に合わせて石人形の数は工夫してください。

- ①石にアクリル絵の具かボスカで色をつけて人形にします。
- ②ヨハネによる福音書20章から台本を作り、あらすじをみんなで確認しよう。
- ③台詞を言いながら石を動かしていく。

〈サブタイトル〉

「大パノラマの礼拝の絵巻物」

〈中心テーマと狙い〉

全国全世界のクリスチャンが、動物たちや植物たちが、天使たちが、既に天に召されたクリスチャンたちがこぞって、神様を礼拝しているのを知って、大きな励ましを得ること（神様を礼拝しているのは、自分たちだけではないことを知る）。

〈参考になる聖書箇所〉

①列王記下6:15～17

「主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。」

→自分たちのように日曜日、教会に行っているようなクリスチャンの数はすごく少ないんだという意識が、子供たちにはあるであろう。そのような子供たちの目を開いて、真の現実を見させるのが、この箇所の意図である。

②列王記上19:14～18

「『……わたし一人だけが残し、彼らはこのわたしの命をも奪おうと狙っています。』……『しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけ

しなかった者である。』」

〈作業パターン1 ～調査隊出動！～〉

キリスト教年鑑やクリスチャン情報ブック、インターネットなどを用いて、世界中にどれだけのクリスチャンがいるのかを子供たち自身に調べさせる。あらかじめそのことを告げておいて、発表してもらってもよい。

〈作業パターン2 ～大パノラマ絵巻物～〉

B紙（模造紙）を用意しておいて、そこに色紙の寄せ書きをする時のように、黙示録4章に書かれてあることを絵に描いてみる。後で、教会のどこかに張ることを想定して描いてもらうと、俄然やる気がでると思う。このような作業は、様々なキリスト教美術を鑑賞する際にも、何かしらの良い影響を及ぼしてくれるものと期待できる。

〈作業パターン3〉

アッシジのフランチェスコの逸話を紹介する。

〈祈り〉

神様、いつもは目には見えませんが、動物や植物も含め、あなたがお造りになったものたちがこぞって、あなたを礼拝しているんだということを固く信じさせてください。



〈ねらい〉

礼拝の恵みを味わう。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 今日の御言葉で展開されている光景は何だと思えますか？ 二十四人の長老たちや四つの生き物は何をしているのですか？

→主を礼拝している。

Q. ヨハネに示された天上の主の御姿と、主に捧げられる賛美は、私達の信じる主がどのようなお方であると教えていますか？ 8～9、11節を見て、答えなさい。

→至高の尊厳をもち、世々限りなく王として支配していらっしゃる天地万物の全能の創造主。「栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。」である。

☆当時の教会は内憂外患といった状態にありました。そのような教会にとって、自分達の信じている主の栄光に満ちた御姿を知らされることは、どんなに大きな慰めであり、励ましとなったことでしょうか！これは私達にとっても同じですね。教会、そして一人一人のクリスチャンはいつも強いというわけではありません。様々な弱さをもっていますし、外からの、内からの影響によってグラついてしまうこともあるので

す。しかし主はどこしえに統べ治めていらっしゃる。この主を見上げる時に、私達もまた慰めと励ましを豊かに受けることができます。

Q. 二十四人の長老たちと四つの生き物が献げている天上の礼拝と私達が献げる地上の礼拝はどのような関係にあると思えますか？ 両者は全く別のものでしょうか？

→天と地を貫いて一つの神様の民の礼拝がある。私達が献げる礼拝は天上の礼拝に連なる礼拝である。

Q. さて、黙示録の5章9、12、13節も読んでみましょう。4章では、神様の創造のための賛美が献げられていましたが、5章ではどのような賛美が献げられていますか？

→御子イエス様による救いと勝利のための賛美。

☆黙示録は本当に神様への賛美で満ちている書ですね。全被造物が神様の創造と救いをたたえています。このような天上の賛美に声を合わせて私達の礼拝が献げられる時、神様の尊厳と勝利を私達も心の中で確信させられます。そして、たとえ私達一人一人は弱くても、イエス様が勝利の主として世を統べ治めていらっしゃることを教えられ、力づけられるのです。そしてますます心から神様を賛美できるようにされます。神様を礼拝する時に、この黙示録の光景を心に思い浮かべながら礼拝してみましょう。そうしたら、いつのまにか私達も、その光景を鏡のように映し出す喜びの賛美を献げるものとされてゆくに違いありません。

4. お祈り

主の栄光と勝利をたたえて。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

ここではヨハネの黙示録のクライマックスともいえる新天新地について語られます。今ある天地は栄光のうちに新しく造りかえられて、自然が本来の姿を取り戻します。創世記において、自然界も罪の影響下にあるものとなってしまったことが記されていますが、それが過ぎ去り、新天新地を見るのです。そこにはもはや、罪の汚れも死もありません。1節で「海もなくなった」とありますが、「海」は波立ち、不安定であるので不安と争いの象徴であるといわれ、反キリストの勢力である獣の出所（黙示録13:1）であるので、このように言われるのでしょう。

「聖なる都、新しいエルサレム」は地上のエルサレムと対比、区別されて「新しい」と呼ばれています。これはイエス・キリストの教会を指します。罪から離れ、完全に聖別された「聖なる都」としての教会です。キリストの教会は神に起源があるので天から下ってくるのです。そして永遠に存続します。

新しい天と新しい地、さらに新天新地にふさわしく用意を整えた新しいエルサレムすなわち罪から解放された教会を見るという祝福にあずかります。

3節には神の臨在の約束が語られます。ここでの「幕屋」は一時的な住まいではなく、神が臨在される場所という意味です。神が人と共に住み、人は神の民となるのです（7節も参照）。これはアブラハムに与えられた約束（創世記17:7-8）が、イエス・キリストの救いのみ業を経て、終末において、完全に成就することを示しています。神の民にとっては、罪によって損なわれた神との交わりが完全に回復すること、神の恵みを相続するものとなることを意味します。

こうして共に住んでくださる神は、私たちの目の涙をことごとくぬぐってくださいます。死も、悲しみも、嘆きも、労苦も、もはやそこにはないのです。5節にあるとおり、万物は新しくされるからです。5節後半にはこの言葉が確實であり、信頼できる言葉であることが宣言されます。5節「玉座に座っておられる方」は神様です。

アルファとオメガはギリシャ語のアルファベットの最初と最後の文字です。神は創始者であると同時に完成者であられるのです。事を始めるという意味でアルファであり、完成するという意味でオメガなのです。神は初めであると同時に終りなのです。終りの時に実現すべき一切の事は確実に成就することが「事は成就した」（6節）という言葉で強調されます。神様にとっては、新天新地は到来したも同然であるというほど、約束の実現は確實なのです。

6節後半から7節には、神の最終的な祝福が宣言されます。キリストは、渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませてくださいます。そして「これらのもの」（7節）（新天新地における祝福全体を指すと考えられます）を受け継ぎます。ここでは、渇いた者達への神の招きを感じ取ることが出来ます。だからこそ、招きに応じて価なしの命の水を飲まなければなりません。キリストの恵みに背を向けるなら、8節にあるとおり永遠の死である第二の死があるのです。

新しい天と新しい地、そして完成されたキリストの教会を見せていただき、そこで生ける主の御臨在の恵みを完全に受けることが出来る。それは礼拝の完成といってもよいでしょう。新天新地を待ち望みたい。確實な約束があるのですから。

（金原義信）

3月9日

「新しい天と新しい地」

説教展開例

テキスト ヨハネの黙示録 21章1～8節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問80

〔単元のねらい〕

子どもにとっても、大人にとっても、日々の歩みが、ついにはどこに向かって導かれてゆくのか。それはきわめて大切なことです。自分の導かれてゆく場所が、喜びに満ちたものであれば、今の時の苦しみや不安が、私たちから希望を奪い去ることは決してありません。日曜学校の子どもたちが、何よりも強く求めているのは、希望の場所であり、希望の時です。人生に、まことの完成があること。死によっても閉じられない、明るい将来があること。それは、教師にとっても生徒にとっても、等しく共有できる、また共有すべき、生きることの意味そのものです。日曜学校の恵みと喜びは、教師と生徒が、共に一つの目当てに向かって進むところに具現します。一つの希望を分かち合うことによって、「教育」は真の意味での「育ちあい」になるのでしょうか。

「苦しみのない世界へ！」

私たちは、だれでも色々な苦しいことがあります。つらいことがあります。皆さんは、学校や保育園・幼稚園などで、一年間、一所懸命に歩んできました。いろいろなことがあったでしょう。うれしいことも、悲しいこともありました。こんな歌があります。

「一年じゅうを、思い出してごらん。

あんなこと、こんなこと、あったでしょう。

うれしかったこと、悲しかったこと、

いつになっても、忘れない。」

毎日の私たちの歩みは、うれしいことだけではありません。悲しいこと、苦しいことが、たくさんあります。でも私たちの毎日の生活は、イエス様によって、いつも見守られています。苦しいことが、苦しいままでは終わらないのです。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た」(1)。そのように語られています。「新しい天、新しい地」。それは神さまを信じ神さまに従って歩んでいる私たちへの、神さまからの贈り物です。「新しい天、新しい地」。それは、イエス様が私たちにくださる天国のことだと言ってよいのです。

私たちは、いつも礼拝で「主の祈り」という、イエス様が教えてくださったお祈りをしています

ね。「御国を来たらせたまえ」とお祈りしています。それはいったいどういう意味でしょう。

『子どもカテキズム』の80問には、このように書かれています。

「神さまの恵みの支配が

教会の中で確立され、

教会を通して広げられ、

ついにはイエスさまが再び来て完成してください、ということです。」

私たちは、天と地をお造りくださった父なる神さまを信じています。父なる神さまが、愛する独り子イエスさまを、私たちに下さったことを信じています。イエスさまは、私たちに聖書の言葉を教え、まことの神さまを信じさせるために、教会を立ててくださいました。教会に集まり、神さまを賛美し、神さまの教えに従って、心から神さまを喜びながら生きてゆきたい。それが私たちの祈りです。イエスさまを信じて祈っている、その私たちの中で、もう神の国は始まっているのです。

私たちが神さまを信じるだけではありません。もっともっと多くの人びとが、神さまを信じるようになってほしいと思います。イエスさまの教会に、多くの人びとが集ってほしい。神さまをまことのお父さまと信じて、神さまに従う人が一人で

も多くなればよいと思います。そうすれば、神さまの国が、教会を通して広がってゆくことになり、神さまの国が、ますます広がってゆく、そのために、私たちにも一緒に働いてほしい、とイエスさまは願っておられます。

「御国を来たらせたまえ」。そのように祈りながらイエスさまを信じて生きる、世界中の人びとのために、神さまは、素晴らしい天の御国を用意しておられます。それが「新しい天、新しい地」です。私たちの生きている世界には、争いや憎しみが渦を巻いています。人と人が、言葉や暴力で、おたがいを傷つけあっています。何よりも、神さまを信じないで、自分だけが正しいという考えが、多くの人びとを惑わしています。「悪魔」の恐ろしい働きが続いているのです。

悪魔の働きを終わらせ、神さまの恵みが完全に勝利されるときが、やがて来ます。イエスさまは、そのためにもう一度、私たちのところに来てくださいます。クリスマスの時に、私たちのもとに来られたイエスさまが、もう一度、私たちを天国に迎えるために来てくださいます（再臨と言います）。そのとき、罪の中にあった世界はまったく新しくされます。人びとを惑わす悪魔は滅ぼされます。神さまの栄誉だけが、あがめられるようになります。長い間、苦しみに耐えてきた、神さまの子どもたち、イエスさまの弟子たち（つまり私たち）は、平和と喜びのなかで、神さまを礼拝

することができます。

「神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる」(3)。

神さまが、いつどんな時にも、私たちと一緒にいてくださるのです。もちろん、今も神さまは私たちと一緒におられます。でも、私たちの信仰がまだ小さくて弱いため、時々、そのことが分からなくなりますね。一緒に礼拝していても、心がどこかへ飛んでいるようなこともあるでしょう。天国では、神さまの恵み、神さまの愛が、いつも私たちの心を満たしてくれます。神さまにそむくような心配は、もう決してありません。神さまを喜び、永遠に神さまを愛する生活が始まります。

「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(4)。

悲しくて泣いたことがあるでしょう。くちびるをかみ締めて、つらいのを我慢したことがあるでしょう。病気で苦しんだこともありますね。死ぬことを恐ろしいと思うこともあるでしょう。苦しみ、悲しむ理由は、数え切れないほどあります。イエスさまは、私たちの悲しみを、知っておられます。「もう泣かなくていいよ」と、言ってくださいます。お母さん（お父さん）が、涙を拭いてくれたことがありますね。イエスさまが、私たちの苦しみを全部、とり除いてくださる。そんな素晴らしい日が、かならず来ると約束しておられます。信じましょう。そして祈りましょう。イエスさま、来てください！
(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの黙示録 21章4節（部分）

もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。



〈ねらい〉

神様が用意しておられる新しい天と新しい地がどのようなものかを知り、この素晴らしい約束を信じて、希望をもって共に歩めるように導く。

〈展開例〉

「よーい、ドン！」運動会でかけっこをしたり、かけっこの応援をしたことがありますか？

途中で転んで泣いているお友達や、白い線からはみ出して走って、恥ずかしそうに戻るお友達を、見たことがあります。走るのが速い子も、遅い子もいますが、ゴールをすると、先生が優しい笑顔で、「よくがんばったね！」と迎えてくれます。

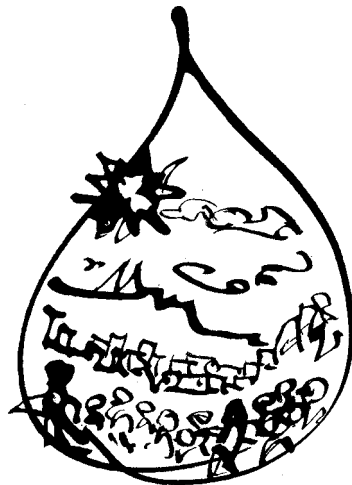
私たちも、毎日、嬉しいことや悲しいこと、がんばらなければならないことがあります。一生懸命やっているのに失敗したり、お友達とけんかしたり、いろいろなことがありますね。嫌なことが続くと、苦しくなります。でも、悲しいこと、苦しいことがずっと続くことはありません。神様を信じている私たちのために、神様は、素晴らしい天国を用意してくださっています。聖書には「新しい天と新しい地」と書かれています。そこでは、誰もけんかしないし、嘘をついたり、だましたり、戦争もありません。

悲しくて、泣いたことがあるでしょう。病気で苦しくて、眠れなかった夜もあったでしょう。死んだらどうなるのかな、と考えると怖くなったこともあるかもしれませんね。神様は、全部知っておられます。そして、「もう泣かなくていいよ。もう心配いらないんだよ。」と言って、私たちの涙を拭いてくださいます。新しい天と新しい地では、死ぬことも、病気になることも、苦しむこともありません。神様はずっと私たちと一緒にいてくださいます。

今はまだ、ときどき神様のことがわからなくなったり、神様は本当にいるのかなあと感じてしまうことがあるかもしれません。でも天国では、神様のすばらしさが、いつでも、全部分かって、ずっと神様を愛することができるのです。そんなすばらしい日が、必ず来ると、神様は約束しておられます。かけっこをすると、苦しくても、かならずゴールできるのと同じです。神様の約束を信じて、今週も元気に歩みましょう！

〈お祈り〉

神様が、私たちのために、新しい天と新しい地を用意してくださっていることを感謝します。天国を目指して元気に歩めるように、今週も力をお与えください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

〈ねらい〉

何が希望であるのか分からないときに、まことの希望があるところをはっきりと子どもたちに伝えたい。「新しい天と新しい地」に触れる喜びを一緒に味わいたいものです。この新しい天と新しい地を見ることこそ、私たちの喜びの源ですし、信仰の真髄といってもよいでしょう。

〈展開例〉

「新しい天と新しい地」は、イエスさまを信じて歩んでいる人たちの最後の神さまからのプレゼントです。このプレゼントをいただきたいがために、私たちはつらい地上の歩みも耐えることができます。

やはり一流選手といわれる人たちは、よく練習をするそうです。それも半端な練習ではなく、かなりきつい練習をして試合に備えます。つらい練習を積み重ねてきたからこそ、自信をもって試合にのぞむことができるのでしょね。イエスさまは、イエスさまを信じて生きることのたいへんさをよく知っていてくださいます。「涙」を流すこともあります。

ある方が、「信仰に生きる者は、日々喜びが増すように生きる」と言っています。一日一日生きていくことで喜びが増すというのです。このような信仰に生かされたいと願います。新しい天と地、新しいエルサレムの幻をいつも見ている者は、主の近さを味わっているのです。日々生きることが喜びであるということは、高齢者だけの問題ではないと思います。みなさんも将来に向かって足を踏み出すことに恐れを感じている人たちがいるかもしれません。新しい世界に踏み込んでいくことが怖いのです。

黙示録が私たちに見せているのは、私たちは一人で生きているのではなく、教会の群れの一人として生きているということです。伝道者ヨハネも一人ではなく、「あなたがたの兄弟」と言える輝かしさを知っています。

「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」。私たちの目から涙を拭い取ってくださるのは、私たちとすでに共におられるイエスさまです。ヨハネによる福音書11章において、イエスさまは、愛しておられたラザロが死んだときその墓を訪ねられ、イエスは涙を流されました。涙を流しながら主イエスは、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」と言われました。イエスさまがわたしの目から涙をぬぐい取ってくださる時が来ます。その時には、真実にもう死はありません。

ヨハネの黙示録1章6節に記されています。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めてあり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐ。わたしはその者の神になり、その者はわたしの子となる」。ここに、すべての人々に対する神の救いの招きが始まっているのです。

〈お祈り〉

天の神さま、私たちのために新しい天と新しい地を与えることを約束して下さりありがとうございます。この神さまが与えてくださる新しさにみんながあずかることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈サブタイトル〉

「『あ』であり『ん』であるお方」 or
「『A』であり『Z』であるお方」

〈中心テーマと狙い〉

苦しみも悲しみもない新天新地を（アルファでありオメガである）イエス様がもたらして下さることの素晴らしい希望を、教師も子供たちも共に分かち合うこと。

〈作業パターン1〉

世界中で起こっている様々な不幸な出来事や嫌なこと、また自分が体験した辛い出来事や悲しかった出来事などを、いろいろと挙げてもらう（黒板やホワイトボードに書いてもらうか、教師が子供たちから聞いて書くかして、みんなが見て分かるようにする）。次に、それらの悲惨は、どうしたらなくなるか考えさせる。

〈作業パターン2〉

ギリシャ語のアルファベット表を見せ、確かにアルファとオメガが、ギリシャ語の最初と最後の文字であることを確認させる。また、日本語や英語だとどうなるかを発言してもらう。さらに、アルファベットや五十音の最初と最後とは何を意味するのかを考えてもらい、自由に語り合ってもらう。話題の一つの例……キン肉マンに出て来るネプチューンマンの「俺たちは超人のNo.1！」とか、ジ・オメガマン（まさに王位争奪編の最後に出て来た完璧超人）など。

〈調査隊出動〉

コンコルダンスなどを用意し、新天新地に関する御言葉にどんなものがあるのかを調べてもらう。

①イザヤ65:17

「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。」

②イザヤ66:22

「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前に永く続くように、あなたたちの子孫とあなたたちの名も永く続くと言われる。」

③ペトロニ3:13

「しかし、わたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」

④黙示録3:12

「勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。わたしはその者の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち、神のもとから出て下ってくる新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう。」 etc.

〈祈り〉

神様、僕たち私たちの周りには、たくさんの苦しみや悲しみがあります。でも、そんな嫌なことが全くない新天新地を、イエス様がもたらして下さることを感謝します。どうか、そのことを信じさせてください。



〈ねらい〉

新天新地を待ち望む。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 今日の御言葉の素晴らしい恵みを理解するために、ちょっとおさらいをしましょう。神様は何のために人を創造されましたか？ エデンの園でアダムとエバは神様とどのような関係だったのでしょうか？ 創世記2章7節を見て、教えてください。

→神様と親しい交わりをもって生きるように創造された。アダムとエバは神様との交わりにおいて、幸せな状態にあった。

Q. アダムとエバは神様との関係において幸福でした。しかしその後、どうなってしまったと聖書はおしえていますか？ 創世記3章17、23節を見て、教えてください。

→神様に罪を犯したために、エデンの園から追放され、神様との交わりを失った。

Q. 御自分の至高の尊厳に対して罪を犯した人間を、神様はお見捨てになりましたか？ 創世記3章15節を見て、教えてください。

→人間が墮落した直後に、サタンと罪の奴隷状態から解放する救い主を遣わす約束をされた。

Q. マタイによる福音書1章21～23節を読んで、約束の救い主イエス様が何のために来られたのか、教えてください。

→イエス様は私達を罪から救い、神様との交わりに回復するために来られた神様御自身である。

☆マタイによる福音書28章20節によると、復活されたイエス様は今、私達と共にいてくださいます。そういう意味では、私達はすでに神様との交わりにありますが、いまだ完成していないのも事実です。実は、このすでに始まっている神様との交わりが完全に完成するのが今日の御言葉が書いている新しい天と新しい地においてなのです。私達はやがて死にますし、悲しいこともあります。考えてみると、生きていくのは大変ですね。でも、黙示録21章3～4節を見ると、神様は私達の目の涙をことごとくぬぐいとってくださいとあります。「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。」のです。完成し、永遠に続く神様との交わりはいかに素晴らしいことでしょうか！

Q. さて、このようなハッピー・エンドが私達の未来に待っています。たしかに人生には嫌なことやつらいこともあるけど、それはずっと続くんじゃないかと、神様御自身が私達を慰めてくださる時が来るというのです。そしてどこしえに続く神様との喜びの関係が待っています。この素晴らしいゴールを目指して私達は歩いていくのです。じゃあ、新しい天と新しい地を待ち望む私達はどのように歩んでいったらいいと思いますか？

→地上で神様を信じ、御国の完成を目指してお仕えして歩んでゆく。

4. お祈り

新天新地の希望のために。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

受難週のクライマックスは、十字架につけられたキリスト御自身である。感動的な場面の多くある中で、福音書記者マタイの描くそれは、他と趣きを異にしている。主のみ苦しみが前面に引き出され、苦痛の極みにあるキリストが魂で受けておられる地獄が描かれている。そこに主のみ苦しみの深い意味と恵みを認めることが許される。

〈キリストの苦しみの深さ〉

マタイは主イエスの苦しみを真正面から示そうとする。それは主御自身の発せられたお言葉「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」(46節)に見いだせる。しかもこの叫び声は「大声であった」と注意深く述べられている。50節でもう一度「大声で叫ばれた」となっている。まさに主イエス・キリストの魂の底からの真実な叫びであったことは間違いない。時は午後3時近く、十字架の苦しみを味わい尽くし最後の力を振り絞っての祈りであった。主は神御自身から全く見捨てられたのである。この主の叫び声は、私たちにとっても理解し難いように、すぐ近くで聞いていた人達にとっても同様であった。彼らは、主の「エリ」という言葉を「エリヤ」と聞き違い、預言者エリヤの助けを呼んでいるものと受け取ったのである(47節)。主はすでに人から見捨てられていた。群衆からは見放され、ユダヤの指導者たちにはもはや用のない者と烙印が押され、親しい弟子達も主を見捨てて逃げ去って、孤立無援の中に置かれていた。そして最後の拠り所であった父なる神様からも捨てられたのである。これこそが本当の地獄の苦しみであり、その神のきよい怒りと呪いをこの時、主は最後の一滴までも飲み尽くそうとされた。だからもはや人々の差し出した苦痛をマヒさせるための葡萄酒を一滴も飲まれなかったのである(48節)。

〈苦しみの意味〉

けれども、主御自身はそうした裁きに値するお方では決してなかった。同じく十字架につけられた悔い改めた強盗が「この方は何も悪いことをしていない」と証言している(ルカ23:41)。それは私たち罪人のための身代わりとしてのみ苦しみであり、死に他ならない。本当は、罪を犯し続けているこのわたし自身が発せなければならなかった叫びであり、味わわなければならなかった裁きなのである。私たちは人に捨てられることをまるで地獄のような苦しみ・悲しみと受け取るが、主イエスにとっては全幅の信頼を置いておられた神から見捨てられることの方が最大の苦しみ・悲しみだったのである。いまわの際までも主は、私たちのために執り成し続けて下さっていた。

〈苦しみの実り〉

マタイは、主のみ苦しみの実りも書き忘れてはいない。その第一は、神殿の垂れ幕がまっ二つに裂けたことである(51節)。これは自然に生じたものではなく、神が成し給うた奇跡である。私たちと神とを隔てていた幕が切り落とされ、イエス・キリストによって神に近づくことが許された。第二は、死んだ聖徒がよみがえったことである(52節)。私たちの最後の敵である死が打ち破られた証しである。第三に、主の十字架を見届けていた人に悔い改めの信仰の告白が与えられたことである(54節)。信仰はキリストの救いの恵みによるものである。そして最後に婦人たちの弱い信仰を励まし支えたことである(55,56節)。キリストは神から見放されても決して神への信頼と愛を失うことがなかった。この主イエスの十字架上でのあの叫びは、何よりも神への信頼と愛にあふれたものだった(詩編22編全体)。その主の愛と信頼とが私たちが罪の底から救い出された本当の理由・根拠である。それ故私たちは、ただ主イエス・キリストへの言い尽くしがたい感謝と賛美とを捧げざるを得ない。(山下朋彦)

テキスト マタイによる福音書 27章45～56節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

イエス様の十字架と復活は、どの福音書にも記されていることであるが、マタイ独自の記事に着目したい。前半部分はマルコにもほぼ共通のものであるが、子供たちの日常生活の視点で、その意味を少しでも実感してもらえよう語りたい。後半部分に記されている聖徒の復活はマタイ独自のものであり、この出来事を通して（前半部分と同様）百人隊長たちが「本当に、この人は神の子だった」との信仰告白に導かれたことに注目させ、子供たちの思いをそれと同じ信仰告白の思いへと導くことの助けになればと願っている。

「やっぱり、イエス様は神の子だ！」

みんなは、もうすぐ春休みだよな？ 春休みには、どこかに遊びに行く予定はあるかな？ 春休みが終わると、学年が一つ上がりますね。小学校から中学校、中学校から高校に進学するお兄さん、お姉さんもいます。そのように、春休みは、一年が終わり、また新しい一年が始まる、そういう大きな変化の時ですね。

それと同じように、さっきみんなと一緒に読んだ聖書の箇所でも、とても大きな変化が起きています。ちょうど、遊園地のジェットコースターに乗って、急降下して急上昇するような感じですよ。今日の箇所は急降下する所、来週の箇所は急上昇する所です。

さて、今日の聖書箇所が一番初めに、「さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた」（45節）と書いてありますね。「さて」と言われても、「何のことやら」と思う子もいるかもしれませんが。「全然、話しの流れが分かんないんだけど」って思ってる子もいることでしょ。そこで、少し簡単に、ここまでのあらすじをお話ししましょう。

イエス様は、お父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんの間に生まれました。イエス様は、神様とみんなからいっぱい愛をもらって、すくすくと育ち、大工だったお父さんのお手伝いをしながら大きくなりました。そして、およそ30才ぐら

いになった時、本当のお父さんである天の父なる神様の声を聞いて、神様の愛をみんなに届けに行こうと決めました。十二人のお弟子さんを引き連れて、みんなからいじめられて泣いている人や、お金がなくて貧乏で生活に困っている人、それから病気にかかって苦しんでいる人や、住むところがなくて乞食をしている人など、みんなから見捨てられたような人のところに行って、「天の神様は、みんなのことを見捨てたりなんかしてないんだよ。神様はみんなのことを心から愛しているんだ。神様はみんなの味方なんだよ。」こう言われたのです。そのように語りながら、イエス様は病気の人たちを癒したり、困っている人や苦しんでいる人を助けてくれました。そんなイエス様のもとにたくさんの人たちがやって来て、みんなイエス様のファンになりました。イエス様は大人気です。みんなもイエス様のことが大好きだと思います。

でも、そんなイエス様のことを良く思わない人たちがいました。「何だ、あのイエスという男は。俺たちの邪魔をしゃがって。気に入くない。何とかいいチャンスを見つけて、あいつを殺してやる。」こんな悪だくみを考えたのです。そこに運良く、イエス様の弟子の一人でユダという名前の男がやって来て、「イエスをお前たちに引き渡したら、幾らくれる？」こう言って、イエス様を裏切ってしまいました。そういうわけで、イエス様

は何にも悪いことをしていないのに、殺人や強盗をした悪い人たちみたいに、十字架につけて処刑されることになってしまったのです。

それは、金曜日の出来事でした。金曜日といえば、おとといですね。その金曜日のお昼の十二時、ちょうどみんなが学校で給食を食べようとしている時、全地が暗くなったというのです。台風とか嵐が来る時ってそんな感じだよ。お昼なのに暗くなって、気分まで暗くなってしまいます。それは午後三時まで、続きました。ちょうど、みんなが家に帰っておやつを食べようとしている時です。そんな時に、イエス様は十字架の上で、大声でこう叫ばれました、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」(46節)「エリ、エリ」と言っても、別に「えりちゃん」という女の子の名前を呼んでいるわけではありません。これは、聖書にも書いてあるように、「私の神様、私の神様、なぜ私をお見捨てになったのですか」こういう意味ですね。この時、イエス様は信じていた神様から見捨てられた気分がいっぱいでした。なぜなら、こんなにも自分は苦しい目に遭っているのに、誰も助けようとしてくれないし、神様もヒーローのように助けに来てくれないからです。アンパンマンでもポケモンでもゲキレンジャーでも、ヒーローは必ずみんなをすぐに助けに来てくれるよね。でも、この時、神様はイエス様を助けに来てくれませんでした。

そんなイエス様を見て、周りの人たちも、こう言ってイエス様のことをバカにしました、「何だ、お前はエリ、エリ、と言って叫んでいるようだが、伝説の預言者エリヤにでも助けて欲しいのか。だったら、エリヤが助けにくるまで生き延びられるように、ぶどう酒でもくれてやろうか。」こんな風にイエス様はみんなからバカにされ、神様からも見捨てられて、もう何の希望もありませんでした。それでも、イエス様は神様に信頼することをやめませんでした。「神様は、私の神様だ。私の味方をしてくださるお方だ。だから、絶対に私のことを見捨てたりはなさらない。」こうイエス

様は信じていたのです。

こんなイエス様の姿を見て、十字架のすぐ下にいた百人隊長は、思わず「本当に、この人は神の子だった」と言いました。そう思わずにはおれなかったのです。「こんなに辛く苦しい時に、それでもみんなのことを悪く言わず、神様をなおも信じようとするこの人は、もしかしたら神の子なんじゃないだろうか、いやきっとそうだ」このように兵隊さんは考えたのです。兵隊さんがこう思ったのは、それだけの理由ではありません。イエス様が十字架の上で、ついに息を引き取られた時、突然大きな地震が起こったのです。みんなは地震に遭ったことはあるかな？ とっても恐いよね。地震が起きると道路や地面が割れて、おっきなヒビが入ったりするよね。それと同じようなことが起きたんです。イエス様が死んだことに、大地もびっくり仰天だったんだね。そして、もっと驚くべきことが起こりました。イエス様は死なれた後、実は三日目に死からよみがえるんですが、その後で、イエス様に続くようにして、たくさんの人たちも墓からよみがえって、みんなのところに現れたというのです。びっくりですよ。まるで、ゾンビみたいだって思う人もいるかもしれませんが。死んだはずの人が生き返って、みんなの前に現れたら、すごく驚くよね。でも、イエス様がよみがえった後、そんなすごいことが起きたのです。これは、イエス様が死からよみがえったように、イエス様を信じる人たちもよみがえることができるんだってことを、言っているんです。こういうような出来事を見聞きした兵隊さんたちは、またまた「ああ、やっぱりこのイエスっていう人は、神の子なんだ」って信じました。

この兵隊さんのように、みんなにもイエス様を信じて、救われてほしいと先生は心から願っています。イエス様はみんなを助けて救うために、みんなの代わりに人質になって、殺されてくれたからです。それほど、イエス様はみんなのことを深く愛しているのです。(梶浦和城)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 27章54節後半

地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、

「本当に、この人は神の子だった」と言った。

〈ねらい〉

イエス様が十字架につけられた時の様子を学び、イエス様が神の子であったことを知る。私たちの罪の身代わりとして、イエス様が十字架につけられたことを感謝する。

〈展開例〉

教会には十字架がありますね。十字架のネックレスをした女の人を町で見たこともあります。十字架のイヤリングをつけた人もいました。十字架って有名ですね。でも、本当は、十字架はきれいなものではなかったのです。今日は、イエス様の十字架のお話です。

イエス様は、神様のお話や天国のお話をたくさんしました。病気の人を治してあげたり、一人ぼっちの人のお友達になったり、弟子たちといっしょに、神様のお働きを一生懸命しました。たくさんの方がイエス様のところに来ましたが、それを嫌がる人たちもいました。そして、ある日、イエス様を十字架につけてしまいました。何も悪いことをしていないのに、強盗といっしょに、死刑にされるのです。

お昼の12時に、空は真っ暗になりました。「神様、どうして私をお見捨てになったのですか」と、イエス様は大声で言いました。とても苦しかったのですね。

イエス様が十字架の上で亡くなった時、ビックリするようなことが起こりました。神様を礼拝する神殿にある幕が、上から下まで二つに裂けました。地震が起きて、岩が割れました。お墓が開いて、死んだ人がよみがえりました。これを見ていた百人隊長や見張りの人たちは、「本当に、この人は神の子だった」と言いました。

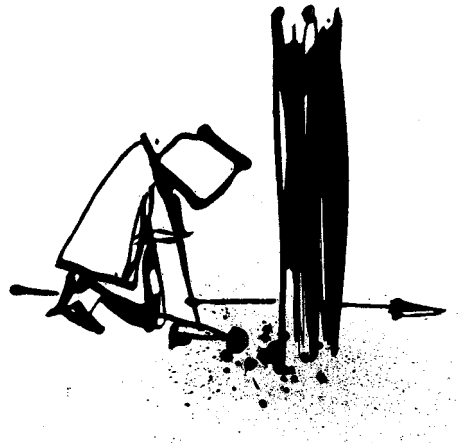
どうしてイエス様は、十字架にかかったのでしょうか？ それは、私たちの代わりだったのです。「神様なんて、知らない！」と、すぐ神様を

忘れてしまう私たち。けんかしたり、嘘をついたり、誰かを嫌いになったり、いじめたり、「もうやりません。ごめんなさい」と謝っても、また悪いことをしてしまう……悪いのは、私たちです。イエス様ではありませんね。でもイエス様は、「私があなたの代わりになろう」と、私たちの代わりに、十字架で罰を受けてくださったのです。それほど私たちのことを愛してくださっているのです。

だから、十字架が教会にあるのです。死刑の道具だった十字架が、イエス様の愛のプレゼントに変わったのです。イエス様を信じる私たちは、罪を全部ゆるしていただいて、神様の子どもになったのです。イエス様に感謝しましょう。

〈お祈り〉

イエス様、私の代わりに、十字架で罰を受けてくださったことを感謝します。悪いことをした時、十字架を思い出して、神様に許していただくことができますように。救い主イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



本当にこの人は神だった。

〈ねらい〉

今週から受難週に入ります。イエスさまの十字架への道行きを覚えるときです。そして、今日は、イエスさまの十字架の場面です。もしかするとイエスさまの十字架のことは何回も聞いている子どもたちもいるかもしれませんが、しかし、この信仰の中心点を、心を込めて子どもたちに語りかけたいと思います。ルカによる福音書23章44～49節を合わせて見ていきます。

〈展開例〉

わたしは中学生のときに、眠るのが怖くてしようがないときがありました。眠ってしまうと、朝、もしかすると目を覚ますことができなくて、そのまま死んでいることにならないだろうかと不安でしようがないときがありました。眠っている間には何が起るかわかりません。朝を健やかに迎えることのできる確かな保証は何もありません。

けれども、イエスさまは十字架の上で息を引くとられる前に、次のように祈られました。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカによる福音書23章46節）。夜を迎えるということはそういうことです。

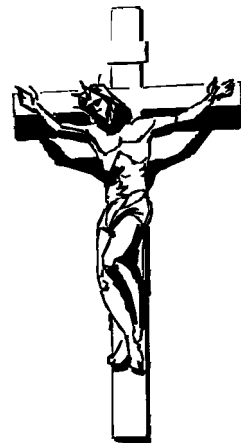
この様子を見た処刑者の一人であるローマの百人隊長が驚きました。「本当に、この人は神の子だった」。神さまとの正しい関係の中にある人だと認めました。百人隊長は、イエスさまの死の中に、父なる神との正しいつながりを見ました。このイエスさまの祈りは、イエスさまを信じる人たちの死における祈りとなりました。

パウロさんは、ローマの信徒への手紙8章15節にこう書き記しました。「神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」。そして32節には、「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのもの

をわたしたちに賜らないはざがありましようか」と書きました。勝利の歌をパウロは書き記しました。御子イエスさまが与えられた。十字架の死は、御子イエスさまが私たちのところに飛び込んでくださったようなものであります。神さまからの大きな贈り物が私たちに与えられました。私たちは人生の最後を迎えるときにも、望みを抱きながら立つことができます。神さまを親しく、父よ、と呼ぶことができます。父よ、わたしの霊を委ねますと祈ることができます。そして、その祈りは私たちの人生の終わりだけではありません。日々の生活の祈りとなります。なんという恵みを神さまから私たちは与えられていることでしょうか。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、私たちが救うためにイエスさまが犠牲となって十字架についてくださったことを心から感謝いたします。イエスさまによって救われた者としてイエスさまに従っていくことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈視聴覚教材〉

十字架をとりまく群衆やイエス様の絵。
 ゲッセマネの位置：エルサレム地図添付。
 『バイブルアトラス地図』（日本聖書協会）などを参照。

〈場面設定〉

エルサレム入城から十字架上で亡くなるまで、たった一週間たらずでの出来事。時期は過越の期間なので、太陽暦でいうと、三月中旬から四月初旬にかけての金曜日。逮捕されたイエス様は、マルコの福音書によれば、午前9時に処刑された（マルコ15:25）とあり、昼の12時に全地は暗くなり、それが午後3時まで続き、イエス様は死んだ。場所はゴルゴタ。十字架の周りには、兵士たちのほかには、通りがかりの人々はいるが、その中には弟子たちの姿はなく、婦人たちがイエス様を見守っていた。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：マタイ27:54b

地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

☆骨子：①息を引き取るまでのイエス様の苦しみ。②地震・暗闇・神殿の垂れ幕・死者の墓など、自然界の変化。③百人隊長の信仰告白。

☆例：

ユダの裏切りに始まり逮捕されたイエス様は、前日からあちこちで裁判を受け、侮辱され、ムチ打たれ、一晩中眠ることもできなかった。ゴルゴタで十字架につけられ、手足には釘を打たれた。何も悪いことをしていないイエス様だったが、私たちすべての者の罪を赦すために死んで下さったんです。これは父なる神様のご計画であり、イエス様は本当は私たちが受けるべき苦しみを一手に引き受けて下さり、その苦しきは「わが神、お父さん、なぜわたしをお見捨てになるのですか」の言葉となって発せられた。しかし、この言葉は決

して神様から離れてしまう不信感からではなく、父なる神様を信頼しているからこそであり、きっと「いいえ、わが神である父よ、あなたは必ず私と共にいてくださり、絶対に私を見捨てはしない。ああ神よ、信じています。御手におゆだねします。神にのみ栄光あれ」……と結びついているのではないか！

このイエス様の問いかけの言葉についての答えが、次週の「イエス様の復活」なんだよ。来週の完結編も期待しててね。

さて、このイエス様の様子を見ていた百人隊長は、「本当に、この人は神の子だった」と言って神様を信じる人になったんだよ。すばらしいことです。みんなが、もしこのゴルゴタにいて、イエス様の十字架の様子を見ていたら、何と言っただろう。「何も悪いことをしていないのに、ののしられても、ムチ打たれても、私たちの代わりに十字架にかかって、今まさに死にそうになっても、なお神様を裏切らず、救いのご計画を成就するために死んでくださった。本当にこの人は神の子だった」と、きっとと言ってくれると信じているよ。

〈展開の工夫〉

①ほかの福音書、並行箇所を読み比べてみよう。

②「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」は詩編22:2の御言葉です。22編全体が、神への疑問・嘆願→信頼・確信・賛美へとなっていることを知ろう。

③イエス様の十字架上での死の場面はとても大事な場面。その重要な場面で用いられたのは、婦人方。死・埋葬・復活の一連の目撃証人として、神は婦人を用いられた。イエス誕生の時には、メシア誕生の目撃証人は羊飼いであった。聖書から確認してみよう。

死 27:55～56

埋葬 27:61

復活 28:1～

次週への期待を生徒とともに共有しよう。

〈ねらい〉

十字架の救いの意味を知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. イエス様は十字架上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれました。イエス様には神様に裁かれなくてはならない罪があったのでしょうか？ヘブライ人への手紙4章15節を見て、教えてください。

→イエス様には罪はなかった。

Q. では、どうして罪のないイエス様が十字架にかからねばならなかったのですか？人々の罪がイエス様を殺したのは確かですが、それだけだったのでしょうか？イエス様の十字架事件の真相を、使徒言行録2章23節を見て、教えてください。

→イエス様の十字架事件には両面がある。一つは宗教的指導者のねたみ、イスカリオテのユダの裏切り、弟子達が見捨てたこと、民衆の軽薄さ、ピラトの保身といった人々の罪がイエス様を殺したという面。真相であるもう一面は、イエス様は罪人を救う神様の御計画を成し遂げるために、罪がなかったにもかかわらず、十字架の死を遂げられたということ。

Q. イエス様は神様の救いの御計画を実現するために、身代わりに十字架にかかって、神様から見捨てられる地獄の苦しみを味わってくださいました。本当は誰が苦しみを受けるべきだったのですか？

→私達。

Q. イエス様が私達を罪から救うために十字架にかかってくださっているありがたさを、十字架の周りにいた人々は全然理解していませんでした。当時のユダヤ人は救い主を自分達を異邦人のローマ帝国の支配から解放してくれる政治的解放者と考えていたからです。しかし私達が解決しなければならない根本的な問題はどこにありますか？ローマの信徒への手紙6章23節を見て、教えてください。

→罪とその刑罰である死。

Q. 51節に「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け」と書かれています。この垂れ幕は神様と人を隔てていた幕でした。イエス様が息を引き取られた瞬間に、これが真っ二つに裂けたことは何を意味しているのでしょうか？

→イエス様の十字架の死によって、私達の根本問題である罪が解決されたこと。

Q. 52節を見ると、イエス様が罪の刑罰としての死を私達の身代わりに死なれた時に、死の象徴であるお墓が開いて、神様を信じる者が生き返ったと書かれています。これはどのような喜ばしい福音を示していますか？

→イエス様の十字架によって、罪の刑罰としての死の問題も解決されたということ。もはやイエス様を信じる者にとって、死は罪の刑罰ではなく、永遠の命への入り口となったという福音。

4. お祈り

イエス様の救いを感謝して。

主のご復活は、当の弟子たち（女弟子）にとっても受け入れがたく信じがたいものであった。むしろ彼らは、不安と恐れと悲しみとに捕らわれていた。その死の力から解き放し、主のご復活を信じさせ、復活のキリストに出会わせて下さったのは、全く神の導きと憐れみによるものであった。

〈婦人たちの最初の不安と天使達の出現〉

十字架の死より足かけ三日目の早朝、主の亡骸が葬られた園の墓へと足早に向かう女たちがいた。彼女たちが墓へと向かっていたのは、十分ないとまもなく葬られた主の遺体に香油を塗り、丁寧に葬りの儀式を行うためであった。それが彼女たちの主にして差し上げる最善だったからである。しかし彼女たちは不安を抱えていた。それは、お墓の入り口の大石（二・三人男の力でないと動かない）を誰がころがらせてくれるのかと、又墓を見張っている番兵たちの警戒をどう抜けるかであった。けれども墓に着いて彼女たちが目撃したのは、すでに墓の入口の石が取りのけてあり、そして恐怖の余り身動き出来なくなっていた番兵たちの有様であった（2～4節）。いずれも天使達の出現と彼らの働きによるものである。救い主のご生涯における天使の出現は、誕生の折とゲツセマネでの祈りの時と、この復活の場面しかない。彼女たちの不安を取り除くために神が彼らを遣わされたのであった。

〈婦人たちの本当の恐れと復活の知らせ〉

最初に抱いていた不安は解消されたが、本当の恐れと不安は克服されてはいない。というのは彼女たちの心を強く捉えていたのは、主の十字架のむごたらしい死のお姿と、変わり果てた主の亡骸だったからである。彼女たちは、どこまでも主の死と墓との内に留まろうとしたのである。いや彼女たちは悲しみと失望のあまり、生前の懐かしい主イエスとの追憶だけをいつまでも追い求めようとしていたのであった。そうした彼女たちを虜に

していた悲しみ・失望、それらを打ち砕いたのが、天使達の復活の知らせだった。「あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたように復活なさったのだ」と（6節）。天使達は彼女たちに、墓の内に、又主の亡骸の内に入らぬ主のお姿を求めようとしてもそれはもはや出来ない、何故なら主は死を打ち破って復活なさったからなのだ、そう確かに告げた。死をも超えていられる全知全能のお方であり、真の神の御子でいらっしゃるお方だからである。その天使達の言葉によって彼女たちは死から復活のキリストへと向かうことになる。こうして彼女たちもようやく主のご復活を信じ始めていたのである。

〈復活の主との再会と宣教の使命〉

復活の知らせを天使達から受け取った彼女たちは、まだ恐れと不安と悲しみに捕らわれている仲間たちのところへ引き返そうとするが、その途中で復活のキリスト御自身が現れてくださった（9節）。この主の復活の顕現は、もちろん彼女たちに復活の事実を確証させるためと共に、新たな使命へと彼女たちを導くためでもあった。その新たな使命とは、主の十字架の死と復活とを全世界の人々に伝えるための大宣教命令と呼ばれるものに他ならない（19,20節）。復活の信仰は、主のご復活を信じるだけではなく、更にその生ける主をあらゆる人々に宣べ伝えるためなのである。それが教会の果たすべき使命と言える。マタイは、ここでは二人の婦人たちだけを登場させているが、他の福音書ではもう一人の名も見出される。二人三人の証言は真実であるとの聖書の約束に従うものである。彼女たちは、復活の最初の証人とされたが、正式には十二弟子達によるのを待たねばならない。信仰は聞くことによるのであり、又それは宣べ伝える人がいなくてはならないのである（ローマ10:17節）。私たちも主のご復活を信じ、キリストの証人としてこの生けるお方に仕え、証ししていきたいと切に願う。（山下朋彦）

テキスト マタイによる福音書 28章1～10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

先週に引き続いて、マタイ独自の記事に着目したい。イエス様の復活を告げる四福音書の中でマタイに特徴的なのは、十字架の時と同様に大きな地震が起きたということと、天使たちが天から降りてきたという記述、そしてイエス様を婦人たちが礼拝したということである。地震が示すのは、神御自身の目に見えざる臨在と、被造物自身が味わった衝撃である。天使たちが語った「イエス様はお墓にはおられない」という言葉の意味を、子供たちの視点で語りつつ、伝言が指し示す「ガリラヤ」へと思いを向けさせ、子供たち自身がもう一度聖書を読んで、自分にとってイエス様とは誰なのかを自ら考えるようにリードしたい。

「伝言……思い出のあの場所で会おう！」

皆さん、おはようございます！
みんな、今日はどうもおめでたい日なんだけど、何の日か知ってるかな？ そうだね。今日は、イースターの記念日です。イースターって何かな？ そう、イエス様がよみがえられた日だよ。

みんな、先週のお話しは覚えてるかな？ イエス様は何にも悪いことをしていないのに、逮捕されてしまって、殺人や強盗をした悪い人たちと一緒に、金曜日の日に十字架に架けられて処刑されてしまったんだよね。大地が地震を起こして揺れ動くほど、とっても悲しい出来事でした。でも、皆さん、その三日後、ちょうど今日みたいな日曜日に、イエス様は死の力に打ち勝って、よみがえられました。今日の聖書箇所は、その時のことが詳しく書かれてあります。

みんなも夏休みとかに、お墓参りに行くかもしれませんね（※契約の子ではない子たちを想定しています）。それと同じように、日曜日に、二人の女性がイエス様のお墓参りに行きました。名前は、マグダラのマリアさんと、同じ名前のもう一人のマリアさんです。この二人のマリアさんは、他の女の人たちと一緒に、イエス様が十字架につけられて処刑される時、遠くから見守っていた人たちなんです。27章55・56節にはこう書かれてあります。みんなで一緒に読んでみましょう。「ま

たそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。」

さて、この二人のマリアさんがイエス様のお墓参りに行った時、突然大きな地震が起きました。「あれっ？ どっかで聞いたような話だなあ。」こう思った子もいるかもしれませんね。そうです、先週イエス様が十字架に架けられて死なれた時も、大きな地震がありましたね。その三日後、またまたおっきな地震が起きたのです。余震かなとも思ったりしますが、余震とは言えないほど大きな地震でした。驚いたことには、その地震が起きた時、天使が天からやって来て、イエス様のお墓の石をわきへ転がして、その上に座ったんです。そりゃあもう、びっくりしたのってなんのって。そこで見張りの番をしていた兵隊さんたちは、あまりにもびっくりしたので、死人のようになってしまいました。まあ言ってみれば、気絶しちゃったんですね。同じくらい二人のマリアさんもびっくりしましたが、さすがに気絶はしませんでした。恐い思いもありましたが、でも何かいい知らせでもあるんじゃないかって期待してたかもしれませんね。天使さんたちは、それはもう光輝いていて、

真っ白な服を着ていました。だいたい、みんなの想像するような天使さんのイメージだね。それはそうと、その天使さんたちは、二人のマリアさんにこう言いました、「そんなに驚かなくても大丈夫だよ。私たちはあなたたちの味方なんだ。今日はとっても素晴らしいニュースを知らせにやってきました。あなたたち二人がお墓参りにやって来たイエス様は、もうここにはいません。覚えてないかな？ イエス様が言うてことを。私は十字架に架けられて殺されるが、三日目によみがえるって。そうイエス様が言うていた通り、イエス様は死の力に打ち勝って、よみがえられました。だから、イエス様はもうここにはいないんだよ。」こんな風に言ったんだ。

みんなは秋川雅史さんが歌ってる「千の風になって」という歌を知ってるかな？ その中に、こんな歌詞があります、「私のお墓の前で、泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかいません。私のお墓の前で、泣かないでください。死んでなんかいません。」

ちょうど、これと同じように、イエス様もみんなに向かってこう言うてるかのようです、「みんな、私の墓の前で泣くのはよしておくれ。そこに私はいないんだから。死んでなんかいないんだから。かねてから言うておいたように、私は死の力に打ち勝って、よみがえったんだよ。」こう言われるんですね。

こう言ってもまだ信じられないマリアさんたちに、天使さんたちは言いました、「まだ信じられないなら、ほらお墓の中を見てごらん。もう誰もいないでしょ？ イエス様をクルクルっと巻いた布があるだけでしょ？」 そう言われて、実際にお墓の中を覗いてみると、確かにもう誰もいません。布がパサッと置いてあるだけです。

まだ半信半疑の二人でしたが、天使さんたちは二人をせかすようにして、「さあ、お二人さん、早速お弟子さんたちのところに行って、この素晴

らしいニュースをみんなに伝えておくれ。イエス様からこんな伝言をもらってるんだ。“私は先にガリラヤに行ってるから、そこで会おう。待ってるよ。” ってね。さあ、行った、行った！」

そうして、二人のマリアさんがみんなの所に帰って、このことを知らせに行こうとした時、その時です、何とあのイエス様が目の前にいるではありませんか！ 「あっ、イエス様だ！」 二人はびっくりしたやら、嬉しいやらで、もう何が何だか半分分かんないような感じでしたが、それでも嬉しさの方が何倍も大きかったことと思います。死んだはずのイエス様が、いま目の前にいるんですからね。しかも、そのイエス様は、「おはよう」と声を掛けてくれました。ちょうど、今日、礼拝の一番最初に、みんなで「おはようございます」って挨拶したのと同じようにね。二人は嬉しくて仕方ありませんでしたが、死に打ち勝ってよみがえったイエス様という人が、あまりにもすごい人のように思えたので、このお方は神様だと思って、イエス様の前にひれ伏しました。イエス様を礼拝したんです。死人が生き返るなんて話は聞いたことがありません。でも、ここに死んだはずのイエス様が立っている。そして私たちに挨拶してくれている。これはもう、この人は神様に違いない、こうマリアさんたちは思ったんですね。

そして、最後にイエス様は言われました、「さあ、天使さんたちも言うてくれたように、お弟子さんたちのところに帰って、こう伝えておくれ。“ガリラヤで会おう、あの思い出の場所で” ってね。あのガリラヤは、私たちが初めて出会った大切な思い出の場所なんだ。そこからもう一度始めよう。そして、聖書をもう一度読み返して思い起こして欲しい。私が何を語り、何をしたかを。その時、君たちは知るだろう、私が誰であり、またどれほど君たちのことを深く愛しているかを。」

(梶浦和城)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章7節 (部分)

あの方は死者の中から復活された。

そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。

〈ねらい〉

イエス様の十字架は苦しみで終わることなく、復活の希望に続くものであること、イエス様こそが私たちの救い主であり、私たちもまた復活の証人として宣教の務めが委ねられていることを知る。

〈展開例〉

イースター、おめでとうございます！

ところで、皆、イースターって何か知っていますか？ どうして「おめでとう」って言うのかな？

そう、イエス様がよみがえられたから、「おめでとう！」ってお祝いするのですね。

先週のお話を覚えていますか？ イエス様は十字架にかけられて、死刑にされてしまいました。空も真っ暗になって、とても悲しい日でしたね。

それから三日たちました。日曜日の朝早く、二人の女の人がイエス様のお墓に行きました。マグダラのマリヤさんともう一人のマリヤさんです。この人たちは、イエス様のことが大好きで、よくお手伝いをしていました。そしてイエス様が十字架につけられたときも、遠くから見守っていました。

二人のマリヤさんがお墓についたとき、大きな地震が起きました。そして天使が天から降りてきて、お墓の前に置いてあった大きな重い石をわきへ転がして、その上に座りました。天使はどんな格好だったと思いますか？ 雷の光のように輝いて、雪のように真っ白な服を着ていました。お墓の見張りをしていた人たちは、ビックリ仰天、気絶してしまいました。

天使は二人のマリヤさんに言いました。「怖がることはありません。十字架につけられたイエス様は、ここにはいません。よみがえられたのです。」

天使にこんなことを言われたら、どんな気持ちでしょう。ビックリして、こわいけれど、嬉しくて、でも、信じられない……！

天使は続けて言いました。「イエス様のからだが置いてあった場所を見てごらんさい。」

本当に、イエス様はいませんでした。イエス様

のからだを巻いていた布は、空っぽでべっちゃんこ、中身がありません！

「急いで、弟子たちに伝えなさい。『イエス様はよみがえられた。ガリラヤで会いましょう』」

二人は走っていきました。すると、なんとイエス様が目の前に立って、「おはよう」と声をかけてくれたのです。

ああ、イエス様だ！ イエス様はよみがえられたんだ！ あなたこそ真の神様です。

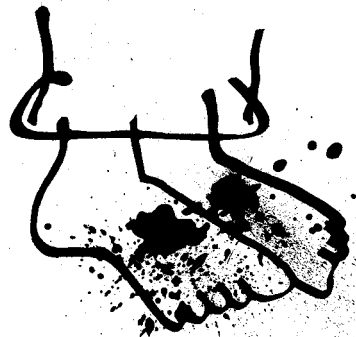
二人は喜びと感謝でいっぱい、イエス様の前にひれ伏しました。

「行って、弟子たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでまた会いましょう。」

弟子たちがはじめてイエス様に会ったガリラヤで、もう一度、今度はよみがえられたイエス様に会えるのです。「イエス様はよみがえられた！ イエス様こそ本当の神様です！」 そんなすばらしいメッセージを、これから弟子たちは世界中に伝える人になるのですね。

〈お祈り〉

イエス様がよみがえられたことを感謝します。イエス様が本当の神様であることがよく分かり、弟子たちのように、これからイエス様のことを伝えていけるように導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



「おはよう」「恐れることはない」

〈ねらい〉

婦人たちは、イエスさまの遺体を丁寧に葬るために、週のはじめの日曜日の朝に、イエスさまの遺体が納められています墓に出かけました。けれども、墓の穴をふさいでいた石が横に転がっていて、遺体がありませんでした。婦人たちは生前にイエスさまが言われたことを忘れて、墓の中にイエスさまを探しました。

私たちは、イエスさまと現在、どこで出会っているのでしょうか。そのことを一緒に考えてみたい。

〈展開例〉

イエスさまが十字架に付けられて殺されたのが金曜日の午後でした。そして、イエスさまの遺体がアリマタヤのヨセフさんのお墓に納められたのが、同じ金曜日の夕方でしたから、当時のユダヤ人たちの習慣からすれば、金曜日の日没から土曜日の日没までは「安息日」で、家から遠くに外出することはできませんでした。神さまを礼拝するために仕事や外出をひかえなければなりません。そのため、日曜日の朝になって安息日が明けましたので、婦人たちはイエスさまの遺体を丁寧に葬るために出かけました。「マグダラのマリアともう一人のマリア」さんが墓を見に来ました。

すると大きな地震が起きて、天使が降って来たかと思えば、墓の石を脇に転がしてしまいました。そして、その転がった石の上に座ったそうです。たぶん、あっという間の出来事だったと思います。石に座った天使の、「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった」そうです。墓の番兵は死人のように動かなくなり、婦人たちは、その情景と共に、墓の中にイエスさまの遺体がないことにとっても驚いたのでしょうか。天使は、「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ」と告げました。

天使は、生前にイエスさまがあなたたちにお話になったように、苦難を受けて復活されたのだと告げたのです。イエスさまは内緒にしていたのではなく、ちゃんとお話くださっていました。それも繰り返しお弟子さんたちにお話しになっていました。ところが、婦人たちも含めてお弟子さんたちは、イエスさまの言われた言葉を理解していませんでした。言われたことをよくわきまえていなかったのです。

天使は、イエスさまが復活されたことを語った後、続けて言いました。「あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」(7節)。ガリラヤは、イエスさまと弟子たちが伝道の旅を始めた場所です。婦人たちはそのことを他の弟子たちにも話すように天使に言われました。イエスさまも婦人たちに、直接話しかけてくださって、「ガリラヤでわたしに会うことになる」(10節)と言われました。

私たちにとってガリラヤはどこでしょうか。まさに、礼拝する場所です。そこでいつもイエスさまは私たちに会ってくださいます。

みなさん、イースターおめでとうございます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、私たちの救いのためにイエスさまが復活してくださってありがとうございます。日曜の礼拝ごとにイエスさまに出会うことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈視聴覚教材〉

復活され空っぽになったお墓やマリアたちの絵。

ガリラヤ湖の絵。

エルサレムとガリラヤの位置関係：新約時代のパレスチナ。（聖書巻末の地図6を参照）

〈御言葉の背景〉

ユダヤ教の安息日は、金曜日の日没から土曜日の日没まで続いた。安息日の間は外出できず、翌朝の日曜日の夜明けを待って、婦人たちはイエス様のお墓まで歩いて行くことができた。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：マタイ28:7部分

「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」。

☆骨子：①お墓に向かうマリアたち。②空っぽのお墓と主の天使からの驚くべき復活の事実。③復活のイエスとの再会とガリラヤへの期待。

☆例：

先週、十字架上で息を引き取った時に、地震が起きたね。お墓を見に行ったマリアたちが行くと、また大きな地震が起きて、光輝く雪のような白い衣を着た天使が現れて、墓の石を取り除けて何とこう言ったんです。「恐ららないで。イエス様は甦ったので、もうこの墓にはいない。ほら、からっぽでしょ。みんなと最初に出会ったガリラヤで待っていますよ。早く弟子たちに伝えに行きなさい」とね。マリアたちは喜んで、飛ぶような気持ちで弟子たちの所へ急ぎ走っていたら、何と復活したイエス様が目の前に。「恐れることはない。さあ、弟子たちにガリラヤでわたしが待っている、と伝えなさい」。マリアたちは、天使にイエス様が復活したと聞き、しかも直接自分たちの目で復活したイエス様を見て、触れて、もう間違いない、あの一緒に旅をしてきたイエス様だ、と思わずひれ伏したのです。

皆さんは、直接見ていないから、触れていない

から、復活されたイエス様が信じられないでしょうか。それとも「イエス様は本当に神の子だったんだ。父なる神様がイエス様を死なせたまま、放っておくはずないじゃないか。見捨てるはずがない。神様の救いのご計画を最期までやりとげたんだ。きっと、死から救い出し、永遠に変わることはない神様の愛あふれる救いの業が世界中に広がるよう、みんなが信じるようにイエス様を復活させたんだ。信じるよ」と言ってくれるかな。

さあ、弟子たちと一緒にガリラヤに行こう。そして、イエス様が何をお話してくださるか聞きに行こう。

〈展開の工夫〉

①ほかの福音書、並行箇所を読み比べてみよう。

②ほかにも天使が現れたのはどこかな？ 調べてみよう。

③ガリラヤ＝思い出の地。イエス様が最初に伝道を開始した所です。今度は弟子たちに世界に向けて伝道するようイエスは命令します。マタイ福音書の最後まで含め、聖書を聞いて、ガリラヤ探検してみよう。

イエスは最初にガリラヤで伝道をはじめた。

ガリラヤ湖で漁師をしていた○○○たちに「人間をとる漁師にしてあげよう」と言った。山に登り、山上の教えを話した。

体をいやした奇跡……

湖の上を歩いた自然の中での奇跡……

〈参考〉

天使という言葉は「使者」「メッセンジャー」を意味するギリシア語アンゲロスに由来する。しかし、単なる使者ではない。神の言葉を人に伝えるだけでなく、神の代理として行動し、神の意図を実行する。天使は天において神の御座での会議の一員であるとも言われている。絵画では翼があり、長い衣を着た姿で描かれるが、聖書の中の天使はいろいろな姿で現れる。天使の中には名前が記されている者もいる。（日本聖書教会発行のスタディバイブルのキーワードより抜粋掲載。）

〈ねらい〉

イエス様の復活を喜ぶ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. イエス様の葬られた墓にきた婦人達に、天使はイエス様の復活を告げました。6節の「復活なさったのだ。」は、実はもっと詳しく言うと、「復活させられた」という意味です。神様が私達を罪から救うために十字架の上で死なれたイエス様をよみがえらせたという事実は、何を教えてくださいますか？

→神様がイエス様の罪からの救いを認められたということ。

Q. 神様によってよみがえらせられたことで、救いが成し遂げられたことは確かだと証明されたのに、何故イエス様はすぐに弟子にお会いにならなかったのでしょうか。しかも、天使もイエス様も、弟子達が復活の主と会う場所はガリラヤとこだわりました。その疑問を解く鍵は、イエス様が救い主として働きを開始された時に引用された、4章15～16節のイザヤ書の預言にあります。イエス様がガリラヤを指定されたのは、復活された御自分はこの預言の成就であるということを示すためだったのです。それでは、こ

のイザヤの預言によれば、復活の主はどのようなお方ですか？

→罪の暗闇と死の陰の地に住む異邦人＝全人類を照らす救いの御光。

Q. 復活の主は、もはやユダヤ人だけでなく、全人類を照らす救いの御光です。では、この救いは何をもたらすのでしょうか？ イエス様は10節で、御自分を信じる者達を「わたしの兄弟たち」とおっしゃってくださいました。これこそイエス様の与える救いと言えますが、イエス様の兄弟とされるということは、どういうことですか？

→私達が神様の子供の一人にされるということ。

Q. イエス様の復活によって、罪人である私達が神様の子供とされる特権を授けていただけるようになりました。私達は、この福音を自分が信じるだけで留めておくべきでしょうか？ 天使とイエス様は婦人達に何とお命じになったのでしょうか？ そして天使からイエス様の復活を告げられた婦人達は、どうしたのでしょうか？

→天使とイエス様は、弟子達に復活を告げに行くことを婦人達に命じられた。

これを聞いた婦人達は、8節、「大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子達に知らせるために走って行った。」。

私達も救いの喜びに促されて、この素晴らしい福音の使者とされてゆきたい。

4. お祈り

復活の主の救いを感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。



この箇所はヨハネ黙示録1章1～8節の序言と対応する結びの言葉です。

「これらの言葉」（この書すなわちヨハネの黙示録全体を指す）が信じるべき言葉であることがまず語られます。その理由として、神の権威ある言葉であること、救いの完成が近いこと、この書物の預言の言葉を守る者へのさいわいが挙げられます。ヨハネはここで示された言葉の権威を強く感じたのでしょう。伝えた天使を拝もうとしますが、それは禁じられます（9節）。

11～15節では、神のみわざの完成が要約されます。天使はヨハネに、この書の預言の言葉を秘密にしておいてはならない、時が迫っているから、と告げます（10節）。その後警告が続きます。これは、悔い改めて神に立ち返よう勤めても拒否し続ける人には、そのままにしておきなさい。汚れた者は、なお汚れるままにしておけ、という言葉です。それは同時に、かたくなになって不信仰に陥らず、悔い改めの機会がなくなる前に悔い改めなさい、という忠告でもあります。

神の救いのみわざは、一方で神の都に入れる人達があり、他方、入れずに外に出される人達がいるという二つの報いをもって達成されます。

「自分の衣を洗い清める者」という言葉は、キリストを信じた人が、キリストの十字架の贖いの血によって清められることを表現したものです。ここではさらに、常に悔い改め、キリストの恵みによって聖化されていく歩みをも指しています。そのような人は、命の木に対する権利を与えられ、門から都に入ることをゆるされます。「犬のような者」はここでは神を神としない者を指していると言ってよいでしょう。

16～17節では、祝福が語られます。「ダビデのひこばえ、その一族」とあります。主イエスはダ

ビデの根であり、同時にダビデの子孫であられます。キリストがダビデの家系であることが強調されます。さらに主イエスは神の日が来ることを予告する明けの明星であるといわれます。またこの星は王位を象徴するともいわれます。ヨハネの時代のような迫害下のキリスト者達は、夜が明けて神の義が太陽のごとく上がるのを待ち望んだであります。困難の中で終末を待ち望む者達に希望が示されます。

17節では「霊と花嫁」すなわち聖霊と教会が声をあわせて「来てください」といいます。これは終末を期待している聖徒たちの叫びです。そして儼然に命の水を飲むように招かれます。再臨のとき私達は、命の水をまったく儼然に飲ませていただいたことを一層はっきり知らされるでしょう。だから「きたりませ」と再臨を待ち望み、主の恵みによって救われたことを完全に喜ぶときを期待して待ちたいと思います。

18～19節では、この書は、神が著者であるから、この言葉を聞く人は、これに付け加える事も何か取り去ることもしてはならないといわれます。

20～21節は、結びの言葉になります。キリストは、再臨を待ちのぞむ教会の切なる祈りに応えてこう言われます。「然り、わたしはすぐに来る」。「わたしはすぐに来る」、「すぐにも起こるはず」、「時が迫っている」、こうした言葉で、この箇所全体が、終末が迫っているという緊張感で包まれています。それはまた、困難の中で主を待ち望む聖徒達の祈りに力強く応えるものです。だから終末の希望を確信して「アーメン、主イエスよ、来てください」と祈ることが出来るのです。最後に「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」という言葉で締めくくられます。（金原義信）

テキスト ヨハネの黙示録 22章6～21節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問35

〔単元のねらい〕

聖書の終末信仰は、主なる神による威厳と決意と明るい展望に満ちています。すべてのものの初めであった方が、すべてのものの終わりとなられます。私たち人間が、一切のものに結末をつけるのではありません。まことに幸いなことに、主イエス・キリストが、真に幸いな終わりを、備えておられます。初めと終わりの「間」を生きる教会とキリスト者は、いまなお不安と戦い、希望と試練の中にあります。子どもたちも、自分の苦しみが終わりになき戦いになるのではないか、という不安を抱えることがあります。「恐れなくてよい」「然り、わたしはすぐに来る」。そのように語られる主イエスの、力と威厳と喜びに満ちた「声」を、子どもたちの信仰の耳に、はっきりと響かせること。それは、日曜学校礼拝と教育の、すべてであると言えるはずです。「アーメン、主イエスよ、来てください」という告白と賛美と祈りが、力をこめてささげられる礼拝を求めたいものです。

「主イエスよ、来てください！」

今日の礼拝は、聖書の最後のページを開いていますね。なんだかワクワクしませんか？ 聖書という素晴らしい神さまの言葉を、こうして最後のページまで学ぶことができたのです。これはほんとうにうれしいこと、すごいことだと言ってよいと思います。

聖書の最初のページには、「初めに、神は天地を創造された」と書かれていました。神さまは、すべてのものの初めに、いつでもいてくださいます。私たちが、この世に生まれてきた初めに、神さまは私たちと共におられました。教会が誕生したときにも、神さまは共におられて、教会に命を与えてくださいました。私たちが、イエスさまを信じて、小さな信仰の一步を歩き始めたときも、神さまは私たちと一緒に歩いてくださったのです。いつでも、どんなときにも、神さまは私たちの初めにおられます。だから、私たちが何を始めるときにも、決して恐れなくてよい、心配しなくてもよいのです。

そして、神さまは、すべてのものの終わりにも、私たちから決して離れることはありません。私たちの地上の生活が終わるとき、私たちは決して独りぼっちではありません。イエスさまを信じる人

びとがこの世を去るとき、イエスさまはすぐに私たちを迎えて、神さまのもとに導いてくださいます。たとえこの世の命が終わるときでも、私たちは何も心配いらないのです。このように、イエスさまは、すべてのものの初め、そしてすべてのものの終わりです。だから、いつでも、どんなときでも、私たちはイエスさまに囲まれ、イエスさまの内にいるのです。

「見よ、わたしはすぐに来る」(12)。

すぐに来る。そのようにイエスさまが言われます。私たちを愛してくださるイエスさまです。2000年前に、一度、私たちのところに来てくださいました。あの時には、ベツレヘムに生まれた赤ちゃんとして、来られました。そして、イエスさまは、病気の人を治し、悲しんでいる人の友たちになり、私たちみんなの兄弟になり、そして私たちを罪から救うために、十字架の苦しみを受けてくださいました。十字架に死んで、三日目に復活されたイエスさま、そして、天の父なる神さまのもとに帰られたイエスさま。その同じイエスさまが、もう一度来てくださるのです。

これは、神さまが聖書でかたく約束してくだ

さった本当のことです。「これらの言葉は、信頼でき、また真実である」(6)。神さまは嘘を言われません。イエスさまは、私たちを偽る方ではありません。「すぐに来る」と言われたイエスさまは、確かに来てくださいます。私たちは、イエスさまが来られるときを待っています。「すぐに来る」。それは、10年後でしょうか。50年後でしょうか。だれにも分かりません。明日かも知れないのです。

そして、大切なことを言いましょ。 「すぐに来る」というイエスさまの約束は、じつは毎日、毎日、本当にそうなっているのです。イエスさまは、朝も昼も夜も、私たちのところに「すぐに」来てくださいます。毎日、イエスさまをお迎えすることができます。ですから、私たちは毎日、お祈りし、毎日、聖書を読むようにしましょう。そうすれば「すぐに」イエスさまは、私たちのところに来てくださいます。

『子どもカテキズム』35問には、このように書かれています。

「どこを目指して歩むのですか」

「イエスさまが再び地上に來られる再臨の日、
天の国を目指して、
歌いつつ歩みます」。

イエスさまは、2000前のクリスマスに、赤ちゃんとして來られたように、もう一度、来てくださいます。今度は、赤ちゃんではなく、世界のすべての人びとを裁く、まことの王さまとして來られ

ます。そのすばらしい日を、私たちは待っています。でも、口をポカンと開いてイエスさまを待っているわけではありません。「天の国を目指して、歌いつつ歩みます」。なぜ歌うことができるのでしょうか？ それは、最後の日を待っている「今日」という日にも、イエスさまは私たちのところを、訪れておられるからです。今日という日に、すでにイエスさまは、私たちのところに来ておられます。おうちでも学校でもそうです。遊ぶときも眠るときもそうです。だから歌うのです。だから勇気をもって歩めるのです。そして、歌いながら、歩みながら、ますます「イエスさま、来てください」と祈ります。

私たちを愛してくださるイエスさま。このイエスさまにお会いする日は、どんなに素晴らしい日になることでしょう。今でも、心の中でイエスさまのことを思うと、胸が熱くなることはありませんか。命も惜しまないで私たちに下さったイエスさまを思うと、心が熱くなります。まして、天国でイエスさまにお会いする日の喜びはどんなでしょう。世界のすべての教会が、一つになって、イエスさまの前に出てゆくのです。

「命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい」(17)。永遠の命という、素晴らしい水を、いつでも飲むことができる。そして、いつまでも神さまを礼拝し、神さまを喜び、神さまにお仕えするのです。ハレルヤ！
(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの黙示録 22章20節後半

「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。



〈ねらい〉

私たちの信仰生活は希望に満ちています。なぜならイエス様がこの地上に来てくださって、もう一回お会いすることができるからです。その時に全ての苦しみに終止符が打たれることを一緒に学びたいと思います。

〈展開例〉

みんな、毎日の生活の中で何か嫌なことあるかな？ 苦しいこと、かなしいことってあるかな（子どもたちに聞く）

「見よ、わたしはすぐに来る。この書物の預言の言葉を守る者は、幸いである」(22:7)。「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる」(22:12)。「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください」(22:20)。

イエス様、今日の御言葉ですぐに来ると三回も約束されました。実はイエス様が、一度来られたことがありました。それはいつでしょうか？ 皆知っているからな？

イエス様は、2000年前のクリスマスに一度来てくださいました。ベツレヘムの馬小屋に赤ちゃんとして生まれてくださいました。そして、この地上で、30数年間の人生を送られました。特に、最後の3年間は神様の福音を宣べ伝える、宣教活動に従事されました。イエス様は、悲しんでいる人の友となってくださいました。苦しんでいる人の苦しみを共に担ってくださいました。そして、病気で苦しんでいる人の病を癒してくださいました。罪を負って苦しんでいる人の罪を許してくださいました。そして、私たちの罪の身代わりにイエスは十字架につけられました。そのようにして、私たちの罪の身代わりに、十字架上で神様から裁きを受けられたのでした。そして、十字架上で死なれましたが、三日目に死の内よりよみがえられました。そして、信じる私たちに永遠の命を与えてくださったのでした。

そのイエス様が、今度もう一度、この地上に来

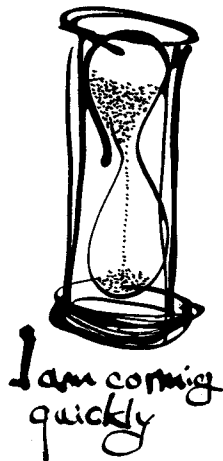
られると約束してくださったのです。これを再臨と言います。イエス様は、いつ、この地上に帰って来られるかわかりません。しかし、イエス様は確かに、この地上に帰って来られるのです。

ではなぜイエス様はこの地上に、もう一度帰って来られるのでしょうか。それは、新しい天と新しい地において、神様を信じる者たちと共にこの地を治めるためにもう一度この地上に帰ってこられるのです。

私たちの毎日の生活には、いろいろな悩みや苦しみがあります。悲しいことや、困難なこともたくさんあります。どうして、こんなことがあるのか分からないこともたくさんあります。でもイエス様がこの地上に帰ってこられた時に、その全てのことに答えが与えられるのです。毎日の生活の中で辛かったこと、悲しかったこと、悩んだこと、それらの全ての意味をイエス様は私たちに示してくださいます。だから、私たちは毎日をどんなことがあっても、共にいてくださるイエス様とともにあゆんでいくことができるのです。

〈お祈り〉

イエス様、どうぞ早く来てください。あなたに早くお会いしたいです。全ての困難の答えを聞くことのできる恵みを感謝いたします。アーメン。



私はすぐに来る

〈ねらい〉

天使を拝もうとしたヨハネに、「神を礼拝せよ」(9節)と語ります。イエスさまが終わりに来てくださり、すべてに完成を与えてくださいます。だからこそ、「アーメン。主イエスよ、来てください」(20節)と告白と賛美と祈りをささげることができます。終わりの完成は、今に生きている私たちにとりまして、自分に起こっている事柄の意味をイエスさまが明らかにしてくださるとの表明です。

〈展開例〉

礼拝するということは、ヨハネさん自身も繰り返し学ばなければならないことでした。誰を礼拝するのでしょうか。ここに天使とヨハネが登場し、ヨハネと天使が語り合っています。ヨハネも天使も神の取り次ぎ役になっています。教会員に神の言葉を伝えるために天使とヨハネが協力しています。ヨハネは天使の足もとにひれ伏して拝もうとしました。これはすでに一度記されたことです。

「やめよ。わたしたちは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書物の言葉を守っている人たちと共に、仕える者である。神を礼拝せよ」。この言葉はヨハネの黙示録のすべての言葉がここに凝縮しているような言葉です。「神を礼拝せよ」、この一語に尽きるのです。神を礼拝することに全存在をかけた教会は、そのために神ならざるものを神として拝むことを強要する勢力と戦わなければなりません。まさに今戦っています。ヨハネの黙示録は単なる好奇心の対象ではなくて、膝を屈めることにおいてのみ、その言葉は分かってくるのです。

「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」。こんなに慰めに満ちた言葉はないでしょう。私たちが始め、終わらせる必要はないのです。

イエスさまがすべての始まりであり、すべてを終わらせてくださるのです。私たちはただそのイエスさまの御業にあずかるだけです。どんなに小さな愛の業も、このイエスさまの御業にあずかるだけです。

「“霊”と花嫁とが言う。『来てください』。これを聞く者も言うがよい、『来てください』と。渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい」(17節)。ここに記されています教会の姿も生き生きとした具体的な姿です。神の霊と花嫁とは、教会のことです。新しいエルサレムと呼ばれた教会です。しかし、ここにおいては天におけるエルサレムは、地上にいます。だから「来てください」と言うのです。私たちは地上にいてすでにイエスの花嫁としての白い衣装を着けています。そして、「イエスよ、来てください」と言います。イエスさまはすでに私たちと共におられますが、そのイエスさまが裁きを行うために再び来てくださいます。「これを聞く者も言うがよい、『来てください』。ここで私たちが主イエスの来臨を待ち望んで祈り続けているときに、それを耳にした人々も参加して言います。「主よ、来てください」。

パウロはコリントの信徒に対する愛を込めて、「主イエスの恵みがあるように」と祝福を告げました。この黙示録の記者ヨハネも、この手紙を読んでもくれる教会の仲間、兄弟たちに対する愛を込めて述べています。「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」。

〈お祈り〉

天の神さま、終わりの時にすべてに意味を与えてくださることをありがとうございます。主よ、来てください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈サブタイトル〉

「帰ってきたイエス様」 or
「イエス様、リターンズ」

〈合言葉〉

「マラナ・タ！」(主よ、来て下さい)を、特に今日の合言葉(キーワード)として、繰り返し用いる。例えば、「今日は、まずこの言葉で挨拶をしましょう、『マラナ・タ!』(「またな!」じゃないよ)、これはね、イエス様、来て下さい!っていう意味の言葉なんだよ。昔のクリスチャンたちは、これを合言葉にして、挨拶をしてたんだ。」

〈中心テーマと狙い〉

十字架で死に、三日目に復活し、天に昇られたイエス様が、世界と救いを完成するために、もう一度地上に来られるのだ、という大きな期待感を「マラナ・タ!」の合言葉のもとで子供たちと共有する。

〈作業パターン1〉

漫画やアニメ、ドラマなどの最終回について、子供たちに話してもらい、どんな風にストーリーが終わるのかを楽しく語ってもらう。この作業を通して、世界と歴史の終わりへと、子供たちの関心を向けさせる。

〈作業パターン2〉

出張に出かけたお父さんや、旅行に出かけた

お母さんの帰りを待ちわびた経験がないか、語り合ってもらおう。もし、ない場合は、教師が自分の体験や誰か他の人から聞いた体験を話して、きっかけとする。これらの語り合いによって、待ちわびるという気持ちを実感し、イエス様の帰りを待つことへとつなげる。

〈作業パターン3〉

教師のメアドを教え、イエス様に見立てて、子供たちからパソコンでメールを送ってもらう。例えば、「イエス様、早く帰ってきてね」とか「いつぐらいに帰ってくるの?」とか。あるいは、手紙を書いてもよい(谷川俊太郎さんの『かみさまへのてがみ』などをヒントに)。

〈作業パターン4〉

今イエス様がこの地上に来られたとしたら、どの場所に、どんな格好(髪型、服装)で来られるか、今の世界の人たちに対して、何を語り、何をなされるか、どういう人々と交流を持たれるか、などを子供たち同士で語り合ってもらおう。

〈祈り〉

イエス様、あなたがもう一度、この地上に戻ってきてくださることを感謝します。それはいつですか?あなたが帰ってこられるのを、僕たち私たちは楽しみに待っていますから、一日も早く来て下さい。マラナ・タ!(主よ、来て下さい!)



〈ねらい〉

再臨の主を喜び待つ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. イエス様は十字架にかかり、復活なさった後で、天に昇られました。イエス様はずっとそこにおられるのでしょうか？ 今日の御言葉で、イエス様は何とおっしゃっていますか？ 7節を見て、教えてください。

→イエス様は再び来られる。

Q. もしかしたら、再臨とか終末とか言うと、恐い印象がしたり、不気味だなど思うかもしれませんが。ヘブライ人への手紙9章28節によると、再臨されるのはどのようなお方ですか？ また、信じる者達に何を与えてくださると書かれていますか？

→私達の罪のために十字架にかかってくださった救い主イエス様こそが、再び来られるお方。だから恐れることはない。イエス様は私達の救いを完成するために来てくださるので、私達は喜び待つ。

Q. 「わたしはすぐに来る」とイエス様はおっしゃっています。それなら、もう普段の生活はやめて、イエス様を待つことに専念したらどうかという考えが浮かんできますが、このような

考えはどのようなのでしょうか？ テサロニケの町の教会には、実際、このように考え実行している人達がありました。パウロは彼らにどのような忠告をしていますか？ テサロニケの信徒への手紙二3章11～12節を見て、教えてください。

→落ち着いて、自分の召しを忠実に果たすことを勧めた。学生は学業に励み、社会人は仕事に、主婦は家事にいそむることこそ、主の再臨を待つ正しい姿勢である。

☆聞いたことがあるかもしれませんが、この黙示録が書かれてから千何百年も経っています。それで、「どうしてイエス様はまだ来ていないの？」と疑問を感じているかもしれませんね。あるいは、「再臨に関しては、聖書はあてにならない」とか、「今まで来なかったんだから、これからも来ないだろう。」なんて高をくくってしまっていたら、大変です。

聖書に書かれているイエス様の再臨はうそでもなければ、本当はもう再臨しているはずだったのが、大幅に遅れているというのでもありません。全部イエス様の予定通りなのです。そしてこれから、いつ再臨されるかは神様だけが御存じです。イエス様が再臨を約束なさったのは、信じる者達が迫害や苦難の中で、御自分がもうすぐ来られることを思って耐えることができるようにということだったのです。同じように私達も、苦しいことがあっても、イエス様が明日再び来られるかもしれないという望みをもって生きてゆけるのです。本当に明日いらっしゃるかもしれない。誰にもまだ来ないと決めつけることはできないからです。私を愛し、私のために身を献げてくださった神の御子イエス様が再び来られる。その希望を抱きつつ、「イエス様、来てください。」と祈りながら、日々、自分のなすべきことをなして歩いていくのです。

4. お祈り

主を待ち望む信仰が強められるように。

第10課 すべては神のもの（第八戒）**第八戒**

「盗んではならない。」

序

第八戒は、人間の所有に関わる戒めです。第六戒や第七戒がより人間にとって本質的な命や性や家庭に関わる戒めだったのに比べると、第八戒はより周延的な事柄のように思えるかもしれませんが、実はそうではありません。

所有権が最も基本的な人権の一つであることからわかるように、第八戒は他の戒め同様、人間の存在や生活に関わる重要な戒めです。

「盗み」とは？

ウ大142、ハイデル110、ジュネーヴ206

「盗み」とは、人が正当に持つことが許されている状態や物を不当に犯すことや奪うことです。けれども、誰から何をどのよう盗むかによって、様々な「盗み」のかたちが現れます。

第八戒で禁じられている事柄にどんなものがあるか、少し身近な具体例で挙げておきましょう。万引き・キセル・カンニング・本やCDなどの違法コピー・ドロボウ・高利貸し（消費者金融！）・詐欺・ごまかし・不正取引・不良品販売・食品等の偽装表示・誇大広告・低賃金労働・国や自治体による税金の無駄遣い・国際貿易における不公平、等々。それだけではありません。買いすぎ・食べすぎ・お金や時間の浪費・電気や水など資源の無駄遣い等も。あるいは、たとい実際の行動に出なくても心の中での生活に対する不満、他者の繁栄に対するねたみ、この世の財産に対する過度の執着や怠惰でさえも。

これくらいで十分でしょう。第八戒が私たちの日常生活といかに深く関わっているか。また、この戒めが今日いかに軽んじられているか、お分かりいただけたでしょう。大切なのは、なぜ「盗み」がいけないのか。何が神のお望みになることなのかを正しく知ることです。

すべては神のもの

詩編24:1、50:12、ヨブ1:21、1テモ7-8、

箴言23:10、1コリ7:17、マタイ25:14-30

「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」です。人はみな裸で生まれ出で、みな裸でこの世を去って行きます。この世で与えられているものはすべて、“与えられている”ものであって、私たちが自分自身で初めから持っていたものなどありません。第八戒は、この真理を前提としています。

そして、この神が、御心のままに各々に必要なものすべてを備えてくださるのです。住む場所であれ、家族であれ、財産であれ、生きるのに必要なものすべてを、一人一人にふさわしく分け与えてくださいます。すなわち、人間の所有はすべて神の御心によるのであって、それを不当に奪うことは神の意思への侵害にあたるということです。

私たちはむしろ自分に与えられた分に満足し、それを感謝し、忠実に管理すべきです。それらを放置したり無駄にしたりしてはいけません。他方で「忠実に管理する」とは、当たりさわりのない消極的な生き方をすることでもありません。それは、御心に沿った用い方をすることであって、私たちが神の栄光と隣人の益のために賜物を積極的に用いることが正しい管理の仕方なのです。

正義と公平の神

出21:37-22:12、ルカ19:8、レビ19:35、

申命25:13-16、エゼ18:8、アモス8:4-6、

ミカ6:10-11、ヤコブ5:4-6

盗みは神の意思への侵害であると同時に、言うまでもなく、所有者に対する侵害でもあります。しかもそれは、物質的な損失を与えるのみならず、その人を精神的に苦しめる行為でさえあります。なぜなら、財産は人間の尊厳と自由の保証であり、その人と家族の人生を支えるべきものだからです。さらに、奪われたものがその人にとってどれくらい大切なものであるか、他の人にはわかりません。ですから聖書は、盗みに対して、何倍も

の償いを要求するのです。それは盗まれた物に対する償い以上に、その人に心を返す行為だと言ってもよいでしょう。

神は正義と公平の神でられますから、あらゆる不正を厭われます。そもそも不正は、あたかも神が見ていないかのごとくに犯される罪であり、不信仰からくることです。

神の公平さは、しかし、この世の富が皆に等しく配分されることでは必ずしもありません。一人一人の財と労働の実りが正義と愛を持って保たれ互いに分ち合われることを、主は望んでおられるのです。

貧しい人への配慮

レピ19:9-10、ルツ記、申命記15:7-11、
詩146:6-7、イザヤ3:14-15、58:6-10、
マタイ25:35-40

とりわけ貧しい人々に対する配慮を、主は殊のほか重んじられます。そもそも貧しい人々に分け与えることは必ずしも愛の行為ではありません。彼らが当然受けるべきものを正当に受け取っているかという、正義と公平の問題です。

実際、最も弱い部分に最もよく世の罪の影響は表れるものです。たとい生活が貧しかろうが、彼らもまた主のものですから、決してないがしろにされてはなりません。貧しい人にすることは、主に対してするのと同じなのです。彼らが尊ばれるかどうかは、神に対する私たちの信仰の実質が問われる試金石と言えましょう。

惜しみなく与える

Ⅱコリ8:9、マタイ10:8、11:5、ロマ8:32、
ルカ6:30、38、Ⅰヨハ3:17-18、マタイ6:11-12、
ヤコブ2:15-16

キリスト者にとって、第八戒は、特別な意味を持っている戒めです。神の富を盗んでやまない私たちに神が惜しみなく御子をさえくださったことを、私たちは知っているからです。私たちはこの福音を、ただで受けて救われました。

したがって、この福音に感謝して生きる道は、惜しみなく与える生活です。神に対し、また隣人に対し、自分自身のすべてを献げて生きる生き方です。それでもなお、主の恵みは尽きることが

ありません。御自身の御子をさえ惜しまずにくださった方は、万物をも賜るお方だからです。

主は貧しい人のもとに福音を届けられました。しかもそれは、一人一人の具体的な必要を満たす形でもたらされました。「罪の赦し」をお与えくださる方は、「日用の糧」をも与えたもうお方なのです。ですから、私たちもまた、周囲や世界の貧しい人々に、言葉だけではなく具体的な形で助けを差し伸べましょう。それが、キリストの愛と恵みを帯びている者の務めです。

この世とかの世の富

創世1:26、28、3:17-19、Ⅰコリ10:31、
ハイデル111、ルカ12:21、18:24-30、
Ⅰテモ6:9-10、エフェソ4:28、
マタイ6:19-21、24、黙示21:26、14:13、22:5

神が造られた世界を治めることをゆだねられた人間は、労働を通して世界を保ちよりよくするために召されています。墮落によって呪われたものとなったこの世の富に、本来の輝きと喜びを回復することが、キリスト者の使命です。

今日の世界における経済活動は実に複雑であり、自分自身の労働の意味を見出すことは極めて困難かもしれません。それでもなお、基本的な信仰の姿勢は有効と信じます。

何よりも、労働によって産み出される富は、人が神と共に豊かに生きるためにあるのであって、富を産み出すために人が犠牲になってはならないことを覚えましょう。

第二に、この世の富を絶対視せず、むしろその富を隣人の利益の促進のため、貧しい人を助けるために用いましょう。この世の財の管理にその人の信仰が出るものです。失われる地上にではなく、天に宝を積む人は幸いです。

終わりの日に、私たちは本来神のものであった賜物を主にお返しし、神がすべてのすべてとなられます。同時に、栄光の御国は私たちのものとなり、私たちは永遠に主にお仕えするのです。

ディスカッションのために：

1. 上記の諸々の「盗み」が与える影響とは？
2. 貧しい人々への配慮としてできることは？
3. 天国の富への信仰が私たちに与える影響は？

第11課 神の真実に生きる（第九戒）

第九戒

「隣人に関して偽証してはならない。」

序

第八戒で私たちは、この世で生きて行くために必要な賜物と所有の意義について学びました。しかし、私たちに必要なのは物だけではありません。体（第六戒）や生活（第八戒）が大切なことは言うまでもありませんが、私が私として生きて行くための心の支えが人間には必要です。

もちろん、究極的には神様に対する信仰が人間を活かすわけですが、そもそも神が人間にお与えくださった名誉ということがあります。それは、創造の冠として造られた人間としての輝きであり、私たち一人一人が前向きに喜ばしく生きて行くために必要な自尊心のようなものです。

自分を過剰に誇るプライドは罪ですが、最低限、自分自身が真実に扱われることがなければ人間は生きる意味を見失うでしょう。実に、人間と社会における“真実”が守られること、これが第九戒の主眼なのです。

「偽証」ということ

「偽証」という用語からも分かる通り、第九戒は裁判の場面を想定しています。しかし、正式の法廷でなくとも、日常生活の中で白黒つけなければならない場面は多々あるはず。この花瓶を壊したのは誰？ 私のお財布がここにあったはずなのに、誰か取らなかった？ 車の接触事故は、どちらの責任？

そのような時に、もし私たちが真実を知っていた場合、どのように発言すべきでしょうか。自分が当事者の場合、当事者が身内の場合、当事者が全くの他人の場合、おそらく発言は微妙に異なってくることでしょう。そこに働く心理は何なのでしょう。そこにある人の罪は何なのでしょう。そして、あるべき姿とは、何なのでしょう。

ウソの心理

創世3:11-13、ヨハネ8:44、ロマ1:25、3:4

私たちがウソをつくのは、まず、自分（たち）を守ろうとする時でしょう。私はやっていない、関係ない。そうやって自分の名誉・評判・利益・地位・プライドを守ろうとするのではないのでしょうか。それは、自分自身のためである時も、会社や政党など自分が属する組織のためである場合もあるでしょう。悪質なのは、初めから相手を陥れようと意図的にウソをつく場合です。いずれの場合でも、ウソは基本的に利己主義的な行為です。その結果、相手がどうなるかまで思い計ることはありません。自分の側さえ傷つかなければ、自分さえ守られれば——それがウソの本質でしょう。

小さな子供でさえ、物心つく頃からウソをつきます。そもそも最初の人間からして（全くのウソではなかったにせよ）責任のたらい回しをしたのでした。以来、ウソをつく性質は、人間の本性に刻み込まれているようです。

舌の罪

ヤコブ3:1-12、ロマ3:13-14、マタイ5:22

「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています」という御言葉どおり、舌の罪は時に「死をもたらす」ことさえあります。

身に何の覚えもないことで突然訴えられ拘束され有罪とされる、密告や偽証による冤罪がそれです。舌は小さな器官ですから、自分を守るために、あるいは賄賂や脅しや力によって、容易に真理を曲げることができます。しかし、その一瞬のウソが相手の一生を奪うことさえあるのです。

ウソだけではありません。相手を必要以上に持ち上げたり、こき下ろしたりすること。皮肉を言い続けたり、けなし続けたりすること。とりわけ、人格を否定するような言葉による暴力は、著しくその人の自尊心を傷つけます。それは、人から存在価値を奪うのと同様、一種の殺人です。言葉（舌）の罪の恐しさを覚えましょう。

人間の不真実と神の真実

マルコ14:31, 55-57, 15:11, 14:61, 15:39

人間の不真実と神の真実。それら二つが交わる場所、それがイエス・キリストの十字架です。

「死んでもあなたを知らないなどとは申しません」と言い張った一番弟子ペトロは、三度も (!) イエスを「知らない」とウソにウソを重ねました。ユダヤの祭司長や最高法院の議員たちは、イエスを死刑にするための偽証集めに躍起になりました。何の悪事もないことを知りながら、群集もまた扇動されて、「十字架につけろ」と叫び続けたのです。

この間、イエスはひたすら沈黙し続けました。そうすればするほど、自分を守ることしか考えていない人間たちの言葉の醜さ、悪どさ、悲しさが際立ちます。真実を知っていながら認めようとしない惨めな人間と、語ったとおりの真実に生きる神の御子のコントラストが鮮やかに示されます。

神の真実に生きる

出23:3, 6, ヘブ6:18, エフェソ4:25

こんな話があります。大恐慌の時代、ある貧しい老人が空腹に耐え切れず店先からパンを盗んでしまった。老人は捕まり裁判にかけられた。このことは大きく報道され、世論は老人に対する同情論に傾いた。衆人環視の中、判決は大方の予想を覆して有罪。払えるはずもない罰金が科せられた。ところが、冷酷な判決を下した裁判官は、閉廷を宣して壇上から降りるや傍聴席に向かって「この哀れな老人のためにどうか寄付をお願いします」と呼びかけ、自らも多額の寄付を投じた。その額は罰金をはるかに超えて余りあるものであった。

神の真実に生きるとは、こういうことです。たとえ弱い人や貧しい人をかばうためであっても、真理が曲げられてはならないと聖書は教えます。真理が曲げられる社会では、結局、真実な人間関係もまた育たないからです。神が求める隣人愛は、真実に基づく愛であって、ひいきをすることや単なる馴れ合いなのではありません。

私たちはその模範を、何よりキリストにある神の正義と愛に見るのです。十字架に現された神の真実は、決して罪を曖昧にしない神の正義と、ど

こまでも罪を赦す神の愛の二つです。神の真実に生きるとは、この二つに生きることです。

真理は自由にする

マタイ5:37, ヨハネ3:21, 8:32, 14:6,

ロマ12:9, エフェソ4:15, ジュネーブ212,

ウ大144, IIテモ1:8

虚偽にまみれたこの世で真実に生きることは、至難の業です。それでも、神の真実によって救われた私たちは、真理を愛する者として生きたい。なぜなら、真理を愛することは主を愛することにほかならないのですから。

しかし、いつでも本当のことを言うのがよいとも限りません。真理を重んじることとそれを伝達することとは、別のことだからです。「愛によって真理を語り」とあるように、真理を語るには愛が必要です。同じことを語るにも人を辱める語り方もあれば、人を建て上げる語り方もあるはずです。私たちはただ主にあって真理を愛し、人を高め・愛し・救うために語るができるように励みましょ。愛によって語られた真理は、人を苦々しい思いから解放することでしょう。真理は私たちを自由にするからです。

アーメン (真実) たる者

ロマ8:16, 31, IIテサ3:3, IIテモ2:13, 黙示3:14

私たちをありのままに受け入れてくださる主イエスの真実な愛は、私たちを神の永遠の刑罰からすでに解放していただきました。万物を裁くお方が私たちの味方である以上、この世においても、私たちが裁き落とせるものなどありません。

たとえ私たちが不真実でも、神は真実です。私たちがこの方を拒まない限り、この方も私たちに拒まれません。かの日には、真理の御霊とともに、私たちのために証をしてくさるであります。アーメンたる方により頼む者は幸いです！

ディスカッションのために：

1. ウソが及ぼす影響について考えよう。
2. 真実を貫くのが困難なのはどんな時か？
3. 真実な言葉によって築かれる人間関係とは？

第12課 完全を求めて（第十戒）

第十戒

「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

「欲してはならない」

創世3:6、マタイ5:28、Iヨハ2:16、

マタイ15:19、箴言6:25、サム下11:2、

フィリピ3:19、エフェソ5:5

第十戒は、内容的に第七戒や第八戒とよく似ていますが、たんなる繰り返しではありません。この戒めのポイントは「欲してはならない」という言葉にあります。「欲する」と訳された言葉は、「むさぼる」と訳すことのできる大変強い欲望や情動をさす言葉です。

蛇に誘惑された女が禁断の実を見ると、それは賢くなるように「^{そそのか}唆していた」と訳されている言葉がそれです。何も「実」自身が誘ったわけではありませんが、それに心が奪われることによって彼ら自身の内に起こった「欲する」思いを、このように表現したのでしょう。最初の人間たちの墮落は、神から与えられている自分たちの境遇に満足できず、欲望にかられて「してはならない」一線を越え出たところにありました。

それほどに人の内なる欲は強いのです。それは多くの場合、目から入るものに触発されますが、私たちの心の底から湧き上がって身を焦がし、王の心さえも惑わす力となります。結局のところ、それは欲望を神としていることに他なりません。貪欲とは、偶像崇拜なのです。

「隣人の家」

箴言27:4、30:15-16、コハ4:8、ヤコブ3:16

神によって造られた人間は、神と共にいることによるのみ真の幸いを得られます。この幸いを失った人間は、自分の中に生じた空虚感や喪失感を埋めようとしますが得られません。神と同様に心を満たせるものなどありえないからです。

自身の内に満足を得られない人間は、「隣人の家」をうらやみます。“隣の芝は青く見える”とは、うまく言ったものです。何であれ他人のものはよく見えます。それさえあれば自分も幸せになれるかのように錯覚するのです。

それだけならまだしも、やがてうらやましく思う思いは増大し、他人の幸せを許しがたく感じるねたみに変わることさえあります。自分の祝福を祈っても他人のためには祈らない。自分の喜びは伝えても、隣人の喜びには耳を閉ざす。ねたみは怒りや憤りにまさる激しい利己愛です。

上を向いて

Iテモ6:6-9、ウ大147、ヘブ13:5、マタ6:25-32

他人の幸せと自分の幸せが両立しないように思えるのは、互いに見比べるからです。人間の真の幸せは、自分を見るのでも互いに見比べるのでもなく、上を見ることによるのみ与えられることを覚えましょう。造られた存在にとって、造ってくださった方に愛される以上の幸せがあるでしょうか。もしそこに幸せを見出すことができるならば、人と比べる必要などありません。

下を向いて生きるのは惨めです。互いを比べて生きるのは殺伐とした社会を生み出します。ただ天を仰ぐことによるのみ、人は満ち足りることを知るはずです。なぜなら、そこには、空の鳥・野の花にまさって私たちを愛してくださる方がおられるからです。

十字架から始める

フィリ2:6-8、イザ53:2、マタ26:15、27:35

それにもかかわらず、私たちは下を向くのです。自分の腹が神となり、すぐに欲望で一杯になるのです。わかっているも他人と比べては落ち込んだり高ぶったりするのです。生まれつき神と自分の隣人を憎む方へと心が傾いている私たちは、どうすれば救われるのでしょうか？ どうすれば神を愛し、隣人を愛する生活ができるのでしょうか？——十字架が、その答えです。

自分の幸せしか求められない私たちのために、すべてを捧げた方がおられます。私たちが天上の幸いにあずかるために、不幸のどん底まで下られた方がおられます。この世の輝きに目がくらむ貪欲さへの裁きの身代わりに、慕うべき面影さえも失った方がここにおられます。

それなのに、人はたった銀貨30枚欲しさにこの方を売り渡し、苦しみあえぐ十字架の下でさえ、衣欲しさにくじを引くのです。人間はどこまでも貪欲です。そして、主はそのような人間のためにどこまでも与え尽くされました。

私たちは、この十字架の主を見上げねばなりません。そこから目をそむけてはなりません。そうして、自分は何をすべきかを考えましょう。それでもなお自分の欲を満たすことのみを追い求めるべきなのか、それともこの方のために捧げる生き方へと変わるべきなのかと。

神の国と神の義を求めて

ガラ5:24、ルカ19:8、ヨハネ12:3、
フィリピ3:7-9、マタイ13:44-46、
ハイデル113、詩19:10、マタイ6:33、19:27、
ロマ6:16、ガラ5:16、Iヨハネ2:17

「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまった」人たちです。イエスと出会った徴税人ザアカイは、お金への執着心が無くなったばかりか、それらを貧しい人々に惜しげもなく与えることを約束しました。最愛のイエス様のために注ぐ香油の値段のことなど、マリアは考えてもみませんでした。キリストを知ることのすばらしさを知ったパウロにとって、輝かしい経歴や業績など今や「塵あくた」も同然です。

天国の価値を見出した者にとって、それにまさる宝など、この世に存在しません。この世の富を求めるかわりに、神を求め、御言葉を求め、神の国と神の義とを求めて主に従うのです。肉の欲に従う奴隷なのではなく、主を慕い求める僕として霊の導きに従って歩むのです。

この世も世の欲も、やがては過ぎ去ります。しかし、神の御心を行う人は永遠の命に生きる者とされるのです。

「十戒」を生きる生活

ロマ7:7-8、12、詩19:8-15、139:23-24、
ジュネ216、Iヨハ1:8-10、
ロマ12:1-2、7:15-25、詩1:1-2

「むさぼるな」と言われなければ自分は「むさぼり」が何であるかさえ知らなかったと、パウロは言っています。神の律法が霊的かつ聖なるものであるが故に、この律法の鏡によって私たちの罪はことごとく暴かれます。

しかし、キリストによって罪赦された私たちは、むしろ自分の心の思いをすべて主に知っていただきましょう。それは依然として汚れだらけの心かもしれません。そもそも、罪がない人などいないのです。それにもかかわらず、主は私たちを愛してくださいました。そうであれば、私たちは主にありのままの自分をひたすらお献げしましょう。そして、このような自分を主の御手の中で変えていただきましょう。

「十戒」に生きる生活とは、この繰り返しにほかなりません。その中で私たちは自分の罪や弱さと正直に向き合うこととなります。しかし、そのような私たちのために死んでよみがえられた主が、共におられます。そこから感謝が湧き上がります。そこから生きる力と喜びが湧き上がってくるのです。

終わりに～完成をめざして

ヘブ12:1-2、フィリ3:12-16、ハイデル114-115
復活の主を見上げて生きる人生は、さらに高いもの、さらにすぐれたものへと私たちを励まします。絡みつく罪をかなぐり捨てて、ひたすら目標に向かって走る人生へと促してやみません。

私たちはこのような歩みをほんのわずから始めたばかりです。とは言え、どんなに小さく遅々たる歩みであっても、それらはすべて御国の完成につながる歩みであることを覚えましょう。

栄光が世々限りなく神にありますように！

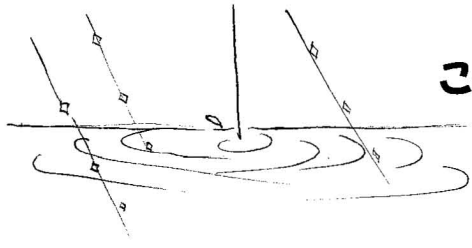
ディスカッションのために：

1. なぜ「隣人の家」はよく見えるのか？
2. キリストとの出会いによって人は、なぜどのように変わるのか？
3. キリスト者が十戒を生きることの意味とは？

いのちのパン

「これは天から降って来たパンである。

先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。



このパンを食べる者は永遠に生きる。」

(ヨハネによる福音書 第6章58節)

愛する日曜学校のお友達へ！

「子どもカテキズム」をもちいた「いのちのパン」も この号でいよいよ終わります。

一年間、毎日、つづけられたお友達には、

主イエス・キリストさまの恵みと 天のお父さまの愛と 聖霊なる神さまの交わりが

あふれるほど、いっぱい与えられたことを信じています。✿

聖書の教え 一教理と言いますー を身につけると、

神さまのことがもっともっと好きになって来たでしょう？

そうすると心のなかが暖かくなってくるでしょう？

それは、イエスさまの愛が注がれているからです。

「そうかなあ？」って思うあなたも、「そうだ そうだ！」と思う君も、

声に出して言いましょう。「イエスさま大好き！ ありがとうございます。」

今日も、明日も「いのちのパン」と仲良くして、みんなといっしょに、お祈りして行こうね！

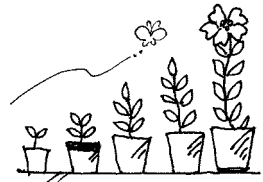


今週も、イエスさまの祝福が 愛するお友達の上にゆたかにありますように！

いのちのばん

12月31日(月) 問65 使徒2章38節
賜物として聖霊を受けます
 十戒を100点満点守りきることができ
 るのはただイエスさまお一人です。
 今年、あなたは、どれだけ十戒に生き
 ることができましたか？ 失敗の方が
 うーんと多かったかもしれませんね。
 でも、あなたの心には神さまの御心に
 生きようとする心があるでしょう。聖
 霊を受けているからです。

1月3日(木) 問65 エフェソ4章13節
成熟した人間になり
 神さまは、信仰によって、僕たち私
 たちをイエスさまと一つに結び合合
 わせてくださいます。また、十戒や
 御言葉によって、
 イエスさまのよ
 うな人間として
 成長させてく
 ださい。



1月1日(火) 問65 コリント一3章3節
聖霊によらなければ～イエスは主
 明けましておめでとう！ 新しい一
 年も、あなたの力ではなく、聖霊なる
 神さまのお力によって、イエスさまを
 信じ従ってゆくことが
 できるのです。「いのば
 ん」といっしょに御言
 葉とお祈りを毎日、大
 切にしていこうね。

1月4日(金) 問66 使徒20章21節
神に対する悔い改めと～信仰と
 イエスさまを信じる生活は、イエス
 さまの教会といっしょに生活するこ
 とです。教会を中心に生活すること
 です。信仰の生活とは教会の生活のこと
 です。罪から救われる生活は、教会を
 通して与えられる神さまの祝福に生
 きることです。「悔い改めと信仰」が
 祝福の入ってくるパイプです。



1月2日(水) 問65 コリント一3章27節
あなたがたはキリストの体であり
 新しい一年をどのような一年にし
 たいですか？ ただ一つはっきりして
 いることは、あなたは決してひとり
 ぼっちで歩まないということです。天
 国を目指した旅は、
 教会、日曜学校の
 お友達といっしょ
 に進む道です。

1月5日(土) 問66 ローマ3章21節
信じる者すべてに与えられる神の義
 イエスさまは、十字架について僕た
 ち私たちの罪を赦し、神さまによって
 ただしい人間と認めてくださいまし
 た。でも、もしも教会に
 行行かなかつたら、あな
 たはイエスさまの福音を
 知らず、祝福を受けられ
 ずにいたことでしょう。



いのちのばん

1月7日(月) 問66 使徒20章28節
神が御子の血によって～神の教会
 君が通っている教会は、父なる神さまが御子イエスさまの十字架で流された血によってつくってくださいました。その教会には、君だけではなくまだ教会に来たことのない大勢の人々も招かれています。教会で、神さまの祝福にあずからせるためです。教会のために毎日お祈りしよう！

1月10日(木) 問67 ヨハネ16章8節
世の誤りを明らかにする
 あなたのお友達のお多くはイエスさまの十字架を大切に思っていますね。自分が神さまの前に悪い人間だと認められないからです。僕たち私たちはどれほど感謝してもしきれません。聖霊なる神さまによって、罪人なのに愛され、赦されていることを信じていることができるからです。

1月8日(火) 問67 使徒3章19節
悔い改めて立ち返りなさい
 どうして教会に通ってイエスさまを信じることができたのでしょうか。それは、あなたに聖霊なる神さまが働いてくださったからです。聖霊はあなたを毎日、神さまへと向かわせ、信じる心を新しく育ててくれます。



1月11日(金) 問68 マタイ28章19節
父と子と聖霊の名によって洗礼を
 「み・れ・お」って知っていますか？ 神さまが教会に与えてくださった祝福の方法です。みことば・れいてん・お祈りです。あなたの信仰は、この三つをちゃんとしていればどんどん元気になります。



1月9日(水) 問67 ヨハネ1章12節
自分を受け入れた人～信じる人々
 イエスさまは、ご自分を信じた人を誰でも神の子としてくださいます。イエスさまは罪から救うお方です。あなたは神さまの前に罪人ですか？「はい」と認めることができた人は、聖霊によってますます神さまに向かって歩めます。



1月12日(土) 問68 使徒2章42節
祈ることに熱心であった
 いつでも・どこでも・誰でも、神さまの祝福を注いでいただける方法は何ですか？ お祈りです。天のお父さま、わたしが毎日お祈りできるように聖霊なる神さまを注いで助けて下さい。



いのちのばん

1月14日（月） 問68 ローマ3章5節
キリストに結ばれて一つの体を
 神さまは、あなたを祝福するために教会に導かれました。祝福したくてしかたがないのが私たちの神さまです。祝福とはなんでしょうか。イエスさまと一つに結ばれることです。教会員となって教会とともに生きることです。



1月17日（木） 問69 ヨハネ1章3節
万物は言によって成った
 すべてのものをみことばによってお造りになられた神さま。あなたのみことばの力はどれほど大きなものでしょうか。みことばを、毎日の聖書、そして毎週の教会の説教で聴くことができることをありがとうございます。これからも御言葉を信じ、みことばにしたがって歩ませてください。

1月15日（火） 問68 エフェソ4章3節
霊による一致を保つように努め
 神さまは、「み・れ・お」によって、二つのことをなそうとしておられます。一つは、あなたがイエスさまのように生きる人間となることです。もう一つは、イエスさまの体なる教会をあなたとお友達が力をあわせてつくっていくことです。私たちは「教会」として建てあげられていきます。

1月18日（金） 問69 ヨハネ1章14節
言は肉となって、わたしたちの間に
 イエスさま、あなたは僕たち私たちとまったく同じ人間となってくださいました。それだけでなく、日本語で親しく分かりやすく語りかけてくださいます。そのようにしてわたしのそばにいてくださりわたしを守って下さることを感謝します。







1月16日（水） 問69 ヨハネ1章1節
初めに言があった
 イエスさまのことを「生ける神のことば」と教会は呼びます。「ことば（イエスさま）は神と共にあり、ことば（イエスさま）は神さまだ」とヨハネさんが言ったからです。ことばをしゃべったり理解するのは人間だけです。人間はことばによって生きるものとされ、生かされていくのです。

1月19日（土） 問69 ルカ4章44節
諸会堂に行つて宣教された
 天のお父さま、昔、イエスさまはユダヤの町々を巡り歩きながら、神さまの国が近づきましたと福音を宣べ伝えられました。わたしもその福音を聴くことができたので、今、神さまの子どもとされました。感謝します。



いのちのばん

<p>1月21日（月） 問69 ローマ16章25節 イエス・キリストについての宣教</p> <p>天のお父さま、昨日、日曜学校で聞いたお話を、自分だけのものとしなくて、お友達にも伝えられるようにしてください。イエスさまのことを紹介することこそ、神さまに喜ばれるご奉仕です。聞いてくれるお友達を教えてください。伝える勇気を教えてください。</p>	<p>1月24日（木） 問70 ローマ10章17節 信仰は～聞くことによって始まる</p> <p>すべてのものをみことばによってお造りになられたのが、わたしたちの神さまです。イエスさまへの信仰をつくってくださるのも、みことばです。みことばの説教です。あなたもお友達に伝えてあげませんか？</p> 
<p>1月22日（火） 問70 ネヘミヤ8章5節 彼が書を開くと民は皆、立ち上がった</p> <p>神さま、昔、エルサレムに戻ってきたイスラエルの人たちは、聖書が読まれたとき起立しました。わたしたちは教会で聖書の朗読や説教を聞くとき座っていますが、わたしたちも心からの感謝と感動をもってみことばを聴けるようにしてください。</p> 	<p>1月25日（金） 問70 使徒20章32節 この言葉は、あなたがたを造り上げ</p> <p>イエスさまは、昔も今もみことばを語り続けていてくださいます。それは、僕たち私たちに「まことの人間」へと育ててくださるためです。また、ご自分の民を育てるためです。イエスさまの教会を造り上げるためです。</p> 
<p>1月23日（水） 問70 ルカ10章39節 座って、その話に聞き入っていた</p> <p>お食事の用意をすることは大切な奉仕です。でもイエスさまが心を込めて御言葉を語られるとき、一番大切な奉仕は何ですか。神さまに喜ばれる奉仕をするためには、まず、みことばを聴くことです。</p> 	<p>1月26日（土） 問70 使徒20章32節 恵みを受け継がせることができる</p> <p>パウロ先生は、一生懸命に奉仕した教会とお別れする日に言いました。「あなたがたを神さまとその恵みのことばにゆだねます。」教会を造り、神さまの恵みをもたらすのは、人間ではなく、神さまであり、そのみことばなのです。明日のお話をしてくださる先生と神さまに期待しましょう。</p>

いのちのばん

1月28日（月） 問70 コリントー14:24
みなよげん 皆が預言しているところへ
 教会の活動のなかでいちばん力を注いでいるのは、聖書のお話をするこ
 と（説教）です。なぜなら、神さまは、
 教会の人たちが一生懸命聖書のお話
 をしたり聴いたりしているところの
 真ん中に、いっしょにおられるからで
 す。新しく来た人たちにも分からせて
 くださるからです。

1月31日（木） 問70 ヘブライ4章2節
しんこう 信仰によって結びつかなかった
 日曜学校で神さまのお話を学んだ
 お友達全員が、自動的に天国に行ける
 のではありません。天国に行ける約束
 の御言葉が役に立たないお友達もい
 るのです。お金はお店に行っても使わな
 いでいれば、ただの紙切れですね。御
 言葉を信じる人にだけ、御言葉の力は
 役に立つのです。

1月29日（火） 問70 詩編119編130節
みことば 御言葉が開かれると光が射出で
 御言葉は神さまのおことばです。神
 さまの方から教えてくださるのでな
 ければ、僕たち私たちの力では決して
 分かりません。ですから、聖書を読む
 時には「教えてください」とお祈りし
 ます。そのとき、御言葉の方から光が
 射し込んで、心を明るく照らして、だ
 んだん分かってきます。

2月1日（金） 問70 ペトロー2章2節
うまれたばかりの乳飲み子のように
 生まれたばかりの赤ちゃんは、朝も
 夜も4時間もすれば、おなかがすいて
 「ミルクが飲みたいよう」とわんわん
 泣きます。飲むと「にっこり」です。
 神さまの子どもは、いくつになっ
 ても、赤ちゃんのように、
 いのちを養う御言葉を必要としています。



1月30日（水） 問70 詩編119編9節
みことば 御言葉どおりに道を保つことです
 詩編119編は、「神さまの御言葉は
 なんとすばらしいのだろう」と10ペー
 ジにもわたって詩人が歌い続けてい
 ます。御言葉は
 あなたの毎日を
 神さまに喜ばれ
 る清い歩みとし
 てくださいます。



2月2日（土） 問70 テモテニ3章17節
よわざ 善い業~十分に整えられるのです
 天のお父さま、わたしは神さまのお
 働きができる人間として選ばれました
 た。そのために聖書が与えられまし
 た。いつもそばに聖書をおいて、御言
 葉に親しめるようにしてください。毎
 日、御言葉によって、神さまに喜ばれ
 る善い業ができる人間に整えてくだ
 さい。

いのちのばん

2月4日（月）問71 コリントー11:23

このように行いなさい

大人の礼拝式では「洗礼」や「聖餐」とよぶ式をします。この二つは教会が考え出したものではなく、イエスさまが「このように行いなさい」と命令されたものです。教会はそれを礼典と呼んで、心から感謝して行います。



2月7日（木）問72 ローマ6章3節

イエスに結ばれるために洗礼を

洗礼を受けた人はイエスさまの体と結び合わされています。イエスさまの愛と力で離れることができないように結びつけられているのです。「本当なの？」って。本当だよ！ 御言葉の約束を信じることだよ。



2月5日（火）問71 コリントー11:23

わたしの記念として

神さまは目に見えませんが、目に見えるものを用いて、神さまの祝福を注いでくださいます。目に見えるお水やパンを用いて、イエスさまのみ体と信じるわたしの体とを一つに結び合わせてくださいます。信仰の弱いわたしのために、神さまの恵みを目で見、手でさわらせてくださるのです。

2月8日（金）問72 ガラテヤ3章27節

洗礼を受け～キリストを着ている

寒い外に出るときも、ジャンパーがあれば大丈夫でしょう？ 洗礼を受けた人は愛に満ちたイエスさまを着ているから、どんな寒いところ、つまり苦しいときも平気です。完ぺきな人間のイエスさまという服を着ている人は、夢のように美しくきれいな天国にもそのまま入れるのです。

2月6日（水）問72 マタイ28章19節

父と子と聖霊の名によって洗礼を

人は洗礼の礼典によって、父なる神さまと御子なる神さま・イエスさまと聖霊なる神さまの交わりの中に、すっぽり入らせていただくのです。洗礼って、ことばでは言い表せないすばらしい恵みなのです。イエスさまは、信じた人は洗礼を受けるようにと強くつよく招いておられます。

2月9日（土）問73 コロサイ2章11節

キリストの割礼を受け

赤ちゃんのとき洗礼を受けたお友達達は、自分が洗礼を受けたことを覚えてないでしょう？ でも、イエスさまは覚えておられます。あなたとイエスさまはこれまで、そしてこれからも、ずっといっしょです。



いのちのばん

2月11日（月） 問74 コリントー10:16
キリストの体にあずかること

礼拝式の中で、パンとぶどうジュースをいただくことが聖餐の礼典です。イエスさまの十字架の苦しみと復活の勝利。今、聖霊によって私たちと一しょにいてくださることとやがて再びこの地上に戻って来てくださること……。生き生きと覚えさせてくださる恵みの手段、方法、パイプです。

2月14日（木） 問76 フィリピ4章6節
神に打ち明けなさい

あなたの心にあることを何でも話すことができるのは、真剣に聞いてくれる本当に中のよいお友達だけでしょう。神さまは天におられるあなたのまことのお父さまです。誰よりも真剣に聴いてくださるのです。神さまは、あなたがその口で心の中を打ち明けることを待っておられます。

2月12日（火） 問74 コリントー11:25
血によって立てられる新しい契約

私たちの罪が赦され、神さまの子ども立場を与えられ、永遠の命を与えられる恵みは、イエスさまが十字架の上でただ一度、流された血のおかげです。その救いのみ業をいつもおぼえるために、教会は聖餐の礼典をくりかえしお祝いします。わたしの力はイエスさまの血から、わくののです。

2月15日（金） 問76 フィリピ4章6節
感謝を込めて祈りと願いをささげ

聖書を学んでいると、信じることはお祈りすることだと分かってきますね。けれども、信じていてもちゃんとお祈りしないまま一日が終わってしまふことがありますか。神さまはあなたの名前を呼んで、お祈りを待っておられます。「はい」と感謝をもって返事をするのがお祈りです。

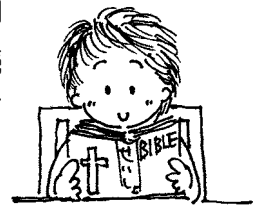
2月13日（水） 問75 コリントー11:29
主の体をわきまえずに飲み食い

天のお父さま、聖餐は、洗礼を受け、自分の口で教会の人たちの前で、教会の信仰に「アーメン」と告白した人だけがあずかります。僕たち私たちに、一日も早く、信仰を言い表す喜びの日を与えてください。



2月16日（土） 問76 ヨハネー5章14節
神の御心に適うことを～願うなら

天のお父さま、あなたの御心にかなうことをお祈りでお願いすれば、必ず聞き入れてくださることを感謝いたします。御心を知るために聖書を読んで祈り、祈って聖書を読めるように導いてください。



いのちのばん

2月18日（月）問76 マルコ7章34節
「エッフアタ」と言われた

お祈りは神さまとの会話です。それにはまず相手の声に耳をかたむけることが大切です。神さまのみ声を聴く耳が開かれないと、お祈りもできないのです。イエスさま、あなたのみ声を聞き取れるようにわたしの耳を開いてください。



2月21日（木）問77 マタイ6章6節
隠れたことを見ておられる父

「お祈りって本当に聴かれるの？」大丈夫です。誰も見ていない、聞いていないところでしたことも、ちゃんと神さまに見られています。まして、あなたの聞こえないくらい小さな祈りの声も、神さまははっきりと聴き取っていただきます。



2月19日（火）問77 マタイ6章9節
だから、こう祈りなさい

初めて「あ」の字を書いたのは、うすい灰色で記されていたお手本をなぞったときでした。イエスさまは、初めてお祈りする人のためにお手本のお祈りを与えてくださいました。それが「主の祈り」です。この祈りをお祈りすれば、100点満点のお祈りが天のお父さまのところに届きます。

2月22日（金）問77 エフェソ6章18節
霊に助けられて祈り、願い求め

お祈りは聖霊なる神さまのお働きによらなければできません。イエスさまのお名前によってささげなければ、天のお父さまに届きません。お祈りしている人には、「三位一体の神さま」が分かるでしょう。お祈りできるってすごいことだね。






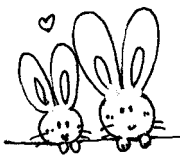
2月20日（水）問77 マタイ6章9節
だから、こう祈りなさい

初めて筆で字を書いたとき、上手に書けませんでした。ところが、先生が上から手を握って真っ白な半紙の上で動かしました。見ると、大人のような上手な字が書かれていました。誰が書いたのですか。先生？ 自分自身？ お祈りとはイエスさまと一つになってすることなのです。

2月23日（土）問78 マタイ6章9節
天におられるわたしたちの父よ

「天のお父さま」とお呼びするだけで心に喜びが始まります。わたしはイエスさまの十字架のおかげで罪を赦された神さまの子ども！ と思い起こすことができるからです。このようにお呼びできれば、もうお祈りは終わってしまう？ くらいです。神さまはあなたの真のお父さまです。

いのちのばん

<p>2月25日（月）問78 ローマ8章14節 「アッパ、父よ」と呼ぶのです</p> <p>「バブバブ」って言えば赤ちゃんのまねですね。「アッパ=父」という言葉は、もともとまだしゃべれない赤ちゃんの声のことで、赤ちゃんは、神さまに呼びかけているのかは、分かりません。でも、僕たち私たちは、神さまにむかって素直に「アッパ」とお呼びしましょう。</p>	<p>2月28日（木）問79 マタイ6章9節 御名が崇められますように</p> <p>第一の願いは、そのお名前がすべての人からほめたたえられるようにという祈りです。「神さまを神さまにする」「神さまの栄光を求める」ために奮いたたせる、とても熱いお祈りです。誰よりもそのように熱心にお祈りし、生きられたのは、イエスさまでした。主イエスさまに続こう。</p>
<p>2月26日（火）問78 ガラテヤ4章6節 「アッパ、父よ」と呼ぶ御子の霊</p> <p>天のお父さま、このように神さまをお呼びできるのは、神さまが天の窓を大きく開いて、わたしに御子であられるイエスさまの霊、聖霊を注いでいてくださるからです。今日も、父と子と聖霊の神さまが私をその愛で包みこんでいて下さることを感謝します。</p> 	<p>2月29日（金）問79 ローマ11章36節 栄光が神に永遠にありますように</p> <p>パウロ先生は、ローマの教会に神さまのお働きやご計画についてていねいに説明しました。最後には、上のようを書いて「アーメン」と言って終わりました。「御名があがめられるように」というお祈りは、最初であり最後のお祈りなのです。</p> 
<p>2月27日（水）問78 ガラテヤ6章10節 信仰によって家族になった人々に</p> <p>神さまは「私たちの」お父さまです。イエスさまを信じたお友達は、みんなイエスさまの弟や妹たちですから、神さまの家族です。自分のことしか願わずに求めない「ひとりよがり」なお祈りはできなくなりますね。神の家族のために祈りましょう。</p> 	<p>3月1日（土）問79 エフェソ1章17節 神を深く知ることができるように</p> <p>神さまをあがめるための方法は、神さまを正しく深く知ることです。それは聖書に書かれている御言葉を聴くことによります。明日の礼拝のお話を期待しましょう。御言葉の光は、神さまの栄光を求めて読む人に射し込みます。</p> 

いのちのばん

3月3日(月) 問79 フィリピ1章11節
神の栄光と誉れとをたたえること

天のお父さま、わたしは神さまとお友達を愛して生きていくために、御言葉を学び、学校の勉強もがんばりたいと思います。御言葉によって真理を知る力や悪魔の働きを見抜く力を与えて下さい。今日もイエスさまの祝福に満たされて、神さまの栄光をほめたたえるようにしてください。

3月6日(木) 問80 ペトロ2章13節
義の宿る新しい天と新しい地とを

神さまの国、天国は、僕たち私たちの力で、つまり、教会が大きくなり、信じる人が増えることによって、完成しません。イエスさまがもう一度来てくださるときに、この世界がまったく新しい天と新しい地に一瞬で造りかえられるのです。お祈しながらその日を待っていきましょう。

3月4日(火) 問80 マタイ6章10節
御国が来ますように


御国とは神さまがいっしょにいてくださるところのことです。神さまが神さまとして認められているところです。神さまだけが王さまの国です。イエスさまを信じる人たちの間には、もう御国が始まっています。教会がめぐるしです。イエスさまを信じ従えば従うほど、御国は広がります。

3月7日(金) 問80 ローマ16章20節
サタンを～足の下で打ち砕かれる

僕たち私たちの住む世界は、今、悲鳴をあげています。「おんだんか」「かんきょうもんだい」「せんそう」など。原因は人間の罪です。サタン(悪魔)は罪を武器に「俺さまが勝つ」とうぬぼれています。うそです。「主の祈り」が、イエスさまと私たちが勝つのです。今日も祈りましょう。


3月5日(水) 問80 ヨハネ18章36節
わたしの国はこの世には属していない

「この世」というのは、イエスさまを信じ従わない人たちが支配する世界のことで、この世でどんなに偉くなくても有名になっても、それだけでイエスさまに喜ばれるわけではありません。



3月8日(土) 問81 マタイ6章10節
御心が行われますように、地の上に

信じることは、お祈りすることです。お祈りすることは神さまの御心(お考え)がなりますようにと求めることです。神さま、わがままな思いを捨てさせてください。神さまの思いに従う心をつくってください。何度失敗しても、従う心を燃やし続けてください。



いのちのばん

3月10日（月） 問81 ルカ22章42節
御心のままに行ってください
 明日は十字架につけられるという日の夜、イエスさまは必死に祈られました。「父よ、御心なら、この苦しみを取り除いてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままにしてください。」これこそお祈りのお手本です。わたしの願いではなく、神さまの願いがなりますように！

3月13日（木） 問82 マタイ6章11節
必要な糧を今日与えてください
 「日用の糧」とは毎日の食べ物という意味です。イエスさまは、人間がどれほど弱いものであるのか、どんなに傲慢なのかご存知です。食べ物は神さまから与えられる愛の証拠です。食事のときには必ず感謝（お祈り）しましょう。どんなに小さなことでもお祈りしましょう。

3月11日（火） 問81 マタイ16章24節
自分を捨て、～十字架を背負って
 イエスさまのことを尊敬する人はたくさんいます。ところが、イエスさまに従う人はとても少ないのです。多くの人が当たり前、正しいと考えていることの正反対の道を進むこととなるからです。自分中心から神さま中心に、毎日、新しく方向を定めなおす「主の祈り」を祈り続けましょう。

3月14日（金） 問82 テモテ4章4節
感謝して受けるならば
 天のお父さま、このご飯を感謝します。お祈りにこたえてくださる主の御名をさんびします。食べられないお友達にもご飯を与えてください。これを食べて心も体も元気にしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。





3月12日（水） 問81 コリントー2:14
自然の人は～受け入れません
 天のお父さま、今日もイエスさまを信じて聖書を読み、「いのちのばん」を読んでもお祈りができませんでした。それは神さまの霊が注がれているからです。今日も明日も聖霊を与えてください。

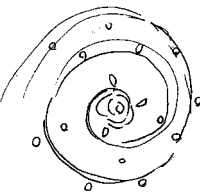




3月15日（土） 問82 テモテ6章8節
食べるものと着るものがあれば
 お金持ちの人をうらやむ気持ちがでてきたら、イエスさまがほめてくださった子どもの心を失ってききます。何も持たずに生まれてきて、死ぬときも何も持って行けません。天のお父さま、食べもの着るものが与えられていることで、神さまの愛に満足できる心を造ってください。

いのちのばん

<p>3月17日（月） 問82 箴言30章8節 わたしを養ってください</p> <p>御子なる神さまのイエスさまはまことの人間ですから、体をもった人間が生きるために必要なものをぜんぶご存知です。イエスさまも地上におられたとき、それらをすべて天のお父さまにお求めになられました。私たちも大胆に必要なものを与えてくださいと祈りましょう。</p>	<p>3月20日（木） 問83 マタイ18章33節 わたしがお前を憐れんでやったように</p> <p>イエスさまは、七の七十倍まで兄弟の罪を赦してあげなさいとおっしゃいました。かぎりなく赦してあげなさいということです。天のお父さまがあなたのことを限りなく赦していただくからです。このみことばを持って、友達のところに行かせてください。</p>
<p>3月18日（火） 問83 マタイ6章12節 わたしたちの負い目を赦してください</p> <p>天のお父さま、自分が悪くないのに悪口を言われたり意地悪をされて、ぜったい赦さない！ とカッカと怒ってしまいます。そのとき、十字架でわたしの罪を赦してくださったイエスさまを忘れています。そのときこそ、イエスさまに立ち返れるように助けてください。</p>	<p>3月21日（金） 問83 詩編130編4節 赦しはあなたのもとにあり</p> <p>天のお父さま、赦そうと思っても赦せませんでした。自分の罪の心に負けてしまいました。けれども、何度も負けてしまうわたしでも、このみことばによって神さまに赦され、愛されていることを教えていただきました。主の御名を賛美します。</p> 
<p>3月19日（水） 問83 エフェソ1章7節 その血によって～罪を赦されました</p> <p>天のお父さま、イエスさまが十字架で僕たち私たちの罪の身代わりに、神さまのお怒りを受けて、血を流して死んでくださいました。そのおかげでわたしの罪は赦されました。そのことを今日も感謝いたします。</p> 	<p>3月22日（土） 問84 マタイ6章13節 悪い者から救ってください</p> <p>わたしたちは弱虫でしょうか。そうです、とても弱いのです。弱いことを隠したり、強いふりをする必要もありません。私たちは弱くても、主イエスさまは強いからです。イエスさまがわたしたちのチャンピオンですから、このお方の側に立ち続けていれば、わたしたちは悪に負けないのです。</p>

いのちのばん

<p>3月24日（月）問84 マタイ26章41節 誘惑に陥らぬよう～祈っていなさい</p> <p>弱い私たちが勝利者になるための道が一つだけあります。主の祈りを祈ることで。イエスさまと一つに結ばれるとき、聖霊なる神さまは私たちの内側に住んでくださいます。ですから、「悪より救い出したまえ」と祈り続けましょう。</p> 	<p>3月27日（木）問85 歴代誌上29章11節 すべてのものはあなたのもの</p> <p>主の祈りの最後の部分は教会の賛美のことはです。「国（神さまのご支配）と（神さまの）力と栄えは、ぜんぶ、いつまでも神さまのものです」と御名を賛美しないでは、お祈りを終わらせられないのです。わたしたちが大胆にお祈りできるのは、この神さまにお祈りしているからです。</p>
<p>3月25日（火）問84 エフェソ6章11節 悪魔の策略に対抗して立つこと</p> <p>悪賢い計画を立てて神さまにはむかうのが悪魔です。けれども、神さまに勝てるはずはありません。イエスさまは十字架で大勝利されました。わたしたちは主イエスさまの兵士です。悪魔を打ち倒す強力な武器をもらっています。「み・れ・お」です。信仰を強められて、勝利は確実です。</p>	<p>3月28日（金）問85 黙示録22章20節 然り、わたしはすぐに来る</p> <p>天のお父さま、「教理」を知れば知るほど、お祈りができるようになりました。感謝します。イエスさまが再び来てくださるとき、すべての願いはかたがたありません。お約束を信じて待っています。その日まで、毎日、聖書を読んでお祈りできるように助け導いて下さい。</p> 
<p>3月26日（水）問84 テモテ二4章18節 すべての悪い業から助け出し</p> <p>パウロ先生はイエスさまのためにライオンに食べられそうになりました。しかし、救い出されました。確かにイエスさまに従うことは、何でもうまくいくというようなことはありません。でも、信じて従うわたしたちには天国が開かれています。心を高く、天へとあげなさい！</p> 	<p>3月29日（土）問85 コリント二1:20 この方を通して「アーメン」と唱え</p> <p>自分が何を祈りしたか、忘れてしまったことはありませんか。でも、眞実（＝アーメン）の神さまはあなたのお祈りを決してお忘れになりません。あなたのお祈りは、まるでイエスさまのお祈りのように聴かれています。安心して、一言、アーメンと仰ってください。立派なお祈りになります。</p>

2008年4～6月カリキュラム（第29号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月6日 進級式	人生の目的……礼拝	問1	ウ小1、ジュネ1
		ヨハネ17:3	ヨハネ17:3
神を知り、愛して礼拝するところに、人の真実の命がある。礼拝に生きよう			
13日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小1、ジュネ1
		ローマ11:36-12:2	ローマ12:1
神のものとされていることを喜んで、神に自らをささげて生きよう			
20日	救いの喜び	問2	ウ小34
		ルカ19:1-10	ルカ19:5
主がわたしたちを捜し求めておられる。主イエス・キリストとの出会いを喜ぼう			
27日	神の子の喜び	問2	ウ小34
		ヨハネ3:1	ヨハネ3:1b
神の子と呼ばれるほどの神の愛が注がれていることを感謝しよう			
5月4日	霊と真理による礼拝	問3	子15
		ヨハネ4:1-26	ヨハネ4:23
主イエス・キリストを土台とする礼拝、霊と真理による礼拝をささげよう			
11日 聖霊降臨祭 母の日	聖霊降臨・教会の誕生	問3	子65
		使徒2:1-13	使徒2:11
聖霊が注がれた教会に結び合わせられていることを喜び、共に生きていこう			
18日	神と人を愛する（一）	問4	子40、ハイデ4
		ルカ10:25-37	レビ19:18b
神の愛によって愛する幸いを与えられている。神と人を愛する愛に生きよう			
25日	神と人を愛する（二）	問4	子83、ハイデ4
		ルカ6:27-36	ヨハネ4:18a
敵をも愛する神の愛を知ろう。わたしたちは、その愛によって罪赦されている			
6月1日	神の御言葉	問5	ウ小2, 3, 89、ウ大2, 3, 155
		テモテ2:3:14-17	テモテ2:3:15b
聖書の御言葉によって、神は今も語っておられる。御言葉の恵みに生きよう			
8日 花の日	愛の手紙	問6	ウ小3、ウ大3-5
		使徒8:26-40	使徒8:35
聖書はキリストの福音を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取ろう			
15日 父の日	霊なる神	問7	ウ小4
		詩編139:1-10	詩編139:5
神は霊であり、あまねく統べ治めておられる。神との交わりに生きよう			
22日	唯一の神	問8	ウ小5
		コリント1-8:1-6	コリント1-8:6
真実の神はただお一人である。偽りの神々をしりぞけて生きることにと立とう			
29日	生ける神	問9	子46、ウ小5
		イザヤ44:9-20	イザヤ44:9a
真実の神は今も生きて働いておられる。まことの神を仰いで、依り頼もう			

2008年度 年間カリキュラム

二年サイクル第1年（子どもカテキズム問1～36）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第29号	4月6日	進級式	第一部 人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
	4月13日		神の栄光をあらわす	問1
	4月20日		救いの喜び	問2
	4月27日		神の子の喜び	問2
	5月4日		霊と真理による礼拝	問3
	5月11日	聖霊降臨祭 母の日	聖霊降臨・教会の誕生	問3
	5月18日		神と人を愛する（一）	問4
	5月25日		神と人を愛する（二）	問4
	6月1日		神の御言葉	問5
	6月8日	花の日	愛の手紙	問6
	6月15日	父の日	第二部 信仰の道 霊なる神	問7
	6月22日		唯一の神	問8
	6月29日		生ける神	問9
	30号	7月6日		三位一体の神（一）
7月13日			三位一体の神（二）	問10
7月20日			主権者なる神	問11
7月27日			天地創造（一）	問12
8月3日			天地創造（二）	問12
8月10日		(平和)	平和を創り出す	
8月17日			摂理の神（一）	問13
8月24日			摂理の神（二）	問14
8月31日			人間の創造	問15
9月7日			人間の罪	問16
9月14日		(敬老の日)	罪と墮落	問17
9月21日			罪の悲惨	問18
9月28日			わたしも罪人	問19

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第31号	10月5日		神の怒り	問20
	10月12日		贖い主の必要性	問21
	10月19日		二性一人格（一）	問22
	10月26日	宗教改革記念日	二性一人格（二）	問22
	11月2日		主は救い、イエス	問23
	11月9日		神の御子、キリスト	問23
	11月16日		謙卑のキリスト	問24
	11月23日		高挙のキリスト	問24
	11月30日	アドベント	預言者イエス	問25
	12月7日	アドベント	大祭司イエス	問26
	12月14日	アドベント	真の王イエス	問27
	12月21日	降誕祭	御子イエスの誕生	—
	12月28日	年末	一年の感謝	—
2009年 第32号	1月4日	新年	恵みのみ	問28
	1月11日		選びと有効召命	問29
	1月18日		キリストとの結合	問30
	1月25日		罪の赦しと義認	問31
	2月1日		神の子とされる幸い	問31
	2月8日	(信教の自由)	聖化の恵み	問32, 33
	2月15日	レント	愛の歩み	問32, 33
	2月22日	レント	神の民の祈りの家	問34
	3月1日	レント	キリストの体なる教会	問34
	3月8日	レント	再臨の約束	問35
	3月15日	レント	再臨に備える	問35
	3月22日	レント	死のときの祝福	問36
	3月29日	レント	復活のときの祝福	問36

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満7年となり、第28号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2007年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

〈執筆よりひとこと〉

- 幼稚科の生徒の顔を思い浮かべて書きました（小堀昇）。
- 今回はヨハネの黙示録のテキストが選択されていきましたので、それを子どもたちにどのように伝えるかを苦勞しました（勝田台教会牧師、安田恵嗣）。
- 子供たちの心の闇にイエス様の福音の光が輝きわたるために、教案誌が用いられるならば真に幸いです（豊明教会牧師、梶浦和城）。
- 中学科での一年間の奉仕の恵みを主に感謝いたします（岡本告）。
- 創刊以来、一度も欠けることなく遂に第28号をお届けいたします。7年間の歩みを支えて下さった執筆奉仕者、編集奉仕者、そして読者の皆様に、何より志を与えこれを支えて下さいました神に感謝いたします。情性に陥ることなくなお励めますよう、引き続きお祈りをお願いいたします（相馬伸郎）。
- この一年も教案誌の発行が守られ、感謝しています。この営みが、おのおの教会の教会学校・日曜学校の益となり、よい実りをもたらすことを願っています（望月信）。

〈あとがき〉

- 一年の締めくくりの時期を迎えました。この号では、黙示録を取り扱い、天上の主イエス・キリストを仰ぐこととなります。わたしたちの信仰の姿勢を正し、再臨の主イエス・キリストを待ち望み、新しい年度に備えて参りましょう。
- 救済史（聖書物語）にもとづく二年サイクルのカリキュラムは、今号で終了です。次号からは、みたび『子どもカテキズム』に基づく二年サイクルカリキュラムでお送りします。キリスト教教理の学びを中心に据えて礼拝をささげることになります。基本的に同じカリキュラムとなりますが、聖書箇所を工夫したり、いただいたご意見ご指摘を生かしたかたちで学ぶことができると願っています。お祈りください。
- 成人科では、吉田隆先生により、十戒をとおして「善き生活」について学んできました。来年度は、これまでのようなかたちの成人科は休止させていただきます。ご容赦ください。その代わりになるか分かりませんが、他教会・他教派の教会教育事情を紹介する記事を予定しています。
- この一年間、表紙は、吉田恵美子姉のご奉仕をいただきました。心からの感謝を申し上げます。次号からは、引間裕子姉が担当して下さいます。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	大西敏雄 (尾張旭教会牧師)
梶浦和城 (豊明教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
巻頭説教	小野静雄 (多治見教会牧師)
袴田康裕 (園田教会牧師)	梶浦和城 (豊明教会牧師)
教会学校・日曜学校訪問	分級展開例
小林義信 (銚子栄光伝道所協力牧師)	幼稚科 小堀 昇(いずみ伝道所協力教師)
聖書研究	小学科下級 勝田台教会日曜学校教師会
芦田高之 (新浦安伝道所宣教教師)	小学科上級 豊明教会日曜学校教師会
弓矢健児 (新座志木教会牧師)	中学科 岡本 告 (秩父教会牧師)
宮武輝彦 (芸陽教会牧師)	成人科 吉田 隆 (仙台教会牧師)
松田基教 (高松教会牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
金原義信 (鈴蘭台教会牧師)	弓矢容子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)
山下朋彦 (平和の君伝道所宣教教師)	表紙イラスト
説教展開例	吉田恵美子 (千里摂理教会)
望月 信 (高蔵寺教会牧師)	本文イラスト
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	弓矢容子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
梶浦和城	豊明教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2008年1・2・3月号 (季刊)
第28号
2007年12月2日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
